恋　愛　論

高群逸枝

目　次

著者の言葉　三
第一章　恋愛の起原　五
第二章　恋愛と生殖――その目的　七
第三章　両　性――その使命　一一
第四章　貞操とその死　一八
第五章　ヨーロッパに於て――男性の寂蓼　三八
第六章　婦人の世紀　七〇
第七章　近代思想芸術と恋愛観　九七
第八章　近代娼婦主義　一四一
第九章　社会革命思想　一八三
第十章　結び――貞操の復活　二〇五

著者の言葉

1 私は、この恋愛論で、これまでに出ている恋愛論の多くが、主として自然現象としての恋愛を対象としているのとは、趣(おもむき)をかえて、主として社会現象としての恋愛を、取り上げているのである。このことが、この書が他のものと区別せらるべき第一の特徴であると思う。そして私は、この書の構成を理解していただくために、読者に、まず第十章から読まれることを、お願いしたいのである。そうすると読者は、その概略を知ると共に、若干(じゃっかん)の新奇な思想や、聞きなれない言葉に出会って、自(おのず)ら心に質問を用意せられるであろう。それを持って第一章から読まれるなら、そうでない読み方よりは理解が容易であろうと思う。

2 近代の恋愛論は、たいがい恋愛と生殖とを一元的に見ている。この書はこれを別個のものと考える。ここに私の学説（仮説）が成立する。この事は、実践に及ぶ時、大きな差異を齎(もたら)すであろう。

3 著者は、恋愛を、青年の一時の熱病などとは思わない。また、結婚をその墓場などともしない。結婚を通じ、生涯をかけて完成するものと考えている。この意味で、この書が、多くの老若男女につながることを信じたい。社会人または個人としてのあらゆる階層のかたがたに、読み、かつ、考えていただきたいことを希望したい。社会と家庭との革命のために。

4 この書は、私にとっては、思いがけない事情のもとに書かれた。私は殆(ほとん)ど執筆を謝して、女性史研究に没頭しているのであるが、予定された生活費が、あることのために断たれて、苦境に落ちた時に、私に可能な道は、婦人論か恋愛論を書きおろして、金にかえることしかなかった。約二十年前、私は、自分の生涯の仕事として、三部作を計画した。この事は、既著女性史第一巻『母系制の研究』の践文(ぱつぶん)

にも書いているが、その三部作は、婦人論、女性史、恋愛論で、その後、女性史のためにのみ全(すべ)ての時間を取られ、他の二作に手をつける事は不可能となり、今後も多分そうであろうとは思っていたが、断念したのではない。折りに触れ、資料を蓄え、思想を暖めていたのである。たとい変則的な事情のもとに書かれ、所期のものとは遠いとはいえ、この書の生まれたことに、私は、なお喜びを持たずにはいられない。

5 諸文献から借りて自己の文中に取り入れたものも多くあり、引用したものも少なくない。いちいち明記することは、これを省かねばならなかったが、ここに恩を深く感謝しなければならない。

6 疑いもなくこの書は私の習作である。私の学説（仮説）や、史観や、個々の事実等の過誤を発見せられた読者は、幸いにお教えを惜し稀(まれ)ざらんことを。

昭和二三年四月三〇日

高　群　逸　枝

第一章　恋愛の起原

一

恋愛の起原は、遠い一般生物の中にあるであろう。厳密には、初期古生代の植虫や、花形頭や、三葉虫の中に。

単細胞動物の性生活を見ると、初め、二個の細胞体が接触合一して、一個の細胞となり、これが二個に分裂して、両個体となり、さらに、次々に四となり八となり、次第（しだい）に増殖して行き、この増殖が数百回継続して、ある時期に達すると、再びある二個の細胞体が合一して、さらに分裂して行く。

この増殖の間に、その細胞がいつまでもまったく抱合しないで、分裂を続けて行く時には、次第（しだい）に老衰し、抱合すれば、さらに若返って活力が生ずると云われるが、こうした性生活にも、すでに生殖と、そしてそれとは別な恋愛意志の存在が、認められると思う。

両個の細胞が合体し分裂する所には、合体すると云う恋愛意志（その個体の恋愛意志であるよりは、より多くこの段階までは自然の恋愛意志）と、分裂すると云う生殖意志（個体の生殖意志でなく、自然の生殖意志）があるのであろう。そして、こうした自然意志が、次第（しだい）に個体に取り入れられて、個体の恋愛意欲となり、また個体の生殖意欲となったものであろうと思う。つまり、自然の意志を、個体が自覚して、自己のものとして感じ、自己のものとして行なうようになったのであろうと思う。

卵と精虫とが接触合一する器械的作用を、観察して見ると、精虫は自ら（みずか）運動して、静止する卵細胞の方に行き、その卵中に入るのである。

人間の場合では、性行為の度ごとに、およそ二億と云う数の精虫が子宮内に入り、輸卵管の内にある一個の卵の方に向かって、競争をする。その先頭に立った一個の精虫が、卵の内に入れば、卵は直ちに膜を閉じ、ほかの精虫の侵入を拒む。

精虫が卵の方に進む時、とまどいせず、一定の方向に行くのは、果たして、精虫にどんな気持や思惑があってのことだろうか。銀杏の生殖に付いて実験した結果によれば、この精虫は蟻酸と云う物質のある方に向かって運動すると云う。

およそ単細胞動物では、その種類に従って、各々その好む物質または刺戟があって、その動物はこれを追求し、その方に集まるのである。たとえば、種々の原生動物は、ある一定の光線、温度、ある物質の溶液等、各々好む所に従って、その方に集まること蟻の甘きにつくようなものである。そこで、精虫が卵の方に進む場合も、ある一定の刺戟に対し、衝動を起こし、その方に牽引されるものと思われるのである。

この、ある一定の刺戟と云うのが、恋愛上の「美」の起原で、それに向かって衝動を起こし、牽引されると云うところには、すでに恋愛意志（生殖意志を裏付けた）の存在が、認められるのである。

第二章　恋愛と生殖――その目的

二

恋愛とは、合体の本能であり、生殖とは、分裂の本能である。この二つは別個のものであり、相反するものである。とはいえ、無関係な二つのものと云う意味ではない。

自然意志は、この二つをかち合わせながら、後(のち)にも云うように、次第(しだい)に生殖を弱め、長い年代の後(のち)には、無性化（性の完全な合体）へと、歩み至るのではなかろうか。

けれども、説をなす多くの人々は、恋愛と生殖とを、結局同じもの、または、相(あい)伴って種の永遠の増殖に向かって進むものとし、この二つを、相反し、相(あい)抑制し合う二つの別個の本能とは見ない。

ところが、生殖意志のみであるようにさえ見える原始生物から、次第(しだい)に恋愛意志が顕著となり、恋愛意志が生殖意志を左右するようになって来る高等生物に至るまでの過程を見ると、恋愛意志が進化すればするほど、生殖意志は退化して来ている。

原始生物は、一秒時間に幾千万と云う子供を生むが、高等生物は、一生涯に一人または数人と云う有様(ありさま)である。未開人よりは文明人、現代人よりは次代人と、我々が知性化するにつれて、この傾向は、押し進められて行くに違いない。そこで次のような仮定も、或(あるい)は成り立つかもしれない。

「恋愛の進化と生殖の進化とは反比例する。」

三

恋愛と生殖の関係に付いては、古くから、色々な説がある。近代以前のヨーロッパでは、第五章で見るように恋愛と生殖は、まったく別個で、かつ無関係のものであると、考えられた。いわゆるプラトニック・ラヴであって、だから恋愛は、同性間でも成り立つとされた。プラトンの時代では、むしろ同性間の恋愛こそ、生殖をはっきり撥無（払い除けて信じないこと）しているのであるから、理想的であるとされた。

騎士時代からダンテ頃にかけては、このプラトニック・ラヴは、同性間よりもより多く男女間に推移して来るが、それでも生殖とは無関係であるとされることには、かわりはない。そして、そこでは、恋愛は神聖で尊く、生殖は卑しいとされたのである。

恋愛の尊さに付いて、エミル・ルカは、

「真の恋愛家は、一度自己の要求に適った人物を発見すれば、自己の熱情を完全に実現せんとする意志に圧倒されてしまう。それは至上の幸福と無限の悲哀とを左右に伴い、唯一無二の確然たる理論を持って現われて来る。一の霊魂をその孤独から救い得るほどの恋は稀であるが、しかし一度現われるや、その前には全世界も空に帰してしまう。一切の生活は恋の魔力に包まれ、その下に立たせられる。この種の恋人は自ら無条件で恋愛に降るものである。

しかし、そこに超ゆべからざる障壁が現われ来たるのは、実にこうした、圧倒的の恋に於てである。恋人同士は両個の人間であって、不可分の一体ではない。個性なる根本事実が二人の間に介在し、彼等の完全なる一致を妨ぐる最後の障害となっている。感情が烈しいほど、それは勢い猛烈にこの障害に向かってぶつかり、完全なる相互の呼吸を排除しようとし、そうしていよいよ猛烈に共同存在の他の形式を要求する。個性と永遠の隔離的存在が呪わしくなる。恋人同士はもはや別々の人格として生活を続けることを思うさえ耐え難くなる。」

と云い、恋死を持って偉大な恋愛の究極であり、あるべきだと、彼は考えているのであるが、彼の如(ごと)きは云うまでもなく、プラトニック・ラヴ者の一人であると云える。

このプラトニック・ラヴ者の悲劇は、すなわち、人類の進化過程を飛躍して、その途中に置かれた個体と個体をもって、恋愛意志の究極である完全な合体を、現実に、しかも中絶的に顕現しようと云う点にある。

近代になると、考えかたが逆になる。プラトニック・ラヴでは、恋愛のみを至上と考えたが、近代では、第七章で見るように、恋愛の根源は生殖（肉欲）であるとされて来る。

ショーペンハウアーの如(ごと)きは、恋愛は生殖意志の詭計(きけい)に過ぎないと云っている。だから、恋愛の神聖はここにきて仮面をはがれ、その反動として、肉欲万能の世紀となるのである。

けれども、恋愛至上と云い、肉欲万能と云う、共にそれらは、より多く男性の見方であって、第六章で見るように、女性は母性の本能から、自(おのず)からそれらとは別個な見方をする。

すなわち、尊い恋愛によって、正しく生殖して、良い子孫を生もうと云うのである。ここでは、恋愛と生殖とのいずれもが、蔑視されることなく、厳粛に結合される。そして、結婚生活（従来生殖的の意味にのみ考えられていた）をも、恋愛生活の持続とするが、これは女性の自覚が持った革命的な考え方である。ここにきて、恋愛と生殖とを分離した人為的結婚制度が、始めて自然的のそれへと復元するのである。

ただ、この思想の先駆者であるエレン・ケイの時代までは、前に云った近代の生殖重視の時代思想に引きづられてなお重心が生殖におかれ、しばしば恋愛を持って、生殖の道具視するような偏見が見られる。従って、至純な恋愛は、ここでは結局期待されず、かつ、生殖の重視から、婦人を母性専門業者とすることによって、過去の結婚制度と同じく、婦人を生きた全人格的人間とせず、単なる生殖器械ないし保姆(ほぼ)職

とする偏見にも陥(おちい)っている。

女性の性生活における自覚は、必ずしも生殖者としてのみのそれであるべきではない。勿論(もちろん)生殖と不離のものであるべき事は当然であるが、それと共に、恋愛者としてのそれでもなければならない。

だから、エレン・ケイのように生殖偏重――ひいて女性を生殖器械視するのは当(あた)らず、恋愛の示す両性の一体化への渇望に於(おい)ても、それ独自の至純性が生かされねばならない。

この意味で、恋愛と生殖、この両者に付いては、そのいずれをも蔑視せず、また重視せず、道具視せず、両者を別個のものであると同時に、不離のものとして理解し、独立性と共に関係性を持たすべきであると、私は考えるのである。その時、恋愛も、生殖も、それ自身始めて自然性を生かすものとなるであろう。

プラトニック・ラヴのように、恋愛のみを偏重するのも、近代思想のように、生殖や肉欲のみを偏重するのも、すべて誤謬であると云わねばならない。なによりいけないのは、そうした学説が現実に齎(もたら)す実践的害悪――ことさらな肉欲蔑視や、逆に恋愛蔑視、道具視などが齎(もたら)す実生活上の不自然さである。そこには当然、偏執や、頽廃のみが、結果されるであろう。

繰返して云えば、恋愛は合体（もしくは自己解消）を理想とするものであり、これに対して生殖は分裂（もしくは自己保存）を意志するものである。これはアミーバの昔から不変の原則なのである。

では、この両者の関係は、究極なにを指向するかと云えば、前にちょっと触れ、後(のち)にもたびたび触れるであろうように、それは人類の無限の増殖よりは、人類の完全な合体――無性化、そして人類の寂滅（もしくはさらに他の新生命への発展）なのであろう。

第三章　両　性――その使命

四

アメリカの社会学者レスター・ウォードは、普通に生殖と云うと、誰でもすぐに男女両性のことを連想するが、生殖と両性とは、決して同じものではない。生殖は、生物増殖の一方法であり、生命永続の一方法である、いわばこれは静的のもので、単に原型を、そのまま存続するだけの働きに過ぎない。それ以上に、さらに一歩を進めて、組織上の変化を来たそうとするには、ぜひ、別に動的の作用を加えねばならない、それが、すなわち、異質混和の交精作用――両性関係である、と云っている。

蓋(けだ)し、生殖は、生命の分量的増加にのみ関するのであるが、両性関係は、単に分量の増加ばかりでなく、別に性質上の進歩をも成し遂げる。

けれども、ここに注意を要するのは、性質と云っても、畢竟(ひっきょう)分量に帰着する、結局分量の増加のみが、常に真の目的であって、性質の進歩は、いつも、その手段になっている事である。

つまり、ウォードも、他の多くの生殖一元論者のように、生物は、限(かぎ)りなく子孫を生み、限(かぎ)りなく子孫を増殖するものだと見ている。両性が分化して、生命に質的変化を与えたけれども、結局はそうした質的変化よりも、増殖が土台であると云うのである。

こうした見方が、女性中心であらねばならない事は、云うまでもない。なぜなら、女性こそは、生殖の母胎であり、生殖体であるからである。云うまでもなく、彼ウォードの「女性中心説」は、すなわちこの生殖一元論から来ているのである。

「男の女における関係は、両性の生殖における関係である。生殖は、両性がなかった以前から存在している生物の生命の根源、生命繁殖の機関であるが、両性は、その生命の流れに適宜の活力を与えるために派生した付属物である。それと同じく、女性は男性のない以前から存在している生命の根源であって、男性は女性の使命に活力を与えるために派生したものである。だから、女性は当初から殆ど変わらないで、ただ男性だけが変化を遂げて来たのである。それは、女性が生命の根源であるからである。」

こう、ウォードは考えている。

けれども、両性が生殖に対して、果たして単なる派生物であるだろうか。

男性が女性に対して、果たして単なる派生物だろうか。

最も、生殖一元論に従うならば、たとい両性や男性が、生殖や女性に対して、若干特異な価値を持つとしても、根源はやはり生殖であり、女性であると云わねばならない。生殖や女性なしには、生命の永続は考えられないからである。結局、男性は、性交を終われば快く死滅する蜜蜂の雄であり、性交を果たした後の肉体まで、女性の栄養のために与えてやらねばならない蜘蛛類の雄であるわけであろう。

けれども、私は思う。男性の女性における位置は、理性の本能における（もしくは理知の叡知における）位置に同じいのではなかろうか。理性は本能から作られ、本能は理性を受容して高められる。そして、次第に相伴って進化する。それと共に、人類は原始的生殖能力を稀薄にし、男女の性差をもなくして行く。また極度に知性化し、遂に消滅し或は他の新生命へ発展的解消をする。これを宗教語で云えば、空化または昇天する。すなわち科学なり宗教なりが個人の死に対して考えていることが、人類一般に対しても適用せられるのではなかろうか。

こんなに考えれば、女性中心説も、男性至上或はそれと逆な派生物視も、総てがそこでは意味を失うの

である。なぜなら、そこでは女性は女性、男性は男性で、各々独自の、そして独立的の使命を、人類の進化に対して負うものだから。

五

このように、我々は、原始生殖体に、両性と云うものが出来たと云う点に、恋愛本能の鮮明な表現を見出す。恋愛本能は、生殖本能とは違って、繰返し云うように、「合体」と云う個体的目的を持って終始する。その合体は、常に心的意欲が先で、後に実体的に具現すると云う順序に於てなされる。そして、それは両性の相違、すなわち各自の特徴を持ってなされる。

精子細胞（男性細胞）と、胚種細胞（女性細胞）の結合を、生物学者の教えに従って観察すると、胚種細胞は、いわゆる実体者として、ただ一個で静止している。精子細胞は、いわゆる異質者として、無数の数からなっており、胚種細胞の引力に牽かれ、それに向かって突進する。そして、そのあるものが関門をパスして合体するが、この牽引や突進が、個体の意欲として自覚され、認識される時、恋愛と云う名で呼ばれる事は、前にも書いた通りである。

ところが、細胞たちは合体が可能であるが、人間には不可能である。手と手を混ぜあい、内臓を一つにし、二つの頭を割って、ある一つの頭を作り上げると云うような事は、人間には出来ない。だから、人間の恋人達は、生活の髄、内部の髄を一緒にしようとする。それは、単に肉体的に抱擁したばかりでは、成し遂げられない。心的な抱擁、ある得体の知れない生活での抱擁を、恋人達は求めてあせる。より深く、より密に、こうして恋愛は進化するのである。

しかも、恋愛は、あくまで実体的に合一せねばならない宿命を持っているから、恋愛の進化が深まり、

高まるに従い、男女両性の精神的な、そして肉体的な相違もが、次第に取り除かれて行き、原始生殖体のような、男でも、また女でもない「無性」――もしくはプラトンの「アンドロギュノス」（両性人）にまで還元する未来を持つものではなかろうか。

ウォードは、女性は当初から殆ど変わらず、ただ男性だけが変化を遂げて来たと云う（生殖一元論者は総てこう云う見方をする。ショーペンハウアーも女性の不変性を指摘している）が、それがいかに間違った考え方であるかを知るには、今後、たいした年代を要しないであろう。

最も、女性の進化は、男性とは多少方法に於て違うかもしれない。女性は本能的（実体的）に進化するであろう。本能（実体）の進化が、すなわち女性の進化であろう。

つまり、精子細胞による異質混和が、胚種細胞を別個の実体へと組織を一変させるように、男性に点じた理知を、女性が受容すれば、女性はそれを本能化（実体化）して行くのである。愛の観念にしても、男性のそれが理知の愛であり、理知を失えば即座に消える愛である時、女性のそれは本能の愛――愛の本能化で、だから、愛はもう愛と云う名前を必要としない。生活自体になっているからである。さらにその時女性は、内部的自覚をなし、新しい叡知を生むであろう。そして、それはさらに男性の、新しい理知を育成する母胎となるべきものであろう。

男性の理知は、女性の叡知から作られ、それをまた女性が受容して本能化し、叡知化して行くのである。

こうして、進化は、より知的な方向に向かって高まって行くのであろう。

女性の財産は本能であると云えよう。高く進化した本能の女性は、それだけ高く進化した美を持ち、叡知を持ち、そして選択能力を持つであろう。低い段階の女性は、その低い選択能力によって、金持の男性とか、世之介（井原西鶴「好色一代男」の主人公）式の男性を選ぶであろう。これに反して他の女性の選択意識は、男性の

内部に向けられるであろう。内部以外のものを彼女は多分見ないであろう。彼女は直感と愛を持って、周囲の無理解と迷蒙の中から、しばしば優(すぐ)れた対象を発見するであろう。それは、低い段階の女性が、社会的もしくは世間的名声の中からのみ相手を選ぶのに対して、まさしく対蹠的(たいせきてき)である。

このような女性の恋慕は、人生の花であると云える。なぜなら、女性の恋慕によってのみ、男性は発見され、女性と共に不死となるであろうから。

同じ事は、男性にも云える。男性もまた、自己の理知の度に従って、女性を選択し、見分ける能力を持つのであり、女性の美や徳性はそれによって不断に、そして多分、より知性的に淘汰され推移して行くであろう。

右の両性説（なお第七章にも詳述してある。参照）は、しかし勿論(もちろん)私の仮説であり、一般論である。両性の個性差に対しては、従来色々な説があるが、その特異なものにヴァイニンガーがある。彼は、

「人類、植物、動物の第一期の胎生状態に於(おい)ては、性的差別が全くない。たとえば人類の場合でも、胎生五週間までの胎児は、まだ明確な性と云うものを持っていない。妊娠三月の終わりに近づいて、やっと分かり出す。また、どんな女性的な婦人でも、男子の鬚髯(しゅぜん)（ほおひげとあごひげ）の位置には柔毛を持っているし、どんな男性的な男子も、乳房の下には発展を中止した乳腺の組織を持っている。」

と云い、また、

「純粋な男女と云うものは存在しない。実際に存在するのは、無数の中間物のみで、我々はただ、現象界に存しない理想的な男子、理想的な女子と云う性的類型を、思考し得るだけである。

実際上、一般に存在しているのは、男子的な人間、女子的な人間で、比較的男性の分子の多いものが男と呼ばれ、女子的な部分の多いものが女と呼ばれる。」

と云っている。そして、彼によれば、女子的な部分と云うのは性欲（生殖）であり、男子的な部分は理性であると云う。

ヴァイニンガーは、両性と云うものは、肉体的区別にはなく、内部的な要素にのみあると云うのである。そして、内部的な要素は複合しているから、どんな男性でも若干は女性であり、どんな女性でもまたいくらかは男性であると云うのである。

こうして彼は、現実の世界に於て、截然たる男性または女性を見ることがなく、実にアンドロギュノスの存在のみを見たのである。

ヴァイニンガーのこんな両性説に付いて、

「肉体の一部分である生殖器の相違が、無限に異なる個性を真っ二つに切り裂き、男と女のレッテルを貼り、全く異なる法則のもとに生活を支配された全歴史を振り返る時、ヴァイニンガーのこの革命的な見方は、文字通りコペルニクス的転回と云えよう。」

と村上信彦が、その著書『女に付いて』の中で云っているのは、卓見であると思う。

ただ、「現在の男女の能力を自然の男女の能力とする」点に、ヴァイニンガーの限界があると、彼も云っているように、優れた性すなわち理性的な性を男とし、劣った性すなわち生殖的な性を女とすると云う点で、ヴァイニンガーの説はうなずけない。

むしろこの点では、前述の私の仮説を、より公平なものとしたい。

しかし、前記村上信彦は、「男と女の差は、生殖器の相違で足りる。これ以外の本質的な相違は一つもない。」と云って、ヴァイニンガーや私のように、両性の性差を云為することに反対しているが、これもまたあるいは頷くに足る説であろう。両性の個性の差は、若干の生理的反映（私の前述の仮説のような）

を除けば、一つもない――もしくはなくなりつつある――事は事実であろうし、しかも生理的反映の部分ですらも、ヴァイニンガーが見たように、結局複合し、混和し、アンドロギュノス化しつつあることも、またある程度事実であろうから。

両性を生殖から区別し、また男性を女性から区別して、前者を持って後者の使命に活力を与えるための派生物とするウォードの見方、現実世界には截然（せつぜん）たる男子、または女子はなく、男女の複合体のみが存在するが、その複合体の男子的部分は理性で、女子的部分は生殖であると云うヴァイニンガーの見方など、これら色々の両性説に対して、両性や男性は、生殖や女性の単なる派生物ではなく、したがって前者がそれ自身の使命を結局に於（おい）て持たず、後者の使命（生命の増殖）に依存するなどと云う見方の誤りであり、前者後者とも独自の、そして相関連する使命を持って、人類の進化に役立っていること、また、理性的部分が男子で、生殖的部分が女子だとするのも偏見で、男にも女にも理性的要素（男は理知的、女は叡知的）もあり、生殖的要素（男は精子的、女は卵子的）もある、ただ生理的関係から、多少その質を異にしているのみであるが、そうした差も、漸次（ぜんじ）消滅するであろうとの見解に私は立つものであり、それをこの章では述べたつもりである。例証を省いた関係もあって、表現がやや適確を欠いているが、第一、二章をも参照して、意のある所を汲（く）み取られたい。

第一、二、三章は、主として自然現象としての恋愛を観察したもので、私の恋愛論の序説的部分を構成するものである。

第四章　貞操とその死

六

我々は、これから本論に移り、社会現象としての恋愛を考究する。この章は、正しい恋愛の基準としての貞操の本質と、その人為的歪曲を見ることから始まる。

恋愛が、人類の進化を順当ならしめ、多くの幸福感や、知恵や、その他人生に実り多い数々の美果を齎(もたら)すためには、男女の真の貞操こそが、その鍵となる。貞操は男女に於(おい)て、光栄ある宿命である。

今日(こんにち)の男女は、すでに親の希望によって結婚する結婚、自分もまた、観への愛故(ゆえ)に、全心身を捧げようと願う結婚にすらも、貞操の厳として顔をそむけている場合の、あまりにも多いことを知り始めている。

こうした貞操は、原始社会では、勿論(もちろん)踏みにじられることがなかった。ちょうど猫類の貞操が、踏みにじられることがなくて、恋愛の鍵となって存在しているように。

猫類は、貞操と云うべきなんらの観念も、なんらの自覚もなく、しかも完全に、貞操を持っているのである。たとえば、いわゆる「毛ぎらい」と云うように、自己の好まない相手には、決して許さないと云われる。それと同じく、原始社会の男女も、貞操と云うべき特定の観念や、自覚はなくして、しかも確実に貞操を持っていたのである。ここで、「貞操とは何か」と云う定義が、会得(えとく)せられるであろう。すなわち、貞操とは、自分の心が善しと信ずる相手以外には、決して許さない操持を云う。（これについで、人間にあっては、第二の展開として男女の相互的貞操――すなわち相互的結合の操持が芽生える）

これは、しかし単なる形式的の意味のものでは勿論(もちろん)なく、不幸にして過誤に陥(おちい)る場合もあり得るが、そ

んな場合、長く捕われず、いつでも敢然と本来の操持に復活し得るような、そんな「心的態度」それ自身を云うのである。

しかし、人為的結婚制度が、社会的意義を持ち始めて以来、主として、まず女達が、次第に貞操を失って行った。ほかの動物にさえ劣る、空虚な「性」の持主になって行った。

そして、他からの命令のままに、自分の「性」を、たやすく売り渡したり、生活の手段としたり、もっといけないことには、真の変愛意志の代りに、人為的な錯覚を植えつけられ、一部の金力や権力を持つ男性のみを、最上の相手と感ずるようにさえ、作り代えられて行ったのである。

ここに貞操の死がある。

最も、そうなるまでには、数限りない圧迫や闘争や苦悩があった。

自然的結合のみが存在した母権制から、人為的結婚の樹立を見た父権制への推移に付いて、ベーベルは、

「フリードリッヒ・エンゲルスは、この大なる変化は、平和に行われ、そう云う変化を希望させるような、総ての先決条件が備わっていたので、この問題に付いては、氏族会議の投票だけで、母権制度のかわりに、父権制度を確立することが出来たと、主張している。けれども、バッホーフェンは、古代の文書を根拠として、婦人が、この社会的変化に、激しく反対したと云う意見を抱いている。彼は、東洋諸国、南アメリカ、中国等の歴史に、しばしば出て来る、アマゾン王国に関する多くの神話は、新制度に対する女子の闘争と反対との証拠であると、考えている。」

と云って闘争説を主張している。

コロンタイも、

「男子の権力の優越性、父権制――父権の支配が、たちどころに勝利したわけではない。長い間二つの

制度の闘争が続けられた事は、諸民族の口碑が、それを我々に物語っている。この闘争は、色々な古代神の生活や、闘争に関する伝説の内に、特に鮮明に描きだされている。」

と云い、

「ゲルマン民族の有名なニーベルンゲンの歌の中では、勇敢な武士が女性を自分に従属させ、自分の妻とするために、常に戦闘的な美人軍と戦わねばならなかったことを繰返し物語っている。美しい女王ブリューンヒルトを、彼女の花婿グンターは、ただ術策の一手で戦いとった。しかし、ブリューンヒルトは彼と結婚しながらも、彼に降服はしなかった。――こうした一切の生きた伝説は、人類が経過してきた長期にわたる父権との闘争の姿を、我々に物語っている。」

と云っている。

この闘争説に付いては、私自身は、女性史の研究によって、むしろエンゲルス説に（わが国に関する限り）根拠を見出しているが、この事は、ここでは別個の問題である。（拙著『女性史学に立つ』参照）

最も、スペンサーも、「征服と奴隷制度とは、その不当なことの認められない間は、大体に於て、常に有利な結果を生ずる。」と云っているように、かつての共産的社会が崩壊して、人々が生活のよりどころをなくし、不安におののいている時に、いち早く富を占有し、人を征服した強者が、奴隷制度と私有財産制度を確乎不抜な法制的なものとしたならば、多くの劣敗者たちは、目前の不安な生活よりは、むしろ大樹の蔭として、新制度を喜んだこともあろう。

これと同様に、大多数男子と共に、生活戦線から落伍し、無産者となった女性が、一部権力者階級が自己の私有財産を相続させ、永続させる手段として、人為的結婚制度を樹立し、女性の「性」を買い取ることにした時、三界に家なき女性は、これまたむしろ喜んで、自分の貞操を売り私たかもしれないのである。

けれども、不合理は結局不合理であり、苦悩はやはり苦悩である。

「魂と生命とを持つ、あらゆる総ての生物の中で、私たち女性ほど悲惨なものはない。」

と、古代ギリシアの作品の中で、ある女性が歌っているのに見ても、薄暗い婦人部屋の中で、女性本来の貞操を奪われてしまった婦人の悲しみは、自分の生命を自分からすり減らし、そして自分で見失ってしまうまでの間と云うものは、癒ゆべくもない痛烈なものとして意識されていたことと思う。

七

けれども、女性の没落は、男性の恋愛生活に、なんらかの寂蓼を齎さなかったであろうか。自然な恋愛は、女性の優秀な生活や、独立的な、だから容易には捉え得ない生きた人格に対する、男たちの尊敬や焦慮を原則として成り立つべきであるのに、今や彼等は、尊敬の対象、恋愛の対象を失なって、常に容易に捉え得る、無性格の、玩弄の対象としてのみの女性を得たのであった。そればかりか、奴隷としての女性を得たのであった。この事は、野蛮民族と文明種族とに拘らず、世界中の殆どの男性が、一度は大抵経験している事である

人種学者アイアーの挙げた所によると、オーストラリア土人の夫婦間には、殆ど真の愛情と云うものがない。男はただ奴隷としての労役を標準として、その妻の価値を評定する。

試みに、オーストラリア土人の青年に向かって、君らはなに故妻を求めるかと問えば、彼等はきっと、異口同音に答えるであろう。薪を採らせ、水を汲ませ、食事を整えさせ、そして、さらにその女の持物を占有せんがためにと。

彼等が、婦人を酷使虐待する事は、実にはなはだしいもので、少しでも気にいらないことがあると、す

ぐに殴りつける。脇腹に矛を刺し通すようなことも、決して珍しくない。打撲の痕や、突き傷の痕を持たない婦人はめったにない。アイアーは、全身突き傷で網の目のようになっている若い婦人を見たと云う。

スペンサーは、南アフリカのカフィル種族に付いて、こんなことを云っている。

「カフィル人の妻は色々の家事をするほか、さらに他の一切の苦役を果たさねばならない。彼等は夫の牛馬である。私は、あるカフィル人から、直接この言葉を訊いた。彼はまたこう云った。夫は妻を買ったのである。妻は夫のためによく働く義務があると。」

マダカスカル土人の酋長が家に帰って来ると妻は手を付き膝を付いて、その入口に匍匐(ほふく)して行く。そして夫の足をとって舐める。これは同地方では一般に行なわれている。ルツルノーは云う。

「アフリカでは、殆(ほとん)ど至(いた)る所(ところ)に於(おい)て妻は夫の財産である。夫は妻を駄獣として使役する権利を持っている。彼等は、ちょうど牛を使うようにして、妻を働かせている。」

また、ヒマラヤ地方の土人に付いて見ると、たとえばドイエムナー河の水源地付近におけるアーリアン種のインド土人は、チベットの一妻多夫制を模倣している。彼等は、実際婦人を売買しているが、フレーザーが、彼等の間を視察した当時にあっては、農民社会の婦人相場は、大抵(たいてい)十ルピーから、十二ルピーまであったと云う。彼らはまた、自身の娘を売ることを何とも思わない。彼等は兄弟同士で一人の妻を共通にしている。彼等はまた、容赦なくその共通の妻を人に貸す。

こうした社会では、女性は全然一個の「空虚」である。自然から与えられた貞操は、彼女達のどこを探してもない。

ギリシアのある一人の作者は、「プラクサゴラ」と云う創作の一節に、屈辱的な女性を警句的に揶揄(やゆ)している。

「彼女達は、皆同じように、昔やってきた通りのしきたりで、熱湯に着物を漬けるんです。少しでもその仕方を代える事はしません。彼女達は、昔のままに座って、料理の手を動かします。彼女達は、昔のように頭で物を運びます。彼女達は、昔通りに、テスモフォリア（デミィタの祭祀）を催します。彼女達は、昔通りに、良人（おっと）を働かせます。彼女達は、昔通りに、糖果を買ってきます。」

テオグニスは、夫婦関係を牧畜に比較した。アルクマイオンは、スパルタ女を「付属物」とした。

ギリシアにあって、婦人のシンボルが「亀」であった以上、かような酷評を甘受せねばならなかったのは、蓋（けだ）し当然の事であったろう。

ギリシアの男たちが、異性に求めて与えられない心の悩みは、思い半（なか）ばに過ぎるものがあった。彼等は彼等の社会的、個人的な便宜のために、女の個性、女の本能をいびつにした。そしていま、恋愛者としての彼等の前に、大きな空虚のあるのを知った。

しかも、彼等はそれを、女の無能に帰しているのである。

一般の婦人への幻滅と絶望とに、苦しんだ彼等は、何者かによって、その空虚を満たし、飢渇を癒すことに、焦慮した。

そして、それこそ実に変態的であり、かつ倒錯的である性的対象者を、彼等は発見したのである。云う所の二つの道――その一つは、「ウウルニング」である同性愛、他の一つは、「愛のためにヘテレを有す」と、インテリゲンチャの間の通語となっていた、一種の高等娼婦であるヘテレを相手として、醸しだされる恋愛の陶酔境であった。

同性愛は、伝説時代のギリシアにも存在していた。アキレウスとその最愛のパトロクロスとの、勇壮な情誼を基礎として出来ているホメロスの「イーリアス」は、それを語っている。

プラトンは、「饗宴」で、アリストファネスに、次のように言わせている。

「人間の性は、現在に於(おい)ては、男女両性に分かれているけれでも、原始時代にあっては、三つの性に、すなわち男性、女性及び両性合一の三性に分かれていたのである。次に原人の体は球形をなしていて、背中と胸とは輪のように連(つら)なっていて、四本の手と四本の足とを持っていた。円形の頸の上には、反対の方向に向いた二つの顔が付いていて、同じ一つの頭を頂(いただ)いていた。その顔は二つとも細かな所まで同一で、耳は四つあるし、陰部は二つあった。……これをある時神が両断してしまった。……人間は両断せられると、互いにその半分を求めて両手で抱きあって、一体に帰ろうと願った。……すなわち両性合一者（アンドロギュノス）の両分せられて出来た男子は、女子を愛するもので、多情な肉欲的男子は、通例この種族から出たものである。

ところが、原始男性の両分せられて出来た男子は男子を求め、その少年時代には、その男性の半分として成年男子を愛して、その傍(かたわ)らに横たわって、これを抱擁することを好む。この種の人は、天性最も男性的であるから、少年及び青年として、最も有為なものに属する。彼等のこの事をなすのは、勇気と胆力と男らしさをもつ自分と相似(あい)た対象を愛するからにほかならない。彼等が成長した暁、国家にとって最も有用な人物となるのが、その確かな証拠である。

成年に達すると、彼等は青年を愛するようになって来る。そして、結婚したり、子供をもうけたりする事は、天性その好まない所である。彼等は、法律の命ずる所に従って、やむなく結婚するに過ぎない。もし、結婚しないでしまうことが出来れば、彼等は満足して生活するであろう。

このように、この種の人は、常に自分に似たものを愛し、男子間の恋愛をのみ望んでいる。彼等の熱烈な愛情は、肉体的の欲望と云うよりは、むしろ精神的の欲望であって、彼等も自(みずか)らこれを説明する事は出

来ないで、ただ漠然とその情を感じているばかりである。すなわち各自の心霊は、言葉で表せない、至高にして、ただ揣摩臆測しか出来ないあるものを、求めている。」

また、不思議な女人ダイオタイマは、

「おのれの肉欲の奴隷となるものは、婦人の後を追いまわすだけであるが、自己の心霊を持って人を愛し、道徳と知識とを通じて不死を獲得せんとするものは、一個の偉大なる美しき心霊を求め、これに己を委ねようと願うのである。」

と、ソクラテスに教えている。

勿論、古典時代の考えでは、美しい心霊は、独り男性の肉体にのみ宿っているもので、女は半獣であり、男の肉的快楽と、人種の増殖のために（アリストファネスによれば、男子はもと、きりぎりすのように地中に生みつけたが、後女の胎内に生みつけることになったのである）のみ、存在しているものであった。だから、ヨーロッパにあって、久しく至高のものとされたプラトニック・ラヴ（純精神的恋愛）は、むしろ男性間の恋愛を中心としたのである。

これは、奇異な現象であるが、人為的結婚制度によって、女性が堕落と無知の極地に追い込まれていた当時としては、一面やむをえない事でもあった。

ギリシアが、一夫一婦制を採用したのは、恋情の根拠からではなく、政治的及び社会的の理由に基づいたのであって、それらの理由の中で、最も重要なのは、前にも触れたように、正嫡の子孫を要する事であった。財産の有るものが、自らの死後、それを相続させるために、正嫡の後嗣を欲しがるのは、一般に自然である。後世、ローマ法によって制定された、父から子への相続の権利は、実にここに始まったのである。これは単に子供の方の利益になるばかりでなく、宗教の教えに従えば、人は死後にも供物が必要で

あり、そして、それは死者の嫡男によってのみ、なさるべきものなのである。

ギリシアにおける多数の国家は、結婚を強制し、独身者を科料に処した。同時に、結婚したからとて、そのために男（勿論一部の貴族及び自由民の男）の個人的自由が妨げられる事はなかった。

否、結婚制度の故に、却ってそれら男の放恣が始まったとさえ云える。アテナイでは、ソロンによって公娼制度が設けられたが、彼は、国家及び家族制度を確立した人として知られている。

雄弁家デモステネスが、ヘテレ（娼婦）のネエラに与えた演説に、

「私たちを歓ばすためにはヘテレがあり、私たちの雑用のためには女奴隷があり、私たちの嗣子を生むのと家事を取るために妻がある。」

法律上離婚の理由となるのは、ただ一つ、不妊と云う事で、これは結婚の目的を破るからであった。その他のことでは、追放はあったが、離婚は赦されない。

すなわち、妻及び妻たるべき女、これら大多数の女性は、所与の男性の嗣子を生み、その家事を取るために、自己を売らねばならないのであった。妻の任務は、夫の恋愛の対象であることにはない。部分的に性欲の相手を勤めて、子供を生むことにある。

人間が自然を侮辱した中で、これほどひどい侮辱はなかった。なぜなら自然は、恋愛上の貞操を女性に与え、女性をして自己に至上の男性を選ばしめることによってのみ、子供を生ませようとしているからである。そこに一切の種の自然も、向上も、また健康もある。人為的に踏みにじった「性交」や「出産」は、劣悪な種を作るのに役立つだけであった。

こうした社会で、「妻の道」とされているのが、直ちに「女の道」である事は勿論である。娼婦か、女奴隷か、尼僧以外は、全部妻であり、妻であるべきであり、それが普通の女である。

普通の女は、人為的な「妻」となるべく、人為的に決定されている。社会や学者や坊さんらが口を揃えて「妻」にこう云ってきかせる。

「さあ家に戻って、家事を取りなさい。系引車と織機とへお着きなさい。そして召使たちにあてがわれた仕事を、精出してするように云いつけなさい。人と話すのは男の特権です。」

この言葉は、有名なギリシアの一人物が、その母親に云いきかせた言葉ですらあったのである。

プラトンは、「国家」の中で、「子供、婦人、奴隷」と総括して、三者を被支配者の列におき、アリストテレスの論議も、やはり男性に向かって、女性の支配者たるべしと勧告する主張の上に立つものであった。

こうして、崇高な女性、優れた女性、総ての意味に於て尊敬すべき女性を、彼等は持たない。否、持つまいとする。けれども、あり触れた、屈従した、奴隷的女性は、玩弄の対象ではありえても、恋愛の対象ではない。

エミル・ルカも云っている。恋愛の原則は、恋される者すなわち女性が、恋する者よりも上位にある所に成り立つ。恋する者の心を向上せしめるに足るもので彼女がある所にと。

それのない恋愛は恋愛ではない。性欲――それも不純潔な性欲でしかない。なぜなら性欲ですらも、恋愛に伴う時にのみ、始めて完全に純潔であり得るからである。

ソクラテスを初めとして、ギリシアの諸天才、有識階級が、怪奇な同性愛や娼婦との倒錯恋愛に、熱烈に心身の慰安を求めた理由は、憂欝な結婚制度や、無知な女部屋の妻（しかも彼等が決して解放しようと望まない所の）への不満でなくして、果たしてなんであったろう。

ギリシアの男が、異性間の関係で、わずかに陶酔境を作り得る唯一の対象者を、娼婦の「ヘテレ」の群れに求めたと云う事は、先のデモステネスの演説で明らかである。

ギリシアのヘテレは、もっぱら戯恋の女王であった。「ヘテレ」と云う語義は「良い友達」を意味し、すなわち彼女達は、アテナイ黄金時代の名花と謳われていた。

深奥な教養、異常な天分、換発した才気に加えて、天成の美貌、魅力ある表情、ことに音楽の才幹と、会話の巧妙とは、そのサロンに、一代の思想家、芸術家を惹きつけた。

「女性ギリシアの盛観」をなす彼女達の私宅は、あたかもフランスのロココ時代から始まって、十九世紀に盛り極まった「サロン生活」の起原とも見られるべき状を呈した。

光彩陸離たる時代の大立物の総てを、自身の周囲に集めていたヘテレのうちでも、特に天賦の才分と麗容を一身に兼ね備えていたアスパシアは、小アジアのミレトスに生まれ、幼時アテナイに住んだのであるが、成長後も彼女は、この地に娼家を構え、多くの美女を集めて、色々な薫陶に余念がなかった。

彼女は、妓棲の中に、数多くの娼婦と嫖客を前にし、修辞学と哲学の講義に、豊富な蘊蓄を傾けた。フイアデアス、ソフォクレス、ソクラテス、アルキビアデス、プラトンらは、彼女にとって、手答えのある論客であった。

ピュチオの女預言者から、「ソクラテスにまさる賢人はない」とまで云われたソクラテスも、世界の悪妻愚婦の典型と見做されるクサンティッペとの結婚悲劇から、もう二度と、女にはかかり合うまいと考えていたが、アスパシアを見い出すと共に、「おお、わが師よ！」と、呼びかけるまでの敬意を表した。

そして、常に彼女のサロンを叩き、親しげに、たがいの信念を披瀝しあった。彼は「修辞学者」とも彼女を尊敬した。ペリクレスは、雄弁法を彼女から授けられた。彼の演題中には、アスパシアの作が、いくらも含まれていた。

饒多な知識を持った彼女は、色々な方面に、才分を発揮した。世界の衣服発達史の中で、最も傑出して

いると云われるアテナイの衣服は、アスパシアの創意になったものとされる。
時の政治家ペリクレスは、アスパシアと相識ると、深い相思に陥った。ペリクレスは、それまでの不幸な結婚を悔いていたが、アスパシアの愛を得るにおよんで、夫のあらゆる点に無理解である妻を離別してしまった。理解ある人格的結婚をへたペリクレス新夫人の人格は、あくまでも高潔で、崇拝の的になった。
アスパシアに続いてソクラテスと知的な交渉を持ったヘテレのテオドオタ、プラトンに敬愛されたラスズニア、デモステネスのレエス等、社交界の花形たり、ギリシア女性の代表者であったこれらのヘテレの生活は、家庭的奴隷たる主婦たちの夢想だにしえないものであった。
総ての公の生活は、ヘテレが中心となり、王者も、その脚下にひざまずいた。デルファイのフリネの立像は、二人の国王の間に挟まれて建った。
とはいえ、これらの娼婦が、男を正しい恋愛へ導いたものでない事は、娼婦と云う金銭的境遇の然らしめたところであり、また一つには「作られたもの」で彼女達があったことによる。

八

男性の文化は、男性と同質の聡明、同質の叡知を持つ女性を作為する。反抗と否定から成り立たねばならないはずの女性哲学（ただし、女性被圧制の社会では）は、育たない前に、芽生えのうちに摘み取られるか、育っても無視されてしまう。
だから、男性と競争（闘争ではない）し得る優れた多くの女達は、その思想、その感情、その恋愛すら男性に同じい。
古今を通じて偉大な女流詩人と仰がれているレスボス島のサッフォは、多くの女奴隷との同性愛で有名

であるが、また、美少年ファオンを愛し、失恋して自殺した事で、一層、その名を謳われている。『女詩人サッフォ』（法月歌客）から、ファオンとの恋を紹介しよう。

オリンピアの大祭で、月桂冠を得たサッフォは、ファオンと云う美少年を得て帰郷した。

ファオンは、幼少の頃から、詩歌が好きで、あやうい足取りで歩きながら、リラの絃に手を触れ、春吹く風にも鳴りやすい楽器の美妙な韻律に、総てを忘れて聴き入るような子供であった。

幾春秋のめぐり来ると共に、ファオンの注意深い耳は、サッフォの名声を聞きもらすはずがない。「ミュティレネの女」の名によって知られる女流詩人を、敏感な少年は、世にまた無きものとして、憧憬し始めた。

詩の王冠を争う、詩歌の戦いの日は来た。遠い旅路を厭いもせずに、オリンピアの祭典に、真っ先にやって来たのは、ファオンであった。

アルカイオスは歌った。アナクレオンも歌った。けれども、懸命な歌合戦に、なんの甲斐もなかった。選ばれた唯一者は、この国第一の詩聖文豪を蹴落としたサッフォであった。

サッフォの創作に心酔した、ファオンの心は、その平静を失なっていた。あらゆる献身、敬慕の意を表しようと群衆を押し分け押し分け、彼女の前に出た。地にひざまずき、祈りの心を持って、サッフォの衣裳の裾に、熱い接吻をした。

そのいかにもいじらしく、青年の心持の罠に落ちたサッフォは、美少年ファオンを愛人として、彼女の故郷に伴った。

サッフォにかしずくやさしい女奴隷がいて、幾程もなく、ファオンは、その女奴隷のメリッタと烈しい恋におちた。サッフォは、裏切り者への嚇怒（激しい怒り）、それから生ずる絶望、自らの恋情の苦しみのため、心は真二つに引き裂かれた。

果てしも知らぬ、哀傷のどん底に沈み行く詩の女神は、リラをかき抱いて弾き始めた。それでも、愛を盗んだ、曲者への憎みの念は、浅ましくも、打ち消そうとして、打ち消されなかった。閃々と光り輝く匕首は、しっかりとその手に握られた。

理情の迷路に佇んで、深い考えに沈んだメリッタは、心からの恩義の叛徒には、なりきっていなかった。踏み行くべき正しい大道を知りぬいていた。神様でも奪うことの出来ない恋人からの贈り物を投げだし、女主人の白匁のもとに座る覚悟をきめた。

忘恩者が、こうした純情を表して見ると、匁を握ったサッフォの腕は、おのずと力なく下に下がらざるをえない。このせっぱつまった意志を、もう一度もとへ戻して、考え直す。

そして、取るべきなにか良い策はないかと、考えられるだけ考え、祈れるだけ祈って教えを神に乞う。

最後の手段は、キオスの島へ少女を放ち流す事である。

けれども、総てのことを、恋人のファオンは知って、

「おれが、この間一髪の危険を知ったのは、神様のお告げだ。一身を賭けても、おれはおれのメリッタを救わずにはおかないそ。」

威猛だったファオンは、たとえ全島の壮者が、武器を取り、どんなに刃向かってこようとも、断じて恋人を手離しはしない、と心の中に叫んだのである。

「二人の曲者が、駈け落ちした！」

サッフォの忠勤な老人は、呼吸せわしく駆けつけて、急な凶報を、主人にもたらした。

「まさかに、それは、本当ではあるまい。」

と、サッフォの口から洩れ出たのを見ても、彼女の驚きと嘆きとの、どれだけ大きいものであったかが、

察しられる。

この不吉な知らせから、サッフォ家の人々は、一斉に床を蹴って立ち、一刻を争う身支度にせわしかった。満を張った弓弦から、放たれた箭のように、幾艘かの追っ手の船は、波上を、辻って行った。

「総ての黄金をなげだしても。」

と、臍を固めたサッフォの表情を見守って、ミロン、テルパンデル、リヒヤス、フヱレス、クセナルポスなどの親しい友人達は、どんな犠牲を払っても、恩と愛に対する二人の叛逆者を捉えねばならなかった。

はるかの沖合いに浮かんだ一艘の小舟は、武装した、沢山の船のために、取り囲まれた。頑強に抵抗するファオンをめがけて、投げかけた追っ手方の投げ棒の一撃は、狙いがあやまって、メリッタの額を割った。淋漓たる鮮血にまみれ、少女は気息奄々として昏倒した。恋人の介抱に、心と力の全部を傾けねばならなかったファオンは、その隙に乗じて、苦もなく捕えられてしまった。

蜜の流れる愛欲の地にあこがれて、刺のある薔薇の花園を見捨てた若い男女は、ここに再び女主人サッフォの家に引き戻されのである。

「おれは、確かに女奴隷を盗み出した。その身代金なら、おれは、クレルスの宝物ほども積んでやる。だが、おれたちの愛に立ち入ってまで、サッフォに裁きの権利はないはずだ。なるほど、メリッタの肉体は、買われたものであろうけれど、心まで買うことは許されまい。断じておれは、サッフォの手には渡さないぞ。」

ファオンは、きっとした態度で、サッフォを尻目にかけて、こう叫ぶ。

そして、語気を荒ら立てて、こう云いきった。

「その歌のように柔らかな心、純潔な情、唇から漏れるゆかしいメロディーに、おれは幼少の時から憧

れきっていた。それがどうだ。今となっては、まるでメドゥーサのような、魔性の女にしか見えなくなってきた。このおれの眼には。」

サッフォは、その云うままを、静かに聞いていた。あたかも、両眼を盲いたかのように閉ざして。聴く人はやさしかった。耳に入って来る総てが、仮の世の悲しい約束であり、掟であるのを、はっきり見きわめたかのような、謙虚と従順な態度であった。

サッフォは、昂奮し、激怒している相手に対して、なに一つ、咎めだてをしようとはしなかった。その云うままに、そのなすままに、そして自らは、絶対無抵抗、捨身的無我の魂に更生した。

こう云う美しい心の姿を示したサッフォに、凶暴なファオンは、一種の神気を感じ、心眼は、爛々として開いた。

こわばった舌ながら、懺悔聴問僧の前に脆坐して、赦罪を泣訴する小羊のよう、

「賤しい私は、真心からあなたを愛しておりました。それはまったく、人間が、神様を尊び愛するように愛したのですが、私如き賤しいものが、尊いあなたに触れました事は、正しく瀆心の行ないであったと思います。心からそれを、私は恥じ入るのでございます。どうぞ、お赦しを。」

ファオンは、こう云い直さずには、いられなくなってきたのである。メリッタという、新しく現れた者のためにかき曇った、ファオンの眼には、サッフォは一時悪魔の化相に変わったのであったが、やがて、眼の曇りが澄んで、元に返ってみれば、本当のサッフォを、直視せずにはいられない。その凛乎たる威容を仰いで、ファオンの頭は、自から下がらざるをえなかった。かれ自身の対象者として考えるには、本当に大きすぎ、尊っと過ぎることを、今さらのように悟った。

愛の誓いに背き、密に他の愛を隠し貪った自らの罪を、そしてまた、主の恩を売り、主の恋人の愛を盗

んだ、メリッタの罪の裁きを、サッフォの前にひれ伏し、希って止まない。
サッフォは、二人の罪を裁くなどは、思いもよらぬこと。それよりも、現世のわずらわしい拘束を冷笑する兆しが、心に植えつけられてきた。小さな私情の嫉や僻みから解脱して、より博大な、より寛容な、神の心に一致しようとする、新たな希望に充ちていた。
そして、最後に落ち着くべき、大きな安息所を選ぶのである。
「死」――これ以上に、大きな勝利は、結局わが住む現実界にはないと、サッフォは思った。改悛の情に身をもがいている、若い二人の男女など、大きな問題ではなくなってきた。
サッフォは、黄金のリラを手にとった。祭壇に供えたオリンピアのローレルの冠を、静かに戴き、真紅のガウンを身にまとった。
身支度を終えると、彼女は膝を祭壇の前に屈して、ミューズへの祈願に耽った。今迄のはしたない恋の葛藤を謝し、若き両性の上に、いとも尊い祝福のあらんことを、くれぐれも念じた。
祭壇に点ぜられた聖火は、煌々として、あたりを白尽するほど輝きわたった。
「弱いサッフォを、あなたがたに見せたのを、どうぞ、赦してください。」
サッフォは、厳かに云い終わって、涙に汚れたファオンの顔に接吻して、
「遠い世の友人が、あなたに接吻していますよ。」
と云い、次に、泣きむせんでいるメリッタを抱き起こし、燃えるキスを与えて、親しい語調で、
「これは、死んだあなたのお母さんの接吻です。」
麗人サッフォの姿が、いつしかミュティレネから、吹き消すように、見られなくなったのは、それから間もなかった。レスボス全島の人は、いずれも憑かれたように「私たちのサッフォ様」の噂を、憂わしげ

に語り、「神隠しになられた。」と云った。
ミュティレネの邸を抜け出たサッフォは、シシリー島に渡った。それから、その足は直ちに、リュウカサスの島を踏んだのである。この島の台地の尽きる所の海角に、レウカディアと名付けられる、突兀たる絶壁がある。その突端には、アポロの神の祭典に用いる、ステージが設けられている。
ステージは、祭礼の都度、歌舞を捧げるためのものであるが、時には、この数千丈の懸崖から、重罪犯の死刑囚を、海中に投げこむにも用いられた。
急転直下、そのあまりに猛烈な急速力を、いくぶんか殺ぐために、囚人の体に幾羽かの鳥類を結びつけたのでも、おそらくは、その難地のさまが知られよう。
万一、海に投げられた罪囚で、ほんの僅かでも息が通っている場合は、それを奇蹟として、死一等を減ずる習慣であった。
「レウカディアの巌から飛ぶ」と云う言葉は、絶望とか、決死とかを意味した。
そのレウカディアの白い巌上に、サッフォは、直立した。分秒の躊躇もなく、その五体が宙に躍ると見るまに、幾千丈の下の渦なす海中に、その体は葬られた。
死は悲しかるべし。神々もそを知り給う。
と歌った作家その人は、このような道を選んで、死を急いだ。
一説には、サッフォがレウカディアから飛んだのは、後人の作りごとで、サッフォはシシリー島辺で、静かにに一生を送ったとも云われている。
もし、この説が真実であるとすれば、サッフォはやはり偉大な女性であったと、云わねばなるまい。しかし、「失恋」のために死を択んだのが、本当であったとしたら、私どもは、サッフォの恋愛に、失望せ

ねばならない。

死を選ぶべく、もしくは死を機縁すべく、そのように、それが、偉大な恋愛であっただろうか。

もし、サッフォにして、恋愛の貞操を把握していたなら、彼女は恐らく己を無二の対象として熱愛するであろう男性以外には、恋愛を求めなかったであろう。

サッフォは、世の男たちが、娼婦に対すると同じ態度で、ファオンに臨んだのではなかったか。またファオンは、終始押され気味で、彼女に対したのではなかったか。

そこでは、当然、恋愛の自然性は、いたくも圧し歪められ、肉の恋愛、官能の恋愛のみが展開したのではなかったか。

ファオンがサッフォを去って、十六歳の少女メリッタに赴いたのは、蓋し極めて当然であった。なぜなら、ファオンにしても、相互的な恋愛を好んだだろうから。

こうした恋愛の、結局破綻に赴く事は、あまりにも明白で、ただ、疑問は、サッフォの心理にある。

あれほど聡明なサッフォ、偉大なサッフォが、その恋愛の、そうした矛盾を、なに故に悟らなかったか。

もし悟ったなら、おそらく自己の愛執のために、生命を賭けるような事はしなかったであろう。むしろ心から、ファオンとファオンにふさわしいメリッタとの邂逅を、肯定したであろう。

女は（そして男もであるが）孤独を恐れないであろう。相互にふさわしい恋愛の出現する日まで、彼女は孤独であるはずである、それを彼女は恐れないであろう。

彼女は、多くの、苦い「恋の誤謬」を、経験するかも知れない。けれども、「誤謬」は結局「誤謬」である。運命の誤謬である。そして、彼女は、それを素直に悟るであろう。

サッフォにしても、ファオンが彼女に捧げ、彼女に寄せた、一時的あこがれと愛に、心惹かれて、一時、

「恋愛」らしく陥ることがないとは云われない。けれども、彼女は、すぐにこの「一時」と云う戦慄、恋愛の冒瀆を自覚せねばならない。

サッフォの恋愛は、賞讃すべく美ではなかった。それは多分、女が――ひいて男も――恋愛上の貞操を失ない、その性を玩弄し、或は売り渡すことに、なんら冒瀆的、自責的なものを感じなくなった所からおこる、倒錯的な性欲関係にすぎなかったであろうからである。

そのように、彼女の恋愛は、美しくなかったし、死も、それが「失恋」の死である時、それは極めて無意味な死とすべきであるけれども、或は文中にも模索してあるように、恋愛一般に対する寂蓼感の結果とすれば、恕すべきでもあろうと思う。

すなわち、彼女は、男性時代における優れた人物の一人として、むしろ女性であるよりは、男性と同じ側に立ち、男性と同じく女奴隷を愛し、また美少年を愛したのであって、そこにまた、男性と同じ魂の孤独や、寂蓼を感じたのでもあろう。

人為的結婚制度が齎した恋愛上の貞操の死は、かく恋愛を、また男女両者を、期せずしていびつな姿としたのであった。

古典時代は倒錯恋愛の時代であった。

第五章　ヨーロッパに於て——男性の寂寥（せきりょう）

九

我々は、恋愛圧迫（女性圧迫）時代における恋愛の——特に男性の恋愛の、規則正しい進化を、ヨーロッパの歴史に見る。（釈迦、アソカ王、孔子——こうした勢力が、なんらの抵抗も受けず、変革も加えられずに持ち続けられた所では、恋愛もまた殆（ほとん）どなんらの段階をもなさず、情痴の世界に停滞しただけであった）

ヨーロッパの恋愛進化には、およそ三つの段階がある。その一は、古典時代の倒錯恋愛であり、それは、ほぼ前章で見た通りである。その二は封建時代の遊戯恋愛で、それは主として本章で見るはずである。その三は資本主義時代の肉欲恋愛で、それは大体第七、八の両章に見るであろう。しかし、これら各時代の中間からの社会主義的なそれへの芽生えも見られるのであり、それは本章と次章に於（おい）て若干（じゃっかん）触れることにしたいと思う。また、それらの進化の背景をなすものは、ギリシア文明、キリスト教文明、科学文明の三つであるから、これらの解説（諸書から借りて）と共に筆を進めて行きたい。順序として、ヨーロッパの黎明、ギリシア文明に付いて、いま少しく、振り返って見たい。

ギリシア民族は、アーリア語を語る人種の一分派であった。彼等の中に、歌人、朗詠者があって、その歌が、社会的結合の、大きな役目をしていた。

これらの歌が、彼等の、ごく未開な時代から、語り継がれて、二つの大きな詩史になったのである。一つは「イーリアス」で、ギリシアの連盟が、小アジアのトロイアの町を攻めて、これを占領、掠奪したこ

とを語ったものである。他の一つは「オデュッセイア」で、オデュッセウスと云う賢い船長が、トロイアから自分の国へ帰る途中に起こった、長い冒険談である。

これらの詩史は、紀元前七、八世紀頃、ギリシア人が、近隣の文明人から、アルファベットの使用法を学んだ時に、書かれたものであるが、詩そのものは、もっと早くからあったものと云う。

この詩史によると、ギリシア人は、もと鉄を持たず、文字を持たず、都市を作らない蛮族であった。彼等は、初めは彼等が破壊したエーゲ都市の廃墟の外郭に造った酋長の大きな家のまわりに、小さな掘立小屋を作って、そこに住んでいた。

そのうちに、被征服者にならって、町の周囲に塀を作り、殿堂を建てるようになってきた。原始的都市では、塀が先で、神殿は後であった。彼等はやがて、商業を初め、植民を始めた。

紀元前七世紀までには、ギリシアの谷間や島々に、新しい都市が発達して、その前のエーゲ人の都市や文明は、忘られてしまった。アテナイ、スパルタ、コリント、テーベ、サモス、ミレトス等が、その主なものである。

初め、これらの小さな国々や、都市の間には、利益の感情の一致はあったが、政治の連合は、行なわれていなかった。しかし、そのうちに、商業が発達するに従って、連盟、同盟が行なわれ、小都市は、自ら進んで大都市の保護を受けるようになってきた。

この間に、ギリシアは二つの事柄から、共通感情の社会を造っていた。一つは詩史で、一つは四年目ごとに行なわれるオリンピアの体育競技に参加する風習であった。この競技に、往ったり来たりする旅人は、総てよく保護された。

こうして、時代が進むと共に、共通の感情も発達し、オリンピック・ゲームに参加するものの数も増加

し、ついに、ギリシア人ばかりでなく、エビラス、マケドニアなど、近親な関係にある国家も、赦(ゆる)されるようになった。

彼等の社会的生活は、エーゲの海岸や河畔に出来た文明国のそれとは、多くの興味ある相違点を持っていた。彼らも神殿を建てたが、その祭司は、古い都市のような伝統的のものではなく、知識の庫、思想の源泉であった。

彼等が、野蛮な戦闘的状態から脱出するに従って、彼等の知識生活には、新しい態度が現れてきた。

これまでは、祭司や王者にのみ赦(ゆる)されてきた特権か、わがままな娯楽であった知識の探求、記録及び人生の秘密の攻究に、一般の人々までが手を出すようになった。

紀元前六世紀には、タレスやミレトスのアナクシマンドロスや、エペソスのヘラクレイトスのような独立の市民達が、我々の住むこの世界に付いて疑問を起こし、あらゆる既成のごまかしの解答を排して、その真実を尋(たず)ね求めていた。

その紀元前六世紀は人文史上に於(おい)て、極めて重大な世紀であった。それは、一方にはこうしてギリシア人が、この宇宙及びその中における人間の位置に付いて、明瞭な知識を得ようとして努力し、一方にはバビロン、エルサレムで、ヘブライの預言者が、人類のために良心を創造――後にヨーロッパ文明を統一したキリスト教の母胎――しており、さらに他の方インドには釈迦、中国には孔子、老子がいた。

後に、ギリシアとペルシャとの間に戦争がおこり、それが終わって百五十年間は、ギリシア文明が、最も赫々(かくかく)たる光輝を放った時代であった。

この心的活動の首都であり、中心であったものは、アテナイである。そのころアテナイは、勢力絶倫、文才豊かなペリクレスと云う人に統治されていた。今日も残っているアテナイの美しい遺跡は、殆(ほとん)どその

賜物であると云う。彼は自分のそばに、建築家、彫刻家を初め、詩人、戯曲家、哲学者、教師まで集めていた。

ペリクレス時代の次には、ソクラテスが現われて、多くの青年を指導した。これらの青年の中で、プラトンは主要な人物で、彼は直ちに、アカデメイアの森の中で、哲学を講じ出した。

彼の哲学は、二方面に分かれていたが、一つは、人間思想の根底とその方法の吟味（ここには前章で見たプラトニック・ラヴが胎生した）で、一つは、社会組織の吟味であった。彼はユートピア、すなわち、現存の如何なる社会とも違った、より善い理想郷を、始めて計画した人であった。そして、この理想郷における生殖観こそは、その後の類似のユートピア思想及び母性主義の思想にまでも、一連の繋がりを持つ社会主義的のものであった。

プラトンによると、理想郷とは「善の観念」の具体化したものである。そのために、「レパブリカ」は、ソクラテスを中心として、当時勢力のあった若い快楽主義者や、年とった保守思想家や、皮肉な詭弁学者や、無知な実際家や、低級な常識家等の対話体にし、それらの衆知を集め、それらの善意を統一したものとして書かれてある。またこれによって、プラトンは、「善の観念」を現実社会に当て嵌めて見ると、どうなるかと云うことを、書こうとしたのでもある。

プラトンは、総て私有と云うことが、社会悪の根源であると見た。総てが社会の有である。それを私有しようとするのは、社会の有を、だまって着服するのでないなら、泥棒するのである、と云うのである。

そこで、「レパブリカ」では、財産の私有を禁じた。同時に、家庭の私有をも排斥したのである。総ての財産が共有であるように、総ての人が、一家族であらねばならぬ、と云うのが、プラトンの意見である。

「レパブリカ」では、総てのことが共有であり、共同である。生産も分配も社会的にする。野菜を作る

のも、果樹を栽培するのも、皆共同でする。人間の生殖も。

しかし、人間の生産は、野菜や果樹のように、簡単にはゆかない。共同に生産すると云っても、子供は、一人の男と一人の女で生産することに決まっている。が、家庭の私有は禁じられている。そこで、プラトンが発明したのは結婚祭の制度であった。

結婚祭と云うのは、「レパブリカ」の祭儀のうちでも、最も神聖で崇厳な大典である。

結婚祭に集まる資格のあるものは、男は二十五歳から五十歳まで、女は二十歳から四十歳までと限られている。これが、生殖適齢で、適齢以上または以下の男女には、結婚の権利はない。

時間が来ると、市の中央にしつらえた結婚祭場に、朝から詰め掛けていた男女達は、ぞろぞろ広場の一隅へ歩を運ぶ。そこには、結婚組み合わせの籤引所がある。

そこで、男女達は、一本ずつ籤を引く。すると即座に、自分の相手が決まると云う仕掛けである。こうして、幾百組と云う男女達は、互いに腕を組み合わせながら、さらに、中央の祭壇へと歩をはこぶ。

祭壇には、祭司たちが、威儀を正して控えている。籤にあたった即製の夫婦は、ここで祭司の認可を受けねばならない。

手を引き合った二人連が、幾組となく祭壇の前に現れる。祭司たちは、細々とその体質、素性、性格などを調べ、似合いの夫婦だと決定すると、結婚認可状を渡す。それと共に、公認の夫婦関係が、直ちに開始されることになる。

プラトンによれば、生殖は総て愛情的ではなく、科学的であるべきはずである。理想郷における結婚は、愛情を（ここでいう愛情とは、いわゆるプラトニック・ラヴ、心霊的恋愛のそれではない。男女相互の色情愛と云うほどの意味である。それは気まぐれのものとされる）満足さすためではなく、生殖と云う国家

事業を行なうために営まれるものである。生殖は、社会国家のためにする神聖な事業であるから、個人の好き勝手に行なうべきでない。

それに、夫婦の愛は、結局私有の原因となるから、籤引（くじびき）で生殖する他には仕方がない。

こう云う断案から、プラトンは結婚を否定し、家庭を否定した。理想郷には、ただ生殖対偶があるだけである。これを仮に夫婦と名付けるならば、この夫婦は、国家のために子供を生む機関に過ぎない。夫婦は子供を生むけれど、生まれた子供は国家のものである。「だから、子供が出来ても、親は子を知らず、子は親を知らないと云うのが理想である。」

子供は、国家保育場で育てられる。教育は国家教育より他にない。

プラトンの生殖理想は以上のようなものであった。この生殖理想は、後（のち）に見るモア、ベーコン、カンパネルラら科学時代のユートピアンのそれに通じ、なおまた次章の母性主義者エレン・ケイにも通ずるものである。すなわち、これら一連の思想は、ヨーロッパにおける恋愛進化の三段階（古典の倒錯、封建の遊戯、資本の肉欲）に伴う中間的派生物であり、同時に、社会主義的な萌芽とも見るべきもので、人間の生殖本能を、私有から国有に移そうとする案である。

アテナイは芸術、文化の中心として、その後もなお名声を長い間維持し、その流派は、紀元五百年代まで、およそ一千年間も勢力を持続していた。

私は、あまりに長く、ギリシアについて語りすぎたようである。次にキリスト教の出現をみょう。

一〇

これまで人間の思想を動かし、変化せしめた教理は数多くあるが、イエスの教訓の根本である天国の教

理ほど（仏教の場合もそうであるが）、革命的なものはなかったとされる。

ユダヤ人は、全地の唯一の神は、正義の神であると信じていた。しかし、彼等はまたこの神は交換的神で、彼等の祖先アブラハムと、交換条約をなし、やがて彼等をして、世界を支配せしめる約束をなし給うたと信じていた。

しかるに、イエスが、このような契約を一掃してしまったのは、彼等には、実に驚くべき憤懣でなければならない。

神は、決して交易をなすものではない、天国には、選民も寵児もないと彼は教える。神は全人類の慈愛の父、普遍的存在で、特にある者だけを寵愛出来ないものである。そして、全人類は兄弟で、罪人もなお天の父の寵児である。イエスは、善きサマリア人の喩えを持って、人々が自分達の民族を、特に偉大なものとし、他の民族の正しさを割引しようとする偏見に、一撃を与えている。

イエスが憤激したのは、ユダヤ人の種族的愛国心のみではなかった。彼等はさらに強い家族的愛情を持った民族であったが、彼は、神の愛の大洪水を持って、この偏狭な家族的愛情をも一掃しようとした。

天国のみが信ずる者の大家族であった。

「イエスなお群衆に語りい給う時、見よ、その母と兄弟達と、彼に物言わんとて外に立つ。ある人イエスに云う。師よ、汝の母と兄弟達と、汝に物言わんとて、外に立てり。イエス告げし者に答えて云い給う。わが母とは誰ぞ。わが兄弟とは誰ぞ。かくて手を延べ、弟子たちを指して云い給う。見よ、これはわが母、わが兄弟なり。」

イエスは、神の普遍的父であること、全人類の同胞であることを説いて、愛国心と家族的団結とを攻撃しただけでなく、さらに経済的階級、個人的利得を呪ったと云う。全人類は天国のものであり、全財産は

天国のものである。われわれの全所有、全人格を持って、神の意志に奉仕することが、唯一の正しい生活で、この他に正しい生活はない。彼はしばしば私有財産を攻撃し、私的生活の享楽を排斥したと云う。

このようなキリストの人格と教義への記憶は、ギリシアの知識の最も成熟した果実であるプラトン的の観念主義や、セミチック人の中世期の一神教にも次第に滲透して、これらを変化せしめたほど、幾世紀に亘って、その影響を及ぼし。新しい「あるもの」、人生に対する、従来知られなかった「天国」の感情、「普遍」の感情の表現が生じた。

それは、最初は漠然として不正確なものであったが、次第に明瞭適確となり、歴代のローマ皇帝の玉座には、僧正が座ることとなった。

単に、表面からみれば、ある異国の精神的仮定から出て、ある異国の土地に生じた一宗教が、それとはまったく関係もなく、また、理解もなかったはずの国民に、こうまで容易に、かつ迅速に、受け入れられたと云う事は、いかにも不思議に思われるに違いない。

特に、赫灼たるギリシア、ローマの古代文化の遺跡を攻掠して、新支配者となったチュートン種族の、好戦的感情及び剛勇を愛する精神と、キリスト教的禁欲主義とは、全然反対の思想と思われ、事実、両者の関係は多くの場合、直接の敵意となって現れたことも観察される。

しかし、一面、古代のセム族及びチュートン人は、キリスト教国と共に、一つの共通の深い特質を有し、そのことが、キリストの宗教を、全ヨーロッパの宗教としたのであった。

まだ開発されないヨーロッパの精神とキリスト教とに共通な特質で、北欧種族にも、『旧約聖書』を有するユダヤ人にも、さらにギリシア人にも共通していた処のものは、個人の霊魂を重大視すると云う一事であった。

最高の価値を、人間の霊魂に見る、これらの共通の直覚は、ここにキリスト教を通じて確立され、信仰の焦点となり、枢軸となった。実に、客観的、形而上的観念を持って、本質的のものと見たプラトンですら達し能わないほどの深さと大きさを持って。

すなわち、一切の地上的欲情や、その紛争や、不正や、乱倫に対して、人間の霊魂は、それら自らの浅ましさを反省し、悩み、悲しむ能力（神の能力）を持つものであることが知られたのであり、ここに総ての救いが懸られることとなったのである。

キリスト教が、個人に心霊としての価値を与えた事は、かくて遂に、恋愛に対する見えざる貢献的原因をなす。なぜなら、女にも救済すべき心霊があることが、キリスト教によって承認され、従来男女の関係の基礎となっていた性欲とは、全然正反対な一の新しい感情すなわち精神的愛の感情が表われきて、たちまちその最高頂に到達することになるからである。

このキリスト教によって女にも心霊のあることが消極的にもせよ承認せられた事は、ギリシアの心霊的恋愛（男性間の同性愛の上に顕現せられた）が、ここに至って男性と女性の間にも可能である一確証となったのである。女の地位は一変した。

それはもはや、古代におけるように、単に男子の衝動を満足せしめ、小児を養育するための道具でなく、沈黙した労働者、ないし献身的の姉妹でもなく、僧侶が考えるような女魔でもなくなった。

勢いの赴く所は、驚くべきものがある。

彼女達は、一躍人間性を超越して、九天の高きに崇められ、女神となった。

すなわち、この世のものならぬ帰依、語をかえて云えば、総ての貴きもの、善なるものの唯一の源泉たる帰依を持って愛せられ、崇拝されることになった。（ただし、下層女性は元通りに据え置かれ、このよ

うな崇拝から区別せられる）

この現象――かつての極端な蔑視から、いまの極端な崇拝へのこの現象は、とりもなおさず、恋愛における男性の久しい寂蓼（せきりょう）の一反映でもあると云ってよい。彼等は女性と云う隣人を、いつまでもただ奴隷としておくことの寂しさに、耐えきれなくなったのである。

この現象は、キリスト教初期の一千年間を経た十二世紀及び十三世紀の頃の事である。

原始キリスト教徒は、自己及び同胞の肉体を軽視した。彼等は形体の美を軽蔑し、ただ神を愛することのみをもって、価値あるものとした。女は賤（いや）しめられ、猜疑（さいぎ）の目で見られた。性交排斥はキリスト教本来の性質のしからしめる所で、ひいて女は性交の坩堝（るつぼ）として呪われたのである。

ただ、女にも僅かながら心霊はある。女自身を駆って、聖霊へ伴う所の若干（じゃっかん）の光明はあると云う信仰が、女を彼等の同胞視せしめる唯一のものであった。しかし、女を最高のものとして仰ぐに至った原因は、むろんこの同胞感だけではない。

ドイツの神秘派に至って、最高度に達し、かつ完成した精神化（人間の）されたキリスト教は、主観的な、偶然的な事物を払い落とし、精神的な、意味深い、神聖な実在たらんと熱中するにいたった。

エルクハルトは、人間を「最高の天使」の上においた。

「自由のあるおかげで、人間は、如何（いか）なる天使も望み能（あた）わない目的に、達することが出来る。蓋（けだ）し、人間は、特に新しく、かつ天使の制限を超え、一切の最後の理屈を超えて、無限に高く騰昇するを得るから。」

「霊は、内部から神を創造し、神に連繋し、それ自身神となる。」

こうして「人間」への自覚が、用意され始めた。

次に来るものは何か。

神の感情たる愛は、今は人間によって、神にも自然にも及ぶ。ことに自然美に対する鑑賞眼の覚醒――これは驚くべき事であった。従来にあっては、自然美は不当に退けられていたのである。ヨーロッパは今や封建制の絶頂にあると共に、ようやく次の新たな政治的、経済的制度への波動を感じ始め、人間性の復活が約束され始めたのである――は、同時に、急激なドイツ詩歌の送出、古代芸術とは全然かけ離れた、特殊のヨーロッパのゴシック建築等と連繋して、かつてはなんら精神的意味を持たず、単なる性欲への媒介としてのみ見られ、卑しめられていた女の美に対しても、最高の心霊的意義を付与する必然の動機を作り出したのである。

自然美の称揚者、神秘派のスーソーの詩に次のようなものがある。

わが愛する兄弟よ。
わが眼は多くのうれしげなる光景を見たりと云う以上に、余はなにをか、汝（なんじ）に告げん。
余は、花咲く野を横ぎりて歩（あゆ）み、小鳥の天来の竪琴（たてごと）が、やさしき愛すべき造物主を讃（たた）え、
しかして森は、その歌を持って、これにこだましつつあるを聴きぬ。
汝（なんじ）自（みずか）らの眼をもて、この世のものとも思われぬ草原を見よ。見よ！　なんたる夏の喜びぞ。
甘き五月の王国、あらゆる真の歓喜の谷を見よ。
悲しみを知らぬ愛は、永久にそこに君臨すべし。

こうして日ごとに見慣れた事物の美が、荘重な神の思想と、相連絡して考えられるようになってきた。そして、この傾向は、粗野な武人の間に、いわゆる「騎士気質」を呼び起こすこととともなり、新しい徳

性の価値及び美の新理想が、まずプロヴァンス地方等で標榜（ひょうぼう）され始めた。

そこでは、知識、礼法、正直及び自制と云う四個の現世的の徳性が、女性崇拝の俗と共に育成され、謳歌された。王侯の宮殿は、新生活及び新芸術の中心となった。男たちの社交から駆逐されていた女は、ここに一変して、あらゆる事物の中心に移されることとなった。男性は、女性のために、その野獣的性情をおさえ、自ら努（つと）めて閑雅な作法と、趣味と、芸術を喜ぶことになる。

かつて、教会から、思うままに貶（おとし）められた女性、また、マコンの宗教大会で、女は人間なりや否やと討議された女性は、今や霊の容器となり、男性は仰いで、新たに創造されたこの女神の前に、膝を折るのである。

この新しい礼法の培養は、あたかもトルバドゥール派の芸術の発達と、その時を同じくした。あらゆる宮廷は、この派の詩人を誇りとして、これを歓待し、これに贈り物を捧げた。地上に時めく王侯貴人らが、芸術を庇護する事は、文芸復興期に至って極端になったが、その始まりは、この時代にあったのである。

こうして、キリスト教の黎明期に評判を悪くし、神聖ならぬもの、悪魔的な性質として連想せられたあらゆる美――自然的な美が、今やその王国に（キリスト教の洗礼を受けて）立ち帰った。

そして、当代最良とされる男性の熱情と愛との標的となったものが、女性の美であった事は云うまでもない。彼らは、もはや女性の美に玩弄美を見ず、神の美を見るのである。そのことによって、彼等は隣人たる一般女性の高価な性――その実は低能化している性であるけれども――を信じたいと熱望するのである。古典時代からの男性の孤独が、寂寥（せきりょう）が、ここに至って表面化してきたのである。

騎士の勇と婦人の美、これが当代の万人の心に、憧憬（しょうけい）と空想的の夢を見たした唯一のものであった。一方、女性の側にもこれに応ずる現実的事情があった。

馬に乗って出て行く大名は、若い妻を邸に残して、閨帳に閉じこめ、間者に囲繞させておいた。時としては、夫の所有の印として、妻はその身に烙印をさえ加えられた。

囹圄の中の囚人、すなわち彼女の空想の及ぶ所は、彼女が広い領土の持主であるが故にこれと婚し、さらに富める花嫁の見つかり次第いつでもその妻をその父母に帰しもしかねない愛のない夫ではなく、彼女のためには生命をもなげうつほどの情熱ある恋人、見知らぬ騎士に対してであった。

結婚と恋愛とは、全然無関係な二つのものであると云う見解が、いよいよ一般に承認されてきた。特に上流社会では、結婚はただ政治的及び経済的の理由で結ばれる約束たるにすぎなかった。領主は国土を広大にし、花嫁の持参地を得え、もしくは勢力ある家庭に縁を結ぶことを望んだ。従って、妻と心の生活を一にし、何によらずものごとを相談して、家庭を営なんで行くような事は、殆ど夢想だにもされなかったのである。

「夫妻の間に、恋愛の余地がない事は否定しがたき事実であった。」

と、アンドレアスは云っている。

恋愛尊重、恋愛浪漫化の思想は、こうした地盤の上にも、培われたもので、いわば上流婦人の感情のはけ口でもあり、これが宮廷的、サロン的恋愛遊戯を助長したことも云うまでもない。この遊戯思想は、フランスの南方において、恋愛公事庁となっても現れた。王女、姫君、夫人らによって主宰せられる有名な恋の法廷では、恋愛に関する世にも珍しい問題が論ぜられ、決定された。

その中には、次のような判例がある。

「淑女は、その崇拝者が、一度自己の夫となると、すでに崇拝者を失なったわけであるから、彼女は別に新しい恋人を求める権利がある。」

「結婚した夫婦の情と、恋人同士を結ぶやさしい恋とは、その根本に於て、また習慣に於て、まったく相異なった感情である。互いに、似ても似つかぬ一点の関係もない両者を比較する事は困難である。」

一一

ヨーロッパのプラトニック恋愛思想は、こうしてギリシアの倒錯的同性愛を起点に、中世の遊戯的宮廷恋愛を経、さらに文芸復興期に至って、偶像崇拝的恋愛の最高峰を示すこととなる。

ダンテによって、先駆的に代表される文芸復興期の恋愛思想は、中世騎士の礼譲慇懃な女性崇拝に代えるに、貴き聖き心情、神格化した霊魂の持主と仮想される女性への憧憬を持ってする。

婦人崇拝は、ここに絶頂に達するのである。

フィレンツェの一少女ベアトリーチェは、詩人ダンテの心霊の中で成育発達し、遂に時間を超越した永遠の存在となりおおせる。

今や恋愛と宗教とは一如となり、女性に対する愛は、不死に対する愛と同一視されるようになった。

彼は『新生』で、恋人から湧きでる力が、いかに激励的であり、かつ、人心を浄化するものであるかを力説する。

わが貴女は眼に「愛」をたたえる。
　さればこれを眺めるものは皆優しくせられる。
彼女の過ぐる所、人皆その方に振り向き、
　その挨拶は心を顫しめる。

かくて人は顔を垂れて全く蒼白になり、
その時おのが一切の答に哭く。
傲慢と忿怒とは彼女の前に逃げ失せる。
貴女達よ私を扶けて彼女を崇めよ。
彼女の言葉を聞くものの心に、
総ての嬉しさ総ての謙虚な思いが生まれる。
されば始めて彼女を見しものは讃むべきかな。
ほのかに笑める彼女の姿は、
云い難く、また記憶に止めがたい。
彼女は奇しく優しき奇蹟のみ。

また彼は、「愛を識れる貴女達よ」に始まる短詩を書いたが、これは彼の作品中でも、最も美しいものの一つとして知られている。

愛を識れる貴女達よ。
私は汝らと吾が貴女のことを語ろう。
これ彼女を讃めつくし得ると云うのでなく、
語って心を和らげようと思うのみである。
まことに彼女の徳を思う時、

いと甘き愛を身に覚える。
もし私がかくて気を失なわぬならば、
語って人々を恋せしめんものを。
また懼(おそ)れてくずおれざらんため、
いと高らかに語ろうとはせず、
ただ彼女につきその優しきさまを、
汝ら愛の貴女達、
処女達と共に軽やかに語ろう。
他の人々に告ぐべきでない故(ゆえ)に。
天使は聖き智を持って叫んで、
云う「君よ、はるか天上にまでも、
輝く霊魂より出ずる奇(く)しきものの、
世に働くのが見える。
他に何の欠くるものなき天は、
彼女を得んことを己(おのれ)が主に求め、
総(すべ)ての聖徒もまたかく恵みを叫ぶ」と。
ひとり哀れみが味方となって私たちを防衛する。
すなわち神はわが貴女を指してかく云い給(たま)う。
「わが悦ぶものらよ、いま汝らはわが善しと、

思う間汝らの望みを、彼女を
失わんことを恐れて待つもののいる所に置け。
（このものは地獄にて云うであろう、おお幸なきものよ
私は祝福されしものの希望を見たと）」
高き天もわが貴女を願う。
故(ゆえ)に私は彼女の徳を汝(なんじ)らに知らしめる。
私は云う、優しき貴女と見えるものを、
彼女と共に行かしめよ。彼女が道を行く時、
すなわち愛は卑しき心に氷をなげ、
そのためその総(すべ)ての思いは凍りて滅びる。
また止まって彼女を見るものは、
貴きものとなるか、しからざれば死するであろう。
彼女を見るに足るものがあれば、
かかる人は彼女の徳を悟る。
すなわち彼女は救いを彼に与え、
謙(ゆず)って、一切の怨恨を忘れしめる。
かつ神の彼女に賜(たま)う恩寵(おんちょう)はなおも大にして、
彼女と語るものの終わりは悪しかるを得ない。
彼女に付いて「愛」は云う「朽(く)つべきものが

どうしてかく飾られて清くあるを得るか」と。
かくて彼は彼女を眺め、神は彼女のうちに
奇しきことをなさんとし給うと心に誓う。
度を越えず、貴女にふさわしき
真珠の如き色を身に帯びる彼女は、
自然の作る美の極みである。
彼女を規範として美は試めされる。
その眼よりは、何処に動かずとも、
燃ゆる愛の霊が出で、
その時これを眺めるものの眼を打ち、
貫いて各々心臓に至る。
何人もしかと眺めえざる眼に、
「愛」の彩られるのを汝は見る。
短詩よ、汝を使わした時、
行きて多くの貴女達と汝の語るのを私は知る。
そこで汝に薦める、私は汝を挙げて
「愛」の若く清き娘と従うゆえ、
汝の至る所にて願って云え、
「行くべき道を私に教えよ、私は

その讃辞に飾られて彼女のもとに遣わされる」と。
また汝の歩みの空しからざるを願わば、
卑しき人々の処に止まるな。
なしうべくば、慇懃なる貴女と、
人とにのみ知られようと努めよ。
彼等は汝を迅き道に導き、
汝は「愛」の彼女と共なるを見るであろう。
汝よろしく彼に我を薦めよ。

彼の描いた精神的愛は、その前後を通じて如何なる他の詩人も企て及ばないヨーロッパ的のものであったとされる。ヨーロッパの男たちは、こうして、期せずして男の恋愛の厳粛な寂蓼感を告白し、それを婦人崇拝に象徴化して、圧伏され白痴化している女性を、揺り動かし、目覚めしめようとする機縁を作り始めた。

とはいえ、これらの男性はあまりにも女性を通じて――ことに女性の化粧された外形美を通じて神性を認めすぎ、もしくは語りすぎたため、長年の無教育で低能となっている女性たちは、容姿に関する思惑にのみ益々一念を集中し、この一事さえ整えば、その他の事は完全であるとうぬぼれたのである。

エミル・ルカは、

「女は、またしても男から押し付けられた地位を受け取ったが、今度は前のように、追われる地位ではなくて、完全な婦人としての地位であった。ベアトリックス伯爵夫人は、彼女の崇拝者が、想像にまかせて、

彼女に与えたすべての美質が、疑いもない事実であって、悉く自分に備わっているものと信じていた。」と、揶揄している。

また彼は、

「しかし、かく称讃された婦人らの心理的誤解よりも、さらに興味があるのは、彼等婦人の感情生活に、男子崇拝とも云うべき、何ものかの発達があったか否かと云う問題である。これに対する答えは、決然たる「否」である。婦人の歴史の如何なる時代に於ても、我等は、男子の婦人崇拝に比すべきなんらの痕跡をも発見することが出来ない。」

と云っているが、極端な崇拝が、極端な蔑視の後に来るものであることを知るなら、女性の歴史に、男が女に対してなしたようなそれらの総ての犯罪がなかったと云うことによっても、ルカの見解は、浅薄の譏を免れるわけにはゆかないであろう。

しかし、女性の殆どが、知性から遠いものとなっており、従って鼻持ちならない状態にあったであろうことは事実とせねばならない。

ルカが、

「深刻な悲劇的な中世の二元論は、婦人には触れずに、その傍を通りすぎた。婦人の心には、この争闘が悲劇的にもならず、産出力にもならず、ただ病的なものとして、またヒステリーとして現われたのである。」

と云い、たとえば、イエスに対する彼女らの愛などを見ても、性欲からきた病的な所産で、彼女らの精神的愛は、空虚な感傷と、ヒステリー的恍惚以上に出たものではないと断定し、

「婦人は男子の形而上的恋愛を模倣して、これを曲解してしまった。本来、性欲衝動に過ぎないものが、

僭越にも地上を超えて、神格化された愛の君臨する精神的世界に達しようと企てたのである。」と云っているのは、大体適評と云わねばなるまい。

この後も、ヨーロッパでは、たえず婦人崇拝（崇拝に値するものであらせたいことへの切望からの）と、婦人蔑視（幻影消滅からの）とが男子によって繰返されるが、ここには実に彼等の深刻な寂蓼感の存在が見られるのである。

一二

文芸復興期以後、恋愛思想は、霊肉一致に傾いて来る。宗教革命は、性欲を僧院に取り入れ、神は人格化して、地上に下った。

レオナルド・ダ・ヴィンチの芸術は、いち早く霊肉一致の境を照らし出した。彼の描いた女性が、常に特殊の地位を占めていたのは――モナ・リザの如き――注意すべきであろう。

そして、この霊肉一致思想は、時と共に、資本主義下の肉欲恋愛へと重心を移して行くこととなる。

恋愛思想の、このような推移を、一層よく知るためには、過去における、隠された性生活の他の一面――主として肉欲生活のそれを見なければならない。

初期のギリシアに見る乱雑な肉欲生活は、生殖器形のディオニソスや、百の胸を有するエフェソス女神等の崇拝となって現れていた。

アドニス、ディオニソス、ミリッタ、アスタルテ等の神々のために、年々催された春の祭礼は、飽くなき荒淫と、生殖力の盲目的放出を持って、礼とした。女（その中には他種族から掠奪した女も多かった）は何人といえ、それを希求する男子を拒むことを、赦されなかった。全部落はこぞって情熱の赴くがまま

に狂奔し、大地の活力を歓呼した。けれども、すでにここに大地の活力蹂躙の第一歩があったのである。

「自己種族」と云うものを発見し、また性欲の玩具性を発見したこの父系初期時代の男性たちが、生殖理想（それは彼等の経済的打算に照応するものであった）のために、また反芻的享楽のために、女性を捕獲し、蹂躙したことがその事を示している。

女性蹂躙は、女性の共有（氏族の増殖と氏族男性の性欲のための）と云う第一段階から、女性の私有（性欲の独占と嫡子を得るための）と云う第二段階に移ることとなる。

すなわち、ホメロスの作品などに見るように、酋長級の男性や、腕力の優れた男性が、頼赤の娘とか、美髪の乙女とかを掠奪して私有し、私有権の不文律を樹立してから、ようやく女性共有が廃れ、女性私有が始まるのであって、それに続いて、その私有を法制化するための結婚制度の誕生となり、男は女に人為的貞操（私有権の強制としての）を教え、それに背けば、大逆罪として死刑に処せられることとなる。それと共に、男性自身も、他の私有権侵害を禁じられるので、性欲が制限されることとなり、その埋め合わせに娼婦制――妓楼の国営――が案出されたが、人間の性生活は、ここらから、益々不自然となり、それに反比例して、精神的恋愛の崇拝、性欲の蔑視が、哲学者や宗教家のテーマとなるが、とはいえ、そうした努力の陰に、いよいよ病的となってうごめく肉欲生活の光景はどうであったろう。

純精神的恋愛の一皮下では、歪曲され変態化された自然力が荒れ狂っていた。それは、神秘の薄闇に包まれて、新しい光明の神々の視線を避け、その止むことなき渇望を緩和しようと企てる。

アテナイの光輝燦たる文化の奥底には、かような神秘的な暗黒裡の崇拝（ニーチェによって再認識されたように）があった。アドニス、ミリッタの礼拝と同意義な、両性具有的のディオニソス及びデミィタの祭りには、非人格的な生殖的要素、生殖器及び盲目的にかようなものと想像された子宮等が、礼拝された。

ディオニソスは、アマゾンの女族をさえ征服して、彼等を改宗させ、遂に彼を崇拝させるにいたったと、伝えられている。ギリシア芸術は、肉欲、肉感の芸術であると、誤り伝えられているまでに、肉と享楽の香が強かった。

エウリピデスの「バカンツ」は、放縦な性の衝動と、新組織の間に起こった戦いを主題とし、その中に、ディオニソスがアジア全土を踏破し、一群の無恥な女達を従えて、ギリシアに達したさまが、描かれている。抵抗することの出来ない不思議な男ディオニソスの後を慕って、故郷を逃れ出る女達、彼女達は飼い慣らした毒蛇で、頭髪を結び、狼の仔や、幼い羊を両腕に抱き、自らの乳房から乳を与えたりする。また彼女達が、サーサスの神杖で、大地を叩けば、乳と酒が湧き出るなどの事もある。

そして、ディオニソスを持って、ギリシア的、法的精神の仇敵であり、かつ女等を狂せしめた男らしからぬ不思議な男であると、考えていたペンテウスは、却って、生みの母アガウエを先頭とした狂婦人らの襲う所となり、寸断ののち、ディオニソスに捧げる犠牲にされてしまうのである。

こうした物語は、ギリシア人の好む所であった。それは、彼等の昂揚した精神の蔭に潜む、地獄心を刺戟し、そのことによって慰安と快楽を、満喫させたからであろう。

下って、キリスト教時代では、性欲が一層罵倒され、貶められた結果として、倍加する神秘と、飽くなき蠱惑を持って、それは万人に見え、教会政治の類例のない圧迫は、そうした悪魔の誘惑をなお無限に強力にしたのであった。

この時代では、教会は神であった。教会のみが、独りよく未来永遠の福祉に関する特権を持っていた。教会から呪われる事は、永劫浮かぶ瀬もない処刑を意味するものであった。破門される事は、一時的、永遠的幸福を奪われる事であった。破門された人の境遇は野獣にも劣り、彼が悪魔の手に引き渡される事は、

疑うべくもない事実であった。（そしてここに被破門者らの自暴自棄的なサタン生活が醸し出される）

神の王国は教会と同義であった。ユダヤ人と異教徒は、サタンの私生児であったが、片言隻句の質疑的提議をあえてしたり、或は大胆にも独自の見解に従って物を考えたりなどする背教者もしくは異端者も、吾から好んで神に背き、それと知りながらなお悪魔の国に落ち行く者であった。こうした輩は全然悪人であって、いかなるこの世の刑罰を持ってしてもその罪に相応する事はない。（そしてここに被刑罰者の悪魔的思想が倍加する）かりそめにも、教会の境柵以外に迷い出たものは、その生存中は云うまでもなく、死後でも教会の手は重くその上に及び、その屍体は、墓穴から掘り出されて、腐肉坑に投ぜられた。

言行を持って、あえて僧侶に反対したものは、総て永遠の死の審判を受けることになっていた。

しかし、これらの事は、悪魔に対する恐怖が一変して、無頓着になり、往々悪魔崇拝となる原因ともなった。

自然は悪魔の寓意であった。物事の解決を、自然探求の中に求める事は邪道であった。起こりうべきありとあらゆる事柄は、皆聖典に書いてあった。聖典は、総ての事物に対する説明を持っていた。問題は、ただ正当な言葉を選んで、それを誤りなく解釈すると云う事であった。

ラテンの哲学者や詩人を研究し、天文学や幾何学及び医学の書をあらわし、アラビア数字と十進法を輸入したゲルベルトは、その事のために、魔法使いや異教徒と交わるものであると云うので、非難された。

人は、ただ教会と、その煩瑣哲学以外、見ず、聞かず、語らぬことを最善とした。博物学も、地理学も、一切無益有害なもの、自然研究は、神を無視し、否定した所為でしかない。

この時、エブナー女は、救世主の姿を空想する事で、その色欲を鎮め、チンチェンドルフ伯は、男女の両特性を兼有する天の花婿を幻想し、自分を女に変性して、倒錯的性欲を満たす。

また、聖ベルナールの歌に、

おおかぐわしき君、おおイエス・クリストよ。
君を味わうものは、君をおきて何をか味わわん。
君が清らの美味を味わうものは、
君あるために生くるなり。
他は皆空し！
君のためには霊も死にぬべし。
気は遠くなり、君がためには死もなんのその。

また、スペインの尼僧聖テレザは、

「花婿は、住家の戸も、周囲の城壁も、皆閉じよと命じぬ。肉体より霊魂を放ちやりて、彼は呼吸をとめ、以って他の諸感覚は、皆死せざるまでも、もの云う事のみは、不可能ならしめたり。またある時は、総ての肉体上の知覚は、総て消えうせ、肢体は硬化し、肉体は殆ど呼吸を止め、霊魂はそれより離脱する如き状を呈することもあり。」

と云っている。

マトフル・エルメゴーと云う僧侶は、クリスマスの贈り物として、その妹に、蜜菓子、蜜糖水及び閹鶏（去勢鶏）の焼肉を送って、次のような手紙を添えた。

「蜜糖水は、キリストの血で、蜜菓子と閹鶏は、彼の身体で、我等を救わんために、十字架上に、串ざし

にして焼かれたものである。聖霊は、彼の神性と云う砂糖と、我等の人性と云う生粉を捏ね混ぜて、聖母の子宮の中で、この菓子をお焼きになった。また聖霊は、聖母の子宮の中で、蜜糖水を酒から作って、香味をお付けになった。香味は神の徳で、酒は人間の血である。その上に、彼は聖なる閹鶏を、卵から出るようにせられた。卵の黄味は神性であり、白味は人性であり、殻は処女マリアの子宮である。」

性欲の毒焔は、地下にもうもうと立てこもった。法王政治の腐敗と共に、神は「放恣」となり、僧侶や尼僧は、淫鬼となった。そして、ルターが、僧侶の独身を排し去って以来、天上から地下へ、天的恋愛から地的生殖へ、肉欲へと、人心は公然と墜落しだした。

また人心をいわゆる墜落させた、他の一つの原因が、科学復興にあったことも、見逃せない。

一三

十三、四世紀にかけて、多くの都市が発達した。ベネチア、フィレンツェ、ジェノバ、リスボン、パリ、ブルガス、ロンドン、アンベルス、ハンブルク、ニュルンベルク、ノブゴロド、ウィスビー、ベルゲン等、皆そうである。

これは、皆商業都市で、多くの旅行者が集まってきた。商業があり、旅行のある所では、人々が談話したり、考えたりすることも、盛んになって来る。

法王と君主の争い、恐ろしい野蛮な異端迫害等は、人々の心を刺戟して、教会の権威に対して疑念を起し、根本的にこれを論議させるようにした。

アラビア人が、ヨーロッパへ、アリストテレスの思想を復活させたこと、フリードリヒ二世が、アラビアの哲学科学を、復興しつつあるヨーロッパ人の心に注ぎこんだ事は、科学復興の有力な端緒であった。

人心の動揺は、独立的な教養ある人々に、限らなくなってきた。一般民衆の心も、人類が、かつて経験しないくらいに、目覚めて来た。

こうして、一度必要が生ずれば、人々は君主、僧侶、信条に対して、自ら判断を下しうる勇気を得ていたのである。

早く十一世紀頃から、哲学的論議がヨーロッパに起こり、発達していた。そこで中世の学者が、再び言語の価値、意義に関する問題を提出して、やがて来る科学時代の準備をしていた。

宗教によって排斥せられていた自然の美や婦人の美が、宗教自身の中からさえ認められ出した事は、前に見た通りである。この隙に乗じて、隠されていた肉欲生活が科学によって正当化され、それは種の生殖のための神聖な手段だと云うことになる。

ベーコンは、科学万能主義者であった。彼は十六世紀の末、イギリスに生まれた哲学者である。十六世紀と云えばまさに近世科学勃興の時代である。

ベーコンの『ニュー・アトランティス』は、科学を基調にして書かれた理想郷物語である。これより先、十五世紀末にトマス・モアの『ユートピア』が出た。

モアの『ユートピア』では、総てが自由である。財産もない。門閥もない。だから恋愛も自由である。階級や資産のない国では、恋愛より他に、結婚に至る道は無いのである。

そのかわり、結婚は適度の制限を受けねばならない。恋愛は盲目――ここで云う恋愛は、前にプラトンの場合見たような男女の相互愛で、それは気まぐれなものとされた――である。夫婦として不適当な人達が、必ずしも恋し合わないとは限らない。それは、その人達の不幸であるばかりでなく、また社会全体の不幸である。そこで『ユートピア』では、結婚は相当の監督制度を設けているのである。

「馬を一匹買うにも、種が良いと云うことが判明しないでは買わない人間が、あてずっぽうに結婚すると云うのはよほどおかしな話だ。」
とモアは云う。
結婚の願書が出ると、一先ず結婚局で、それを受理して、相当の監察官を派遣し、その男女の健康検査と、心性調査をする。結婚局の認定によって、夫婦として適当なものであると決定すれば、すぐに認可証が下りて、そこに家庭生活が始まるのである。
つまり、恋愛は自由で、結婚の基礎ではあるが、結婚には制限がいると云うのであって、結局恋愛も、結果において拘束されるわけである。このモアの思想は、次章のエレン・ケイのそれと、殆ど同じであると云ってよい。生殖一元主義の出現である。
ベーコンになると、
「モアが恋愛を自由にして、結婚を取り締まり、夫婦候補者の身体検査を、官をして行なわしめると云う考えは、面白い方法ではあるが、候補者の届け出をまって、始めて検査を行ない、合格不合格を決定するのは、人道に反したやり方である。男女互いに相愛し、いよいよ結婚までしようと決心するからには、相当に良く相識った中でなくてはならない。それが一片の命令によって、結婚不許可となるのは、可哀そうである。」
と云うので、各人の身体検査をば、総て各人の責任とした。その検査場として設備してあるのが、「アダム・イヴの池」である。
イヴの池は、こんもりと繁った森の樹蔭に作られてある。
そこには、幾十の処女達が、まっ裸になって、水浴している。緑の黒髪を、惜しげもなく後ろにたらし

て、身には一糸もまとわず、プールの縁を歩いている美女もある。笑い興じながら水をはねとばしている処女もある。

この光景を見る人は、思わずそこに立ち尽くさずにはいられない。なんたる肉体美であろう。少しも淫猥な感じを起こさす余地はない。そのまま立派な芸術品である。

その理由をベーコンは、次のように説明している。

「理想郷に於ては、よい肉体美が、よい結婚の条件であるから。」

このイヴの池の物蔭には、それぞれ男たちが忍びこんで、肉体の完美を見守っている。あの処女をこそと男が目を付けると、男は大抵、自分の親友に頼んで、このイヴの池で見て来てもらうのである。

それは女の方ばかりではない。男の方にも「アダムの池」があって、そこにはやはり多くの童貞たちが、裸体で水浴しているのである。

女が、その親友に、男の肉体美を見て来てもらうこと、男の場合と同じである。

このようにして、始めて、肉体美がよい結婚の条件になる。

モアの『ユートピア』では、結婚の条件として、身体検査を行なったが、ベーコンの『ニュー・アトランティス』では、恋愛の条件として裸体見合いを行なうのである。ベーコンによれば、この考えはモアの方法よりは、一つの進歩であると云う。

とにかく、恋愛が、同性愛や娼婦や一部貴婦人から、素人の女性に推移してきた事は、疑うべくもない。そうなると、恋愛の重心も、単なる精神的愛や、玩弄愛から、生殖本位のそれへと移らざるをえない。

ギリシア時代の妻は、家事奴隷として、女部屋の奥深く捕獲収容されていたから、身心の検査などは問題にならなかった。中世の政略結婚でも同じであった。

それが、この頃になると、自然科学が優生学や、遺伝の問題に関心して来る。また文化科学は、この頃から十八、九世紀にかけてヨーロッパを席捲する機運にある民族主義、国家主義等の思潮によって、種族の増殖や改良を叫ぶのである。ここに科学者の恋愛観が、プラトン的伝統の継承であると共に、さらに文芸復興期のレオナルド・ダ・ヴィンチの霊肉単体的芸術などと、歩調を一にする所以もある。

カンパネルラの『太陽の都』に至っては、彼が二十七年の間、牢屋にたたき込まれて、あらゆる責苦艱難を蒙った革命家だけに、生殖問題に付いても、一層科学的である。

『太陽の都』には、もとより財産も、家庭もない。富も婦人も国家の共有である。男も女も日に四時間ずつ労働して、その生産されたものは、皆国家のものとなる。住民は、皆国家に養われるのである。男も女も、皆一つの、大きな寄宿舎のような所に住んでいる。これが「人間養殖場」である。

カンパネルラの考えでは、

「我々が、馬を飼い、豚を飼うにあたって、良い種を見つけるためには、千金をさえ惜しまないものもある。それほど畜類の養殖に骨を惜しまない人々が、自分の種族をより良くするために、馬匹改良に費やすくらいの努力を払っても、決して損はあるまい。ほっておけば、人類はだんだん堕落する。どうしても人間は養殖しなければならない。」

カンパネルラの人間養殖場では、富と同じく、科学的に人間が養殖される。よい人間を養殖しようと思えば、まず第一に、衣食住を改良しなければならない。

その寄宿舎が、総ての伝染病その他を根絶するように、はなはだ衛生的に出来ている事は、云うまでもない。まことに清潔である。衣服も務めて華麗なのを避け、清潔で衛生的であるのを本旨とする。

もしそれ、食事に至っては、専門の料理官が腕を揮って、美味で衛生的な食物を供給する。毎日、子供

は子供、大人は大人、老人は老人、病人は病人の、特別の献立が出来る。献立表は医者が作る。

さて、良い母は良い子を生む、女性が改良されなくては、良い子は養殖されない。そこで適宜の運動は、総ての人の任務であるとし、とりわけ女の運動に付いては厳重な日課があって、そのプログラムに従って訓練される。これは社会的義務である。

そこで、男女を問わず、年頃になると、結婚検察官がやってきて、身体検査はもとよりのこと、その性情から知能まで、綿密に調べあげる。その結果、適当な組み合わせが出来上がる。この組み合わせは、科学で決定した権威あるものであるから、人民は不服を云うことを赦されない。決定されたプログラムで、唯々として生殖に従事せねばならない。

けれども、せっかくこうして科学的に決定されても、男が他の女を恋したり、女が他の男を愛したりするようなことはなかろうか。

「勿論生殖組み合わせとして不適当な男女が、互いに恋し合うような事は、たびたび起こるに違いない。この場合、その恋人達には、互いに往復して、愛をささやき、花束を贈り、恋歌を交換し、時には戯れ合う自由をも与える。が、いかに愛しあったからとて、我等の種を乱すような行為は、絶対に赦されない。」と彼は云う。

まさに科学万能論である。

生殖組み合わせの適否を、科学の名に於て官吏が、決定しようというのであり、恋愛を通じての自然の組み合わせに対して不信（恋愛への不信は、功利的生殖観や生殖制度には、付き物であって、不義と云う名で醜悪視したことも、我国などではある。この場合の恋愛は、洋の東西を問わず、淫らな、色情的な、享楽的なものと解されている）である点では、先のモアに同じい。ただ、モアやベーコンの関心が、男女

相互に対して平等であったのに、カンパネルラでは、「よい母は良い子を生む」と、いくらか母性に重きをおいた事は興味を引く。

母性主義は、近代思想の一つの関門である。そして、ここから、ヨーロッパの恋愛思想は男性中心の考え方からようやく女性のそれへに、バトンが渡される事となるのである。

封建時代は遊戯恋愛の時代であった。そこには無内容な婦人崇拝のプラトニック・ラヴがあり、その事は、一部知的男性の寂蓼感の象徴化を示すものでもあったが、遊戯は遂に遊戯であり、その根底には肉欲主義が渦巻いていた。それは科学時代の生殖思想の到来によって正当化され、母性重視の時代を準備することともなった。

第六章　婦人の世紀

一四

ついに恋愛万能が「婦人の世紀」を作る。恋愛万能とは、「種の向上は恋愛の選択のみが計画し得る。」と云うことに対する自覚である。

そして、恋愛の選択は、恋愛の自由ないし自然が、社会的、経済的に、保障された日から、急激な進化を遂げるであろう。その時恋愛は自然意志（ならびに社会意志）を代表して、優良な性から、さらに、一層進歩した性（優良や進歩の内容は、恋愛それ自身が知っている）へと、選択して行き、かつて生物が、単細胞から哺乳類へと進化して来たように、我々人間を、なおも永遠の彼方へと進化せしめて行くであろう。

こうなれば、もう、モアの結婚管理も、ベーコンのアダム・イヴの池も、カンパネルラの人間養殖場もいらない。彼等が危険視した恋愛こそ、彼等に最も忠実なものとなるであろう。

しかし、恋愛が、それ自身のこうした個性を発揮し得るようになるまでには、多くの段階が必要とされる。第一には女性の一般的自覚であり、第二には女性の恋愛ならびに生殖への自覚であり、第三にはそれを生かし保障するものとしての社会改革である、この章では、主として第一及び第二の段階を概観したい。

十六世紀以後のヨーロッパの歴史は、民衆が新たに起こりつつある事情に適応した、新しい政治方法を模索する歴史である。

それは、これまでの政治、社会の制度が、いよいよ不適当になり、安楽でなくなり、面倒なものになって、人々は、次第に、従来の人間生活の経験とは全然異なった必要と、可能に直面して、全社会組織を思

慮して、改造しなければならないことを、悟ってきた物語である。

人事が、複雑であるために、それらも、また複雑ではあったが、主要な変化は、総てただ一つの原因に、帰することが出来る。

それは、事物の真相に関する知識が発達し、普及してきた事である。それは、最初は、少数の知者に限られて、その普及も徐々であったが、その後、非常な速度で一般民衆の間に普及してきた。

しかし、人間の精神的生活の変化に基づく大変化もあって、この変化は、知識の増進、普及と並行して行なわれて、これと微妙な関係を持った人々の生活を、共通的、根本的欲求や満足を基いとして取り扱い、より大なる生活に関係づけ、それに奉仕、参与せしめようとする傾向が、次第に増してきた。

政治的、社会的生活の状態のうち、第一に著しく変化したのは、文字が簡単になり、広く用いられるようになった事で、これと共に、大きな国家が現れ、広く政治的理解が、行なわれるようになった。

組織科学は、ベーコン以後非常な革新を生み出した。やがて、ロンドンのロイアル・ソサエティ、フローレンチン・ソサエティ、その他の団体が起こって、知識の探求、発表、交換を奨励するようになった。このヨーロッパの科学団体は、無数の発明の源泉となっただけでなく、さらに長い間人々の思想を支配した奇怪な神学に対する破壊的批評の源泉となった。

科学の探求と、古典研究の影響は、文芸に、古典主義の時代を与えた。

この古典主義は、形式の齊整を喜んで、激越の感情を忌み、これを発露するのを、下品な趣味であると考えた。

限りない空想の翼を広げて、現世の奇異に浸った文芸復興期と、狂熱した信仰に流血をも厭わなかった宗教改革期の後を受けた十八世紀が、これに制限を置くことを以って、主要眼目としたのは当然の反動で

あった。

規則を重んじ、理知を主とし、想像力は鈍くて、批評にのみ長けた時代。

しかし、形式一方の、冷たい、理詰めの、感情と想像の乏しい文学が、長く人心を繋ぐはずはない。反動の声は、至る所に起こった。

第一に、力強い叫びは、ルソーによって挙げられた。彼が、虚偽の社会と教育を罵倒し、赤裸々な自然人を求め、自由と平等のために、気を吐いた事は、何人よりも時勢に先んじかつ力強かった。

ルソーは、『エミール』を書き、『告白』を書き、『対話』を公にして、技巧を捨てて、自然に帰れと呼号した。

知力の圧迫に対する感情の反対である。虚偽と燥急と技巧と群衆心理との都会生活に対する呪いの声である。

それは因襲の殻を破って、自由な感情の表白を求め、生活を簡素にして、生気のない社会を改造しようとする熱望であった。

ルソーの声に呼応して、自由と愛国を叫ぶ若い文芸運動が、ドイツに、イギリスに、あらゆる国々に起こった。

女性の自覚は、文芸復興以来のこうした精神的現象の一環として芽ぐんだ。そして、後に見るであろうように、こうした諸意識が、産業組織の大変革に基礎付けられている事は、云うまでもない。

一七八九年のフランス革命は、歴史上に一新紀元を画したばかりでなく、婦人問題に関しても、その主張を現実化しようとする最初の飛躍を与えた。

一七八九年の八月五日、婦人の一団は、パリからヴェルサイユに押し寄せて、国王を擁し、当時の憲法

が、王位に登る権利を、一人男系の占有としているのを不当とし、婦人もまた人間たる限り、男子と同等の権利を与えらるべきことを主張した。

ついで、女優ローザ・ラコンブが、共和的革命的婦人と称する婦人団体を組織して、国民議会に、政治上男女が同権であるべきことを建言した。

オランプ・ド・グージュは、女権宣言書を、皇后マリー・アントワネットに捧呈して、人権宣言書が、男子の権利を認めて、女子を無視しているのを指摘した。

その宣言書に、国家は男女からなる国民を基礎とする。国法は国民全体の意志によらねばならない。故に、女子もまた男子と等しく、自ら、または代議員によって、これに参与する権利があることを主張した。この主張は、明らかに、ルソーの人権説を、論理的に推し進めたものであった。

フランス革命は、恋愛を宗教と関係ない市民の権利とし、また離婚を自由にした。しかし、その後、ナポレオン帝政時代になって、再び、離婚の自由を認めない結婚が、唱道され始めた。

この問題のために、小説『デルフィーヌ』によって戦った女流作家スタール夫人は、女流作家ジョルジュ・サンドと共に、注目すべき人であろう。

ジョルジュ・サンドは、サン・シモンの追随者たちと同じく、婦人問題の中心点として恋愛の自由を重んじ、『アンディアナ』、『フランティヌ』等の小説を通じて、社会の因襲を攻撃し、女の自由を主張し、その奴隷的結婚を非難した。

イギリス、アメリカ等における婦人運動家の多くが、人間としての権利の主張者であったのに対して、女性としての権利の主張者たる二人――エレン・ケイの先駆者としての――を見るのは、意味深い事である。

この女性としての自覚は、人間としての自覚を含めた、その基礎の上に立つものである。平等の権利の上の、個性の主張である。云うまでもなくこの個性は、女独自の「母性」及びそれに関連する子供の問題等を裏付けているものである。

婦人運動の経路を見るために、二期に分かつと、第一期は、いわゆる女権時代である。

第一期女権時代にあっては、人権平等の根底の基に、経済上の平等の権利、家庭生活上の平等の権利、ひいては教育上の平等の構利が主張された。

先のフランス革命時代の女権宣言に次いで、イギリスでは、メアリー・ウォルストンクラフトが、『女権の擁護』を著わして、教育、家庭生活の平等、人格の認識を主張した。

「婦人の行為は、男子のそれと同一の主義に基づき、かつまた同一の目的を有すべきである。」

「何故婦人の心は、好色者を満足せしめんがために、情事の術を持って汚染され、かつ愛の進んで友情となるのを、妨げねばならないのか。」

「婦人の霊魂の威厳は、動物のそれと同じく、疑うべきであるか。」

「ただ人の機嫌を取ることのみを教えられた婦人は、良人に対してと同様、他の男子の機嫌をも取るであろう。」

「何故に婦人を、無邪気と云う名のもとに、いつまでも無知にしておくか。」

こうした明快な、直截な理論は、当時の社会――女を情痴の奴隷たらしめ、また女自身それであった――を、鋭く抉るものであった。彼女は、非常に美しい容姿の人であったと云うが、この女権論のために、「理屈を云う縞蛇」とあだ名され、男子は勿論、女達からさえも、絶交の憂き目を見せられたと云う。

アメリカでは、シャーロット・パーキンス・ギルマン夫人が、『婦人と経済』を著わして、

「人生における重大な難事は、これを二つに分けることが出来る。その一つは両性問題で、その二は経済問題に帰因する。そしてあらゆる社会的疾病は、この二つの問題によって生ずる。」

と云う立場から、その論旨を展開した。すなわち、

「社会進化上、両性問題には二大系統がある。その一つは、一夫一婦の結婚制度であるが、これは、社会及び個人の福利を増進する最上のものとして、古来から、漸次秩序を追って、発達したもので、この発達は、社会発達上免れがたい自然発達の過程であって、人為的な法律を持って、強制的に造ったものではない。この一夫一婦の制は、一夫多妻、もしくは雑婚、その他の結婚制が、自然的であると等しく自然的の制度である。

元来、道徳的観念は、当初必要から起こったもので、この事実の上に根底付けられた一夫一婦制が、道徳上大きな価値があるのは、この制度が、社会及び個人の福利を増進するのに、与って力があるからである。けれども、この社会進化の自然的過程に伴って、不自然な過程が生じた。人類の両性関係を、恐るべき罪悪の源とした奇怪な病的現象がこれである。

それは、何によって生まれて来たかというと、両性の、はなはだしい性的差異の結果である。種の発達のごく最初の頃は、自然は漸次経験によって、二つの相分かれた有機体に、雌雄の区別を創造し、両者に差異を付けるのは、種の発達上はなはだ利益の多いことを知った。

この差異が、次第に単細胞の生物から、高級生物へ進むに従って、漸進的に発達して、別々に、雄性雌性を持つようになり、遂に高等な種族にあって、著しく相異なった両性が、性の引力によって強固に結合し、種の繁殖を計るのを見るようになった。

これは、両性結合及び両性差異における自然の真相であるが、人類に於ては、この機能を、極度に使用

した結果、病態に陥ったのである。

人類の両性差異が、過度であるのは、常に、それ自身の目的を達しえないばかりでなく、我等が最も重大視する種族の進歩を、相当に阻害するものであることを知ったならば、誰がこれを重大問題としないものがあろう。

けれども、人類は、両性に対する経済関係のある間は、それを、如何ともすることが出来ない。婦人が経済上男子に頼って、いわゆる従属的生活を送るために、ここにやむなく、勢力平均に変調をきたしたのであって、自然淘汰の基に於ては、総ての生活は、境遇に順応して、性質を変じ、しかも切実に、その境遇の基に生存し得るよう発達するものである。

男子が婦人の扶養者となれば、婦人のこの経済的境遇に於て、男子は、すなわち婦人を変化するのに、最も力ある者となるのである。しかも婦人は、この性的特徴を益々利用して、その生活の基礎としようとする。」

その一例として、

「婦人は、母たるの機能を全うするため経済生産に適しないので、妻は夫に扶養される義務があると、主張をする人がある。だが、他の動物は良く母たるの務めをするが、それがために自ら生活の出来ないような事はない。

しかるに、人類のみが、母は子を育てるために、一切の余事をなげうって、全精力をこの一事に集中し、これがためには各自その生まれつきの本能の発達を犠牲にしなければ、その母としての務めを、全うすることが出来ないであろうか。

もし、そう云うことが真理ならば、婦人が男子に従属する哀れむべき現状も、やむをえないと云わなけ

ればならない。」
と云っている。
　ギルマン夫人の説は、経済的従属が、人類の自然を妨げるものである、他の多くの動物は、よく母たる務(つと)めをするが、それがために、自(みずか)ら生活の出来ないような事はないと云う自覚に基づいたもので、「自我」を自覚した女性の――すなわち民主主義的自覚をした女性の、当然帰着すべき正しい考え方であった。
　しかし、一夫一婦「制」を、人為的なものでない、すなわち法律を持って強制的に作ったものでないとするのは、明らかに誤謬である。
　このことに付いては、前にもたびたび触れたように、こうした結婚制度は、モルガンが証明しているように、私有財産の男性による掌握に淵源している。そして、この制度以来、女性はまったく経済人たるの権利を失ない、「女部屋」に閉じ込められ、もしくは家事奴隷としてのみ労役に従わされたのである。
　私が云うのは、一夫一婦「制」についてであって、自然的現象としての一夫一婦の傾向を云うのではない。しかも、ギルマン夫人の苦慮の中核をなす「女性の経済的非独立」は、確実に前者と関連するものであることを知らねばならない。
　そして、これを知れば、その解決策が、ギルマン夫人によって提唱せられているような、婦人個々のいわゆる「経済的独立」等で充分と云うような程度のものでなく、もっと大きな、根本的なものに懸かっていると云うことも、知られて来るであろう。
　メアリー・ウォルストンクラフトや、ギルマン夫人の主張は、あらゆる性的不平等を排する主張であった。人格の平等を認めよと云う叫びであった。この叫びは、ひとり女性側だけから挙(あ)げられたのではなく、男子側からも唱えられた。

イギリスの経済学者、ジョン・スチュアート・ミルは、イギリス婦人参政権運動の恩人であった。一八六九年には、租税納付をする婦人に、都市行政の選挙権を、一八七〇年の教育条令では、婦人が、教育委員会の委員に選挙される権利を、一八八二年の既婚婦人財産法では、妻の特有財産権に関する独立管理権を獲得するのに、彼の努力に負うことが多かった。

ミルは、『婦人の服従』を著わして、

「生まれながらに、男子でなくて女子であるために、生まれながらに、貴族でなくて平民であるために、それ以上高い社会的地位、立派な職業に従事することを、禁ずるようなことがあってはならない。ところが、現在多くの文明国の法律制度を見ると、その人が一生、ある仕事に携わるのを禁ずるのは、女性の場合だけである。

女性が、ただその女性に生まれたと云うだけの理由で、どんなに努力しても、種々の官職に就けないと云う事は、他に類のない、近代立法の例外である。

そこで、現在の女性は、男性と同じ職業、その他の事に付いて、能力を持っているかどうかと云うことになるが、これは何人(なんぴと)にも分からない事である。今日のように、女性が男性の付属物となっている社会では、女子の本質と云うものは、分かるものでない。現在、女性の天性と称せられているものは、まったく人為的に出来たものである。一方に於(おい)て圧制を強調し、他の方に於(おい)て、不自然な刺戟を与えて出来たものである。この点では、女性は奴隷より、一層、その天性を、不自然に毀損(きそん)されている。

それで、男女両性の知的、道徳的差異が、一見どんなに大きくみえても、その差異が自然的なもの、本質的なものであると云う事は出来ない。

であるから、女性と云うものは、一体どんな物であるかと云う事は、今日では、明言する事は出来ない。

今日の医学者や、生理学者は、色々と男女の身体上の差異を研究して、発明しているが、これは心理学者には必要な知識ではあろうとも、医者は心理学者ではないから、女性の精神的特質などは、常識から一歩も出ていない。我々の云い得る事は、女性の天性に反するような事は、たとえ自由に発揮させても、女性は決してそれをやらない。つまり、生まれつき出来ないことを禁ずるのは、馬鹿げた事で、たとえ女性がやれる事でも、その競争者の男性に及ばないような事は、自然と競争の結果、女性は負けてしまう。で、女性のために、特別の保護を加えたのは、不必要な事で、ただ男性のための特別な保護、すなわち社会上の特権を廃さなければならない。

男性一般の輿論（よろん）は、女性の自然的の任務は妻であり、母であると云うことになっているが、現在の社会状態からみると、本当の輿論（よろん）はその反対で、彼等は、女性の定められた自然的任務が、その天性に、最も不適当なことだと思っているらしい。だから、もし女性が、自分自身に、好ましい生活を始めるようになると、現在、彼等に自然であると云って押し付けられている仕事を、しなくなると恐れているらしい。」と云っている。

女権主義の時代では、職業上、教育上、家庭生活上の、不平等な法律が否定され、平等の自由が求められた。伸びるがままに伸ばし、生きるがままに生かせと主張された。

これらは、一般に承認され、正当な主張として、いまでは、殆（ほとん）ど一般の常識となった。実質的成功の如何（いかん）はともあれ、一般が正当と認めるようになった事は、この女権主義運動の、偉大な収穫であった。

女権主義は、かく、社会生活上、また家庭生活上の、性的無差別を主張したのであるが、その無差別の権利と、自由と、人格の上に立って、さらに個性上の問題を提出したのが、第二期のいわゆる女性主義である。

なぜ、そうせねばならなかったか。

女権主義は、既成の社会、既成の家庭を肯定し、その場所における権利の平等を、主張したにとどまった。それらを変革すべき意志はなく、強いて云うならば、女性が職業人である場合、当然引き起こされて来る生理もしくは母子問題の保障等に関する当座的な提案ぐらいのものにすぎなかった。（最もこれは、結果としては、母子保障の社会化となり、革新社会に重要な内容を付与することになるものではあるが）

これに対して、女性主義は、正しい恋愛、それによる家庭の幸福、及び健全な、また安定した出産、育児というような女性的方面からの意欲と提唱を持ったのである。

これも、後に見るように、中途半端な、しかも偏った提唱に終わってはいるが、母子の安定に付いての、熱烈な欲求から、最後に、一種の社会主義的自覚に到達していることが、注目される点である。

女性主義の先駆者としては、さきにあげたフランスの二女流作家、スタール夫人とジョルジュ・サンドがある。女権主義者の意見が、多く夫婦間における相互の権利にあるのに対して、女性主義者の意見としては、第一に恋愛の自由（正しくは恋愛の自然）が来るのであり、右の二婦人は、その先唱者であった。

つまり、女権主義は、第一段階として、不平等な従属的地位の打破をその任務としたのであり、女性主義は、第二段階として、すでに従属的地位を排除し去った後の、人格と人格の相互愛をもって、夫婦であるとしたのである。

従来の結婚は、多く強制的結婚で、男には選択する権利が比較的与えられているが、女は殆ど屈従的に、それに従うのであった。

そこで、女性にも選択の自由を与えよ。相互の愛情を結婚の基礎とせよ。愛情のない夫婦を無理に一緒にしておくような不合理を除け等々。そして、これらを前提として、子供中心の世界を顕現するのが、女

性主義の目的とされる。

この第二期の女性主義は、エレン・ケイをもって代表された。

一五

エレン・ケイは、ジョルジュ・サンドの「心霊が感覚を裏切りもせず、感覚が心霊を裏切りもしない」霊肉一致の恋愛論の継承者であった。

彼女は云う。

「新しい性的道徳の要求は、騎士時代に、その同性的関係の領域に存在した所の要求に奇妙にも類似した点と、また全然類似しない点とを、持っている。

すなわち、恋愛公事庁は、結婚と恋愛とは、互いに相排斥しあうと云う主義を持っていた。――騎士時代における恋愛に関する観念の内には、新しく生まれて来る子孫が眼中に置かれていない。しかるに、現代の希望にあっては恋愛を通して、恋愛者自身を完からしめると同時に、種族をも完からしめようとするのである。」

ケイは、宗教的にまで強烈に人格的恋愛を仰望し、それによってのみ生殖せんことを強調した。恋愛の燃焼のうちにのみ優良な子孫の約束せらるべきことを信じた。近代の進化論や、優生学が、彼女のこのような母性本能を支持して、一層に燃え立たせたのである。

「結婚の理想的形式とは、各自の幸福と、種族の幸福とを高めようと、欲求するところの、相互恋愛からなる、全く自由な男女の結合を云う。」

こうした前提のもとに、

「如何なる結婚でも、そこに恋愛があれば、それは道徳である。たとえ如何に法律上の手続きを経た結婚であっても、そこに恋愛がなければ、それは不道徳である。」

と彼女は云う。

だから、正式に結婚したとしないとは、彼女にあって、本質的な問題ではないのである。

この論理を推し進めた時に、恋愛なき結婚、または恋愛に始まっても、中頃になって、醒めてしまったような結婚には、「自由離婚」こそ、道徳的であるとされる。

こうして、ヨーロッパのキリスト教的一夫一婦婚は、彼女によってここに果敢に破壊された。もっともこの事はかつてフランス革命でも提唱せられ、実践せられた事であったが、彼女によってそれが一層思想的に発展させられたのである。

以上のように、ケイは、プラトニック・ラヴを排し、恋愛結婚――自由離婚を主張する。そして、その上に立って、彼女が最も強調する所は、「母性としての責務」であって、この点から、女性が母性以外の職業を持つことを原則として否定するのである。

私は、第二章で、エレン・ケイの恋愛論が、生殖重視のそれであることを云い、その結果として、恋愛を尊重しながら、しかも結局それを道具視する――すなわち生殖意識によってそれを制約する、ひいて女性自身をまでも道具視することに於て、結局従来の家族制度のそれと変わりがないことを指摘したが、それを立証するために、多少冗漫になるかも知れないが、数ページを費やすことを赦されたい。

エレン・ケイは、初め至高の心霊的な恋愛観を掲げた。が、彼女は、心霊的な恋愛、生殖のための恋愛、この二つの恋愛観を持っていた。それで結局至高の恋愛は一種の描かれた詩にすぎず、いざ実践となれば、生殖意識のために、制約を受けることとなるのである。

つまり、彼女は、恋愛結婚の主張者ではあるが、それは、生殖の道具としての物であり、結局彼女は恋愛を信用しない。彼女は恋愛以外の第三者的意識によって、恋愛を制限しようとする。（この点前章のモアや、ベーコンや、カンパネルラの伝統を引いている）恋愛そのものが内具する貞操や、秩序に信頼しようとしない。

まず第一に、母性としての職務を重視する所から、彼女は晩婚論者であり、早婚の弊害に付いて、次のように云っている。

「若い夫婦が、彼等の恋愛感情の永久性を、互いに、最も深く感じている場合でさえ、それで直ちに、彼らの恋愛が、後年までの結合の権利と、それに付随する責任とを、当然に有しているはずのものとは云えない。

なぜなら、若い樹は、あまりに重い果実の重みによって裂け、或は曲がることがあり、あまりに若い樹の上では、果物がその十分の価値にまで実らないことがあるからで、ここに、自然が自ら、若年者の結婚に反対している証差がある。

性急な結合の結果、やむをえず結婚した夫婦の可能性に関しては、しばらく論じないとして、ただ、深い感情から、互いに所有し合うことを続ける若い夫婦の確実性に付いて、論議を進めることにしよう。

彼等は、その行動の結果、当然に生まれて来る子供について、必ず苦悩する。この結果の負担に耐えないという彼等の意識は、疑いもなく、彼等をしてそれを避けようと試み（○避妊）しめるであろう。

けれども、それは恋愛生活にとって、醜悪な序開き（発端）である。多くの人々は、この点をもまた、危険であると考える。すでに新しい子供を生んで、種族に寄与している所の人々にとっても、上の二つの危険のいずれかが、伴わざるをえない。

共同生活の開始にとって、この危険の予覚が、不安と不健全を与えることになる。蓋(けだ)し、全体としての種族的本能は、なお不完全のまま残されてあるから。

かようにして、恋愛は、精神的意味の幾分を無くし、また、肉欲の自然的拘束を無くするのである。しかしながら、これらの結果が伴随しないとしても、いわゆる「失敗」は、なおかつ、こうした場合における最も幸福な、また、最も普通な出来事であると云える。しからば、一体それは事実にはどう現れるか。」

そして、生活上子供を支えることが出来ない理由、子供や結婚が自己発達の障害になる理由を挙(あ)げて、弱年者の恋愛や、自由結合や、結婚に反対している。

しかし、「若い夫婦が、彼等の恋愛感情の永久性を、互いに、最も深く感じている場合でさえ、それで直ちに、彼等の恋愛が、後年までの結合の権利と、それに付随する責任とを、当然有しているはずのものとは云えない。」と云うのはどうであろうか。若い夫婦の愛に、永続性がないと云って、その恋愛を非難するのは不当で、年寄りの恋愛でも、そう云う意味でなら永続性があるかどうかは疑わしいことも多い。

彼女は、

「若い樹は、あまりに重い果実の重みによって裂け、或(あるい)は曲がることがあり、あまりに若い樹の上では、果物がその十分の価値にまで実らないことがある。」

と云い、「すなわちここに、自然が自(おのず)ら、若年者の結婚に反対している。」と云っているが、若い樹は、あまりに重い果実の重みによって裂ける前に、若い樹自身、果実を自分の若い枝の上に実らせる衝動を起さないであろう。そんな衝動は、成育してからの事で、そんな衝動を若い樹が起こしたとすれば、それはもう、自(みずか)らを裂かないまでに成育した証拠である。

自然は衝動を司(つかさど)る。それで、若い者に、そんな深い感情の恋愛が持たれたとすれば、それは成育と称し

てよいと思う。

仮に、若干の例外はあるとしても、多くの若い樹が、皆果実によって、自分を裂いている事実は認められない。多くの若い樹は、大抵自分を裂かないで成育するのである。

「すなわち、ここに、自然が自ら、若年者の結婚に反対している。」と云う言葉は、恋愛者に与うべきではなく、強制結婚の制度、及びその支持者に与うべきであろう。恋愛もない若い者を、強いて結びつけようとする従来の結婚制度に対してのみ、この言葉は必要であろう。

彼女はまた云う。

「よし縦令、一時の恋人達が、未成熟期の結合によって、常に与えられる所の支障を甘んじて受けようとするにせよ、それは彼等自身の問題に留まる事で、子供は到底損失を免れる事は出来ない。

殆ど総ての少壮学者の意見によれば、後天性が遺伝せられると云うことの誤謬であることが、明らかになって来つつあるが、この見解を弁護し、或は維持している所の他の人々は、種族進歩の条件として、両親の活動や環境が一定の特質を得来たるまでは生殖が行なわれてはならないと、多少の力を持って主張している。

また、婦人の性質に注意を与えている純正な心理学者は、婦人の性質は、三十歳前後に至るまでは充分な精神的成熟の域には到達せず、しかも婦人は、その年齢まで、若々しさを、なお保つもので、またその年齢まで、彼女の容貌は、真に完全な表現をなすに至らぬもの、その年齢に至って、始めて彼女の個性、知力、情熱が充分に目覚め始めるものであって、これらの諸特質だけが、ただ深い恋愛を育み得るので、かようにして、晩婚によって、始めて婦人は、万事を獲得するのである。

これに反して、夫が妻を「教育」せねばならないようなことになる早期の結婚の結果は、往々、ある機

智ある婦人が云ったように、夫がその妻を、他の男のために教育すると云うような運命になるのである。」

三十歳前後を持って、女性の結婚適齢期とする説は、明らかに詭弁としか考えられないが、このように女性の晩婚を奨励する彼女の真意は、思うに母性としての手腕なり、能力なりに、重点を置いている所にあろう。すでに女性道具視が、ここらから顔を出しかけているのである。

しかし、ケイは、

「結婚年齢の遅延は、おそらくは婦人によって反対せられないであろう。若い娘たちは、他人の経験によって学んでいる。二十歳前後に結婚した婦人で、彼女の二十五歳前が、未成熟であると云うことを、証拠立てていないのは、殆どない。かつまた秘密の結合を急ごうとするのは、めったに婦人の望む所でないが、若い婦人が恋愛をする場合、相手の恋人が肉的要求のため悩んでいるのを見ては、その欲望を満たしてやろうと望む所から、やむなく早期の結合をすることも多い。」

と云って、晩婚をあくまでも婦人の自然性に帰している。

こうして、彼女は、当然自制の必要を説き、ニーチェの、

「情欲の遂行は、恋愛を速成的に発達させる。従って、その種の恋愛は、その根が弱く、容易に引きぬかれうる。」

と云う言葉を引き、

「恋愛が口へ出されず、また約束によって束縛されず、ただ期持と直覚に充ち満ちている場合には、彼等は幸福の時期を延期すべきである。ただし、そうは云っても、遊戯や、散歩や、勉強やに於て、互いに連れ立つことを廃する必要はない。それ自身健全な事であり、喜ばしい事であるし、また、幸福に対する準備となるものである。

しかし、それは、さてまた尚早（しょうそう）の結合へ導く危険性もあり得る。けれども婦人達は、時の来たるを待つ間の苦しさを減少するために、如何（いか）なる場合に自分自身を守るべきかと云うことを、自得するであろう。彼等は、秘密の婚約を切り詰めるであろう。そして両者が、感情の稀薄になる恐れある危険を犯し、また男子の側で、恋愛を瀆さるる恐れある危険を冒し、常に公然たる婚約をなすに至るであろう。」

と云い、「幸福の時」の来るまでの期間、口に出さない恋愛から秘密の婚約、公然たる婚約と云うような三段構えで恋愛を維持しながら、一方性関係を避ける工夫をしなければならない。

また云う。

「彼女が恋情発達の主導者たる資格を獲得した時、始めて彼女らは、恋愛の春の新鮮を保持する方法を自得するであろう。」

情欲遂行の時期を保留する事は、すなわち彼女らの恋愛の春の新鮮を保持する一方法なのである。

しかし、女は今後、その性欲を恋愛技巧のために差し控えるようなことをするよりも、むしろ容易には許さないようになるであろう。すなわち、むやみに――しかも、ニーチェの言葉のように、情欲遂行を持って恋愛の結末とするような男性には、決して許すことが出来ないようにまで、女性の中に、操持がはっきりと、そして、強く目を覚まして来るであろう。

が、貞操を、ある人に委（ゆだ）ねてよい、極めて自然な恋愛にあっても、この社会では不自然な自制を余儀なくさせられる場合が多いことの方に、我々の関心はむしろ深まらざるをえない。

ここでは、子供を生む事は、「公然の結婚」を他にしては、充分保護されていないばかりか、むしろ迫害されているのである。また、公然の結婚をして良い場合でも、生活の不安定が、それをためらわせる。女性は、恋愛の春の新鮮を保持するための自制を夢見るかわりに、最も不自然な自制を強いられているので

ある。

けれども、そうした事実を無視してケイは云う。

「一対の相恋愛するものが、上に述べた年齢、すなわち充分に成熟した年齢に達し、そして両者の完全な結合が、ひとえに両者自身の生命を益々増進させ、また種族の生命をいよいよ増進せしめ得る時期に達しながら、なおかつ性的結合に入らないでいるのは、彼等自身に対し、また種族に対し、罪悪を犯しているものである。」

これが彼女の到着点である。すなわち、ケイ的恋愛論理学は、「情欲は生殖を指向する。恋愛は情欲を指向する。故に恋愛は生殖を指向する。」と云うような三段論法的方法論で成り立っていることが、以上に見てきた所で証明せられたと思う。もって生殖本位の恋愛論とする所以である。

このように、生殖本位者たるケイは、いよいよ出て、その尺度を持って、恋愛を制限しようとするのである。次に見るのは、恋愛の選択についてである。すなわち云う。

「恋愛の選択は、すでに或る場合、たとえば血族の近い者の間、異人種の間、または或る種の疾病を有する者等の場合には、すでに一種の本能となっている。

思うに、法律や、習慣が、この選択に影響して、充分に感情や、本能にまで、それの感化力が及んでいるのである。

今日に於ては、兄及び妹が、その相互の恋情を、無理に押さえねばならないと云うような事はない。蓋し（まさしく）、彼等は、その血族関係を意識しているために、そのような事が起こらないのである。別に禁止をしないまでも、単に自分の血液が含む衝動から、アメリカの婦人は、黒人或は中国人とは結婚しないのである。てんかん持ちの婦人は、法律上の禁止によってではなく、男子がそう云う婦人を欲しないと云

う事実によって、除外せられている。もし法律だけで、除外せられているのなら、その法律を欺いて潜ることが容易である。これに反して、人体の美や、力を培育すべき有利な条件を備えている男女が、非常な度合いで、その恋情の選択の選に入りがちである事は、周知の事実である。」

と云って、法律や習慣の影響による選択意識を肯定し、それを推し進めようとしている。私は云いたい。それらの選択意識こそ、若干の例外を除けば、殆ど過去の間違った結婚制度の所産で、人種的、階級的偏見に充ち満ちているものであると。

なるほどアメリカ婦人は、黒人や中国人と恋愛しないかもしれない。これに反して、有色人種の男女は優等人種としての白人と交際し、恋愛することを、却って名誉とさえしているのである。日本の男は、一種の誇りと共に、金髪美人を得て帰国する。が、彼等の国の男性は、それと同様な誇りと共に日本の女を得て、彼等の国へ帰って行くような事はあるまい。しかし、これらの事は、必ずしも、真の意味での血の優劣への配慮からではなく、つまり、一種の偏見に過ぎない。かような偏見は、人類を不幸にするものであるから、ケイのように肯定すべきではない。

また、てんかん持ちの女は、或は忌避されるかもしれない。しかし、それも必ずしも病気そのものへの配慮のみからではない。なぜなら、てんかん持ちの男の場合――それも下層の男は別であるが――は、必ずしも女によって忌避されるとは限らないのである。特に有名人とか、金持とかであれば、却って同情される場合さえある。

私は、恋愛と云うものは、むしろ優劣人種間の偏見や、または、てんかんの女とか男とか云うような配慮を超えて結合する所に、それ自身意義があると思う。それは、恋愛は両性の一体化にあるのであり、一体化は、第三者的な干渉や、思惑を構わない所にのみ、却って純粋なものとして成り立つからである。

けれども、ケイのように、「生殖意識」と云うこと――それも畢竟極めて浅薄な独断的な――を、第一義としているものは、結局彼女が口癖にしているような高い心霊的な恋愛など思いもよらず、その一歩手前で種々の口実のもとに、それを制約し、通俗化するのみであることが分かるのである。

彼女は、

「恋愛の選択が、常に神秘である事は、真理である。しかし、主として魅力として作用する所の個人的および宇宙的性質は、次第に男女両性によって、もっと明瞭に理解されるようになり、またもっと力強く探求せられるようになり、そしてそれらが、配偶選択の決定的基礎として、もっと重きを加えて来るようになるであろう。」

などと云い、若い男女は、恋愛する場合、恋愛選択の標準として、病者を差別すること、家族感情、祖先崇拝、純潔な血の誇り等の新しい意味における尊重、新時代をへて発達してきた本能を含んでいる所の一階級ないし一種族の間の最良の長所の維持などの諸条件を顧慮すべきであるとしている。

歴史は、我々の祖先が、しばしばそんな顧慮から脱線し、もしくは脱線せざるをえなかった所に、かえって種族の更新と拡充があったことを語っているが、彼女はそうは思わない。

そして、

「種族に有利な条件の下に行なわれる恋愛選択を奨励すること、同時に、種族に不利な条件の下に行なわれるそれに制限を与えること、これこそは生命の網である。」

と断じている。

ここに至って、我々は遂にモアやカンパネルラの官僚的恋愛監察制度と同列に立つ彼女を見るのである。

さらに、彼女は、

「私の信念は、教養が齎(もたら)す偉大な創造である所の個人的恋愛は消滅しないであろうし、従って、また一夫一婦制の危険も除かれると確信する。故(ゆえ)に、倫理上「破戒」とされているような恋愛も、種族を高度化する見地から行なわれた場合には、秩序を乱すことにはならない。

この点に関する進化論の要求は、現在なお認められ始めない。なおまたそれは、道徳を代えるような勢力を働かすだけの成功を収めていない。

けれども、いつかは、単に表向きではなく、結婚を破るによい理由が存する場合には、次の如(ごと)き権利が、おそらく許容せられるであろう。

その権利とは、人の妻ないし夫たるものでも、おのれの夫以外、妻以外に恋を感じ、それらの男女によって母たらんとし、また父たらんとする熱烈な欲求を抱くに至り、しかも、その新しい相手が人の親たるに充分な優秀の心身を備えている場合には、これに離婚を許して、その欲求実現の喜びを所有せしむる権利、これである。」

と云って、既婚の男女に、新しい恋愛が芽生えた場合、それを点検した結果、新しい関係の方が種族に有利であると分かれば、その時には、離婚を許可して、新しい結合を認めると云うのであって、こうした事は、従来では「破戒」とされ、「不倫」とされたにせよ、種族中心の世界では、むしろ道徳的なものとされねばならないと云うのである。

ただ、ここに一つの問題が残されてある。それは、もし不幸にして、新関係に優秀性が認められない場合はどうなるかと云うのであって、その場合には、離婚が許可されないから、一旦(いったん)他の相手に恋愛を感じた男女が、再び、元の古い相手に逆戻りせねばならないだろうと云う事である。これは、まことに旧関係

の相手には災難であり、少なからず不愉快な事であろうと思われる。延いては（それが原因となって）、このような心的状態が、種族の上に不利益を齎す事は確実であると云わねばならない。

生殖本位の思想によって、恋愛を道具視し、拘束した彼女は、当然同じ理由によって、女性を道具視し、拘束する。

ここでは、引例を省くが、彼女は女の母性本能を、後天性のものとし、もしその恣意に任せる時は、充分退化する危険がある、現に科学はすでに乳房線の消滅を研究しつつある。などと云いながら、このような女達に母性専門業を課そうと企画しているが、これは、第一歩における女性道具視と拘束意識を、物語る以外のなにものでもない。

さて彼女は云う。

「人類種族は、未来の運命を決定すべき岐路に近づいている。それは、旧式な男女間の分業を、継続すべきであるか否かの岐路である。

旧式の分業にあっては、婦人の多くは、単に子供を生むばかりでなく、さらにまた、それを家庭内に於て育てるのであり、男子は、直接には結婚により、間接には母性に対する国家の補助により、婦人の生計をば、婦人達が社会のために、その職分を果たすの期間内は、これを負担せねばならないのである。

また婦人は、その精神上、身体上の発達期間内は、その職業を選択するのにも、その生活上の方法を選ぶにも、常に、母親としてのその固有の使命に、自分自身を適応せしめる目的を、保持せねばならないのである。

これに反し、婦人が生産事業のあらゆる方面に於て、男子と仮借なき競争をなすべきものとするなら、婦人は必然的に、漸次人類に新しい子孫を寄与すべき力や、希望を失わざるをえない。また、当然、国家

は、今日婦人の自由活動にも、最も妨げとなっている子供に対する世話から婦人を解放すべく、単に子供を育てるばかりでなく、子供を生むことにまでも、何らかの方法を企図しなくてはならないのである。」

母性と産業は両立しない――これが彼女に於て、あらゆる立論の基礎となっているのであるが、彼女は、原始以来数千年、それを両立させてきた農山漁村婦人を見落としている。しかも、これらの女達こそ、家庭専門の都市的婦人よりも、却って人口増殖に奇与した女達であることをも。

ここで考えられる事は、母親としての使命が、全身と生涯を持って、この一事に当たらねばならないほど至難なもので、労働生活が母親の本能を犠牲にしなければならないほどの大事件であると云うような事は、本質論としては、成り立たないと云う事である。

殊に、彼女における誤謬の最大なものは、今日の個別的家庭制度の主観から、一人の母親による保育と云う形式を抜き差しならないものと観念している事であるが、保育形式は、時代によって、どんなにも推移するもので、たとえば古代では、一人の母が、掛り切りで育てるのではなく、氏族全員による共同保育がなされ、大きい集団などの場合には、ミブ部とか、ユエ部とか云うような専門のトモ部があって、これに当っていたのであり、母親たちには、充分生産に従事――と云うより、むしろ生産の主要成員でさえあったのである。

振り返って今日の社会を見ると、ケイの悩みも、一応無理からぬものはある。旧式な個別的家庭形式をそのまま据え置きながら、無慈悲にも資本主義がその上に襲いかかって来ている。資本主義は、大衆の生活を不安定にし、その結果として、女性をも家庭から職場へ否応なしに駆り出す。すると、当然家庭生活にひびが入る。家事は投げやりにされ、子供は無視される。ここに今日の大きな社会問題としての母子の問題が出現する。

しかし、それは、勿論旧式な家庭に逆戻りする（ケイが力説するように）ことによって救済出来るほど生易しいものではない。第一、逆戻りからが決定的に不可能であって、この問題を解決するには、社会を前進せしめる――社会進化の線に沿うことの他には、我々には道はない。

この意味で、ケイの説は、明らかに時代錯誤であると云わねばならない。

ただ、ケイの説で、若干興味があるのは、家庭の国有化の面である。これは前にも見た官僚的恋愛監視観にも、片鱗を見えているが、さらに進んで家庭監視に付いては、

「今日に於ては、家庭は、幸か不幸か、検閲されてもいなければ、また、賞与を掛けられてもいない。しかしおそらくは、そういう時代は、近付きつつある、現に、フランスに於ては、第七子以後は、国家の費用によって養われ、また、多くの有能な子供を生み育てた婦人に対しては、勲章が与えられている。然らば、これまではそうでなかったにしても、いわゆる「解放された」婦人も、おそらくは、その力を、家庭と云う方向へ発達せしむることに、いくぶんの興味を、再び持つに至るであろう。」

と、いよいよ、その傾向を、露出させている。

そして、さらにそれは、母観に対する国家の報償制度に於て、全貌を現すのである。

とはいえ、このことに関する、ケイの構想は、恋愛論や母性論に比し、はなはだ見劣りする簡単なものであるが、要するに、彼女によれば、母の仕事に従事している女性に対しては、国家が俸給を与うべきであり、子供の養育は国家の補助及び父母両者の負担とされるのである。

離婚の場合は、

「自分達の夫婦関係が、過誤であったからと云って、そのために、その間に出来た子供を、協力して養育する義務が赦免されるものでないと云う事は、むろん承知すべきであるが、しかし、彼等はその子供の

養育の任を果たすために、必ずしも同じ屋根の下に同棲しなければならないと云うことを感ずるには及ばない。」

と云うが、家庭外の育児を否定する彼女は、こう云う離婚によって、

「ある父親の作る家庭は、今日(こんにち)よりも、さらに一層現在の母親ばかりでなく、さらに他の母親の子供をも含むことになろう。また、母親の家庭さえも、多くの異父の子を含むだろう。」

と云うのであり、それらの異父異母の子供達に対し、離婚別居し、次の結婚にさえ進み入っている多くの父母が、依然扶養の義務を持つ、もしくは、持たねばならないとすれば、かなり複雑な家庭生活が、そこには展開するであろうと、考えられる。

しかし、真摯(しんし)な母性論者としてケイが、遂(つい)に今日(こんにち)の家庭経済（夫のみが扶養者である）に対しては、これに安心することが出来ず、国家と夫婦相互による母子保障に向かって、一歩を進めねばならなかったことだけは、注目に値する事であろう。

ケイは、初め、その属する有産層の主観から、ギルマン夫人等のいわゆる「経済的独立」主義の形響下にある多くの女性が、職業を求めて家庭を空虚にし、母性の義務を怠るであろうことのみを憂慮し、経済的独立と母性との両立を求めて、前記の解決（母親に対しては国家が俸給を与えると云う）に達したわけであったが、その透徹したそして同情深い眼が、ようやく無産層に移るに従い、おそらくは、事態のさらに重大で、複雑であることを知ったのであり、そこからいよいよその思想が、国家社会主義的変化を遂げて来たものと思われる形跡がある。

事実、無産層では、ギルマン主義等とは別個に、家庭はまったく破綻し、母性は蹂躙され、私生児、貰い子殺し、母子心中、不良児或(あるい)は浮浪児の続出、売淫、そして父親の不断の失業や死亡による母親の労働

の加重等、悲惨な状態が露呈されており、穏和な彼女にも、これらが漸次認識されて来たのであろう事は、晩年になって、社会主義的集団たるフェイビアン協会の一員となったことに見ても、うなずける気がするのである。

そして、それは、真摯な母性主義または母性主義者の、当然の帰着点でもあったのである。

要するに、ルネサンス以後、漸次開展された「婦人の世紀」は、恋愛論及び母性論者たるエレン・ケイによって、いちおうの到達点に達したと云える。

第七章　近代思想芸術と恋愛観

一六

ルネサンス以後、唯心的な恋愛観は、漸次、唯物的、本能的なそれへと推移して来るが、その恋愛観も、女性の立場からは主として母性本能からの恋愛の自然への希求となる事は、エレン・ケイに見た通りである。ところが、男性の立場からは、ややこれと趣を異にし、肉欲を中心とする恋愛観が、大胆に立ち現れた。

そして、この男性の肉欲恋愛が資本主義恋愛の主調となった。女性の指向する性生活は、この時代までは遂に保障されえず生かされえないからで、当然女性側も、この肉欲恋愛に圧倒され、歪曲されて、娼婦主義となる事は、次章に見る通りである。

封建時代までは、宗教は、堅く禁欲主義を取った。それは、一つには、この時代の経済制度が、人口を要求しなかったことにも原因がある。しかし、経済制度に、変革の機運が生じて来ると、宗教も、従来の態度を変えて来る。

ルターが、宗教革命を成し遂げて、キリスト教固有の禁欲主義を退け、

「世にも稀な神の恵み蒙っている場合のほか、婦人は食物や、飲物や、睡眠や、その他の自然的要求を満たさずにはいられないと等しく、男子無しではいられないのである。

それと同じように、男子も婦人無しではいられない。それは、種族を繁栄させようと云う欲望が、自然によって、飲食に対する欲望と同じく、植え付けられているからである。

故に、神は、手足や、脈管や、循環や、総てこの目的のために働くものを、人間に与えている。ところ

がこれに背いて、自然をして、その当然の道に赴かしめないものは、あたかも火をして燃えしめず、水をして濡れしめず、人をして飲食、睡眠を取らしめないとするのと何の異なる所もない。」と云う考えに基づいて、肉欲を肯定したのも、それであったのである。

この後、一般の両性問題に関する考えかたは、反動的にまで、肉欲自然主義となり、肉欲耽溺主義となった。

そして、それに加えて、この時代の民族主義、国家主義及び労働人口の要求等から、「生めよ殖やせよ」の生殖思想が強調され（これは後に経済的破綻から訂正されて、その弥縫策としての新マルサス主義となるが）、これが、肉欲恋愛を正当化する基礎的理論となった。

こうして「生殖」は、あらゆる方面から注目され、認識されてきた。

ショーペンハウアーは、その盲目的意志説によって、生殖意志を説明した。

彼は、創造的、保全的、永続的意志の力を、事物の根底であると見たのであるが、この意志は、人格的なものではない。ただ盲目的に、時間空間の上に、個々の物体や、生体を、産み出して行くのである。このような見方から、彼は、恋愛を生殖の――そして肉欲の、一つの詭計に過ぎないとする。

つまり、彼の恋愛論は、生殖意志を根本として、成り立っている。のみならず、宇宙意志の焦点は、生殖器であると云っているほどで、生殖を生物の根源であるとしている事は勿論である。

それに付いて、次のように云っている。

「意志を木の根に、知力をその梢に比べたが、それは内部でも、すなわち心理的にも、その通りである。これを、外面から、生理的に云えば、生殖器は根で、頭脳は梢である。栄養をするのは生殖器ではなくて腸の瓣であるが、しかも根はこれではなくて生殖器なのである。個体が、その根である種族と関連する

のは、これによる。

種族のために働き、生殖作用を済ませば、いずれの動物の個体も、一時衰弊して、一切の力を消尽(しょうじん)し、昆虫にはそれから直ちにに死ぬのもある。

これらによって見れば、個体の生命は、この根底では、種族から借りているもので、あらゆる生活力は、いわば種族の力を、一つの溜まりに、堰(せ)き止めたようなものである。

これらの説明としては、どうしても、生命の形而上的基本は、直接には、種族の中に現れ、これによって、個体の中に現れるとしなければならない。

いずれの動物でも、また人間と同じく、盛んな熱心と、奥深い真面目(まじめ)とで、この仕事をし、その生殖欲は激烈であって、動物が、その本来で、また主要なこととして、その真実本性としている種族の一員として働くのは、実にこの方面の作用を中心とする。

その他の作用や機関は、直接には個体のためにするもので、個体の生存は、根本に於(おい)ては、第二次的のものにすぎない。

動物の本性全体は、この一事に集中して、この衝動は激烈であるが、これはまた、個体は永続しないから、一切のことを種族のために尽くし、これがすなわち、その真実の生存であると云う意識にも現れる。」

意志と認識との関係に付いては、

「試みに動物の発情の状や、その生殖行動をするのを見よ。その時には、他の場合に見られない真摯(しんし)と熱心がある。

一体、何事が起こって、そのようになるか。動物には考えはないから、これらの事は、少しも知らない。

ところが、あたかもそれらを悉(ことごと)く知ってでもいるように、時間の中に種族を永続するために、非常に熱

心に配慮をする。

すなわち、自分は生き、また永らえたいと云うことを意識して、その欲が最高の度に達したのを、生殖の行動で表すので、これが、その場合に、自分の意識の中にある万事である。

衆生（しゅじょう）（生きとし生けるもの）が永続するには、これだけで、まったく充分なので、意志は根本であり、認識はこれに付け加わったものである。

だから意志は、いつも認識の導きを受ける要はなく、その根本性の上で、決定さえすれば、この欲は、自然に現識の世界に客観となって現われる。

人間では、その生殖作用には、完全な認識が伴うが、これに導かれて出るものではなく、生きようとする意志から直接に出、その集中として現れる。それ故、これは本能的行為に数えるべきものである。

つまり、動物が、生殖作用を営むには、その目的を認識してするのではないように、人間の場合の工作衝動もまた同様で、その場合には、意志は大体に於（おい）て、認識の媒介を経ずに発表し、認識は、いずれの場合にも、その細目に関するばかりである。」（ただし、この点、ショーペンハウアーは誤っている。人間の場合は、認識によって、意志を逆用し、玩弄的性生活を創造する。また、極度の禁欲生活をも）

意志は、根底で、知力（認識）は、第二次的に付加されたもの、と彼は云うのである。この観点から、特質の遺伝に付いて、次のような議論をする。恋愛論からは、多少逸脱するが、紹介しよう。彼は云う。

「生殖の場合には、父親（優れた性）は、作るものとして、新しい生命の根本となり、従ってそれに意志を与えるが、母親（劣った性）は、受けるのものとして、第二次的で、知力を与える。

それ故、人間は、その道徳性、その性格、その心情は、これを父親から伝え、それと反対に、知能の程度や、性状や、方向は、これを母から受ける。」

「ローマの古代史を調べると、一族が代々相継いで、自分を国に捧げて、勇を表した家族が多い。ファビア族や、ファブリカ族は、その例である。

また、アレクサンダー大王が、征服侵略好きであったのは、その父のフィリップと同じである。

スエトニオが、ネロのことを述べるにあたって、この怪物の家系に付いて、道徳に関して述べていることも、すこぶる注意すべきである。すなわち、このクラウデア家について記している所では、この家は、六百年間、ローマに栄えていたが、いつも活動一方で、気が勝ちすぎて、残忍な人ばかりが出たと云う。テベリオ・カリクラも、これから出たが、最後にネロが出た。

ネロに至って充分に開展したこの家系の恐ろしい性情は、その祖父にも、また一層強く父にも現われたが、ネロでは、位置の高いために、自由にこれを発表し得たのと、また、その母のアグリッピナが、理性のない狂婦であって、その子に、情熱を制すべき知力を与え得なかったのとで、酷(ひど)くなったのである。

法王アレクサンダー六世の子は、親の形見で、醜悪きわまったセザル・ボルジアであった。有名なアルバ伯の子はその父親に似て、同じような残忍な男子であった。

タンプリエ騎士を虐殺し、処刑した、欺譎(ぎけつ)で、不正で、残忍なフランス国王フィリップ四世の娘が、イサベラであり、イギリス王エドワード二世の配偶になり、王に対して反逆を起こして、王を捕え、彼に譲位状を記名させて、後、これを獄に投じ、虐待して殺そうとして果たさなかった所から、いまこれを語るのも恐ろしいようなことをして、殺してしまった。

血に渇した暴君で、信仰の守護者と云う名を得たイギリス王ヘンリー八世の初婚の子は、狂熱と残忍で名高い女王メリーで、たくさん異端焚殺をしたので、流血メリーの名を得た女であった。また、その再婚の娘エリザベスは、その母親であるアンナ・ブレンの卓越した理性を受け継いで、そのために、狂熱を放

散せず、父親の性格を制しはしたが、それを亡ぼしはしなかった。スコットランドのメリー女王に対する、残忍なやりかたなどは、つまり、これが折りに触れて発露したものである。

マルコ・ドナトによれば、ファン・ゴインスは、あるスコットランドの女のことを云っているが、その父親は、この女の生まれた年に、追いはぎをし、また人間を食ったものとして、焚刑に処せられたので、その子は、まったく他の手で育ったが、年を取るに従って、人肉を食いたがって、その欲を満たしている時に捕えられて生きながら埋められたと云う。」

「ヨセフ第二世は、マリア・テレサの子であった。カルダノは、その自伝で、わが母は、記憶と才とに優れたりきと、云っている。ルソーは、その告白の第一巻に云っている。私の母の美しいこと、その精神、その才能――の中には、現状にとっては立派過ぎるものがあったと。

ダランベールの母は、クローデヌ・ド・タンサンと云ったが、精神の秀逸な人で、その著わした幾多の小説や、類似の著作は、その当時に好評を博し、今日でも、なお読むに足るものだと云う事である。

カントの母に付いては、シューベルトが書いた新しい伝記に云っている。

『彼自らの判断によれば、その母は、天性理会の優れた人であった。その当時には、女の子は教育を受ける機会に乏しかったが、彼女は後に自分自らで教育して進んだ。散歩する時も、その子に、天然のあらゆる現象に注意を呼び起こすようにし、それは皆神の力であると説明した。』

ゲーテの母親が、理会に鋭く、精神に富み、また熟慮に富んだ婦人であった事は、よく知られている。文学で、この婦人の事は、実にたくさん出ているが、父親の事は、まったく現われず、ゲーテ自身も、その父親があまり秀でない能力の人であったと云っている。

シラーの母親は、詩を味わう力があり、自分でも詩を作ったが、その断片は、シワブのシラー伝に残っ

ている。

ウォルター・スコットの母親は、詩人であって、当時の文人達と交際していた。ベーコンの母親は、秀でた外国語通であった。」

この実例で見ると、あの女性軽蔑家のショーペンハウアーが、あたかも女性讃美家ででもあるような錯覚を起こさせるものがある。少なくとも男子は知力にすぐれ、女子は蒙昧であると云う彼の持論にも拘わらず、遺伝は、この逆コースを示すとすれば、彼が無用視する女子教養の必要が、ここに痛切に感じられる事は否定出来ない。

もし痴愚であるよりは、優秀の才であることを善しとするなら、女性の才能を尊敬しなければならない。彼によれば、女性の才能のみが、優れた子供を産出するから。

女性は彼によれば進歩の坩堝である筈であり、進歩の母体である筈であり、進化の母体である筈である。従って、生殖に於て、第一次の性である筈であるが、彼は、女性を劣った性、第二次の性としている。

これは、勿論彼の盲目意志の哲学、進化否定の哲学から来ており、従って意志（男子の性）を第一次の性とし、知性（女子の性）を付加物とするのであろう。

この点、ウォードが、生殖（女性）を静的、分量的なものとし、両性（男性）を派生物としたのに、通ずるものがある。

近代の生殖説は、その中心となるものが、ウォードのように女性であると、ショーペンハウアーのように男性であるとを問わず、殆どが、この種の生殖一元説である事で共通している。

従って、恋愛は、生殖（肉欲）の虹化であり、または昇華したものであると、そこでは考えられるのである。

ショーペンハウアーは云う。

「恋と云うものは、いかに虚空に彩をなすようでも、その根は、まったく男女の愛欲にあり、この愛欲を、一層立ちいって、特別にし、また厳に個体に限ったにある。

肉欲は、それ自ら(みずか)では、主観の要求に過ぎないが、この場合には、上手に、嘆美と云う客観の面を被り、それで意識を騙(だま)す方法を知っている。

客観的には、そのように嘆美と云う崇高な面影で現れても、恋愛は、ただ一定の性情、ある個体の生産をのみ目的としている事は、愛が、相互の愛情のみでなく、その相手を自分のものにすること、すなわち、身体の楽しみを必須とするのでも分かる。

主我は、いずれの個性にも、深く根ざしている特性で、個々意志の活動を刺戟するには、その主我の目的でこれを動かせば、間違いなく行く。

個性の上に、早くに、また立ち入って、多く力を及ぼすのは、生滅の個体性よりも、種族の方が多い。ただし、個体性が、種族の生存と、その性情のために働き、また、犠牲をも辞してはならないはずであっても、その案件が重要である事は、知力に対しては(これは個体の目的のためにのみ動くものであるから)、それに相応しただけに、力を及ぼし得るだけ分かり易(やす)くはない。このような場合になって、天然が、この目的を達するには、個体に対して、どれだけ妄想を植えつけ、それで、実は、種族のためであることをも、自分自ら(みずか)のためになるやに見せかけ、自分では、自分のために尽くしているように妄想しつつ、実は種族のために尽くすようにする。

こうしてきて、直ち(ただ)に、消えうせるべき幻像に過ぎないものを、眼前に浮遊させて、それを動機として、現実相の代理をさせる。この妄想は、すなわち本能である。

本能は、大抵の場合は、種族の感覚であって、種族のためになるものを、意志に見せ掛ける。だが意志は、個体のものになっているから、種族の感覚が見せ掛けるものを、個体の意味で知覚せしめ、実は、ただ一般の目的のためにしているものを、個体の目的を追うものと思わせるようにして、意志を欺かなければならない。

多くの考えでは、幼児が母を探し求める以外には、人間には、本能は、殆どないと思っている。

しかし、我々には、極めて明白で、複雑な本能が一つある。すなわち、肉欲の満足のために、他の個体を、まじめに、また我意通りに、選ぼうとするもので、この満足は、それ自らでは、個体に迫って来る要求に基づいた感覚の楽しみとしては相手の個体が美であっても、醜であってもかまわない。

ところが、美醜に対して、熱心に顧慮し、それと共に、またそのために、選択を綿密にするのは、その選択するものは、自分でしていると思っても、実は、そうではなくて、その真実の目的は、生まれて来るべきもののためであり、それによって、種族の型を、出来るだけ純潔に、また正当に、維持しようとするのである。

身体上の偶事や、道徳上の逆事は数多く、そのために、人間の姿に色々の変種が出来るが、けれども、その通りの型は、そのあらゆる局部で、始終回復しつつある。

これの出来るのは、美の感覚に導かれてでき、これが、肉欲の先導をしているからで、これがなければ、肉欲は、嘔吐を催すべき要求と堕落するに違いない。

それで、何人でも、まず一番美しい個体すなわち種族の性格が、最も純潔に現れているものを、最も好み、また強くこれを望む。

しかし、それについては、自分に欠けている所を、完全に持っているもの、また不全の点でも、自分の

に反対した相手を、美しいと思う。」

ショーペンハウアーによれば、恋愛とは、種族の意志が、恋愛と云う妄想を組み立ててやり、それによって、子供を生ませようとするものであると云うのであり、種族の意志は、第一次的に男性の性欲に現じ、さらに常に女性を手先として誘惑すると云うのであろう。

ヴァイニンガーも、若干(じゃっかん)これと似た見方をしている。彼は云う。

「一体、女は、男の肉欲によって、わずかに、その存在を保っているのであるから、もし男が、肉欲を否定したなら、女と云うものは存在しない。

だから、男が肉欲を肯定したと同時に、女を創造したのであるから、男が肉欲を有する限り、たえず女は発生する。

ところが、肉欲は高尚な存在より下って、虚無に行こうとするのであるから、女は男の罪悪を構成するのである。

この罪悪を償うために、恋愛がある。男が肉欲の肯定、すなわち女の創造によって、犯した罪を贖うために、男は女を愛する。

しかし、女を廃棄させることの出来ない恋愛は、罪悪を脱却する力がない。ただ、これによって、女を向上させることが出来るだけである。ここに於(おい)て、男が無価値な女を愛する（肉欲ではない）理由を知ることが出来る。」

ショーペンハウアーも、ヴァイニンガーも、進化論者でない点で一致しており、女性を性具と見る点でも一致している。

ただ、前者は、女性を盲目的宇宙意志に依拠する無自覚な一器具であると見、恋愛は、肉欲だけでは嘔

吐を催すので、生殖意志の企みで、幻彩をほどこし、それによって男性を騙すものだと云うのに対し、後者は、男の肉欲の具として女は発生したものであるが、そのこと自身それは卑小な、堕地獄的な存在であることを示している。自己の肉欲を満足させるために、そうした無人格な玩弄物としての女を作った男性は、その贖罪として、女を仮に尊敬し、愛によって高めようとする。それが恋愛だと云うのである。要するに、両者共に、肉欲軽蔑者であるが、しかも肉欲もしくは肉欲思潮への敗北者である所に、近代的意味があると云えよう。

ことに後者は、ダーウィンの進化論を毛嫌いした人であるが、そのダーウィンの書簡集の中には、次のような、おもしろい観察が記してあると云う。

「先日私は、ある種の蔓脚貝について、面白いことを発見した。それは、女性のみを有している蔓脚貝で、他の点に於ては、普通の蔓脚貝そのままであったが、ただ一つ目立った特色を持っていた。すなわち、貝殻の二つの扉の中に、二つの小さなポケットがあって、その中に、一足ずつの小さなご亭主が入っていた。

それより、まだ面白いことがある。それは、両性具有の蔓脚貝であるが、自身が両性を具有しているに拘わらず、なおその他に、予備の小さなご亭主を幾つか持っている。はなはだしいのは、七個の予備亭主を持っていたのがある。」

これで見ると、男の肉欲の具として女が作られたと云うヴァイニンガーの説はむしろ逆であるようにさえ見える。

ウォードの生殖論は、一歩進んでおり、肯定的である。彼は云う。

「男の欲と、女の欲とは、まったくその性質を異にしている。勿論、女にも男と同じ性欲が無いではな

いけれども、しかし、自ら進んで、盛んに相手を求めると云うほどには、なっていない。そこで男は働きかけで、女は受身であると、云われている。

ところが、女性は別に、男性にまったく欠けた、一つの欲を持っている。生殖と交精との他に、いま一つの第三の目的を達すべき欲望を持っている。

全体、男性は、非常に遠心的で、大いなる変化性を有しているが、無制限の変化は危険である。進化の要する所のものは、単に変化だけではない。品質もまた分量と同じ重要なものである。女性は、実にこの品質の保護者である。

蓋し、変化は進歩的のこともあれば、退歩的のこともある。あまりに度がすぎて、変則状態に導くこともある。

そこで、変化には、ぜひとも指導調節と云うことが、必要になって来る。

この指導調節の任に当るのが、すなわち女性である。女性は、種族の根幹として、男同士の激烈な競争の間に立って、常に自若として、その成り行きに着目し、自己の種族に有利な男性を、選択することを怠らない。

自然は、男性に向かって、ただ「授精せよ、異質を交叉させよ。」と命ずるが、女に向かっては、「取捨をせよ、最良を選択せよ。」と命令する。

この選択は、女性特有の本能であって、男の肉欲とは、まったく性質が異なっている。

植物や、最下層の動物には、この本能はまだ生じていないが、しかし、その発現は、ずいぶん古い所から始まっている。

その結果、かの劣弱微小な男性が、遂に種の根幹たる女性に類似するまでの発達をなすにいたったので

ある。」

彼によれば、女性が男性に対して、試みた選択は、実に善良であったと云える。

そこでは、女性の選択は、種の特質に向けられていった。孔雀の特質は、羽根の美であるから、孔雀の雌は羽根の美を選択した。鈴虫の特質は、声の美であるから、鈴虫の雌は声の美を選択した。尾長猿の特質は、尾にあるから、その雌はそれを選んだ。人間の特質は知性であるから、その女性はそれを選んだのであろう。

けれども、そうしたそれぞれの特質よりも、全生物を一体系に貫く特質の選び方をも、女性はしたように思われる。

すなわち、アミーバから人間へである。それらの知性化に於てである。

盲目的生物から、感覚的生物へ、知覚的生物へ、こうして、その底に、盲目から知性にまで到達しようとする、一貫した進化意志があって、その進化意志が物質を駆使し、征服して行った所に、進化の体系が現われる。

そして、この進化は、生物の雌が、知性に達する過程としての特質を、だんだんに選んで実体化して行った道程なのでもある。ウォードの考えかたに従えば、こんな風にも思われるのである。

しかし、人間では、選択権は、顕著に、男性に移り、その結果として、女性の心身が、玩具化された事は争われない。男性の肉欲の具として女性が作られたと云うヴァイニンガーの言葉は、人間に於て一面の真理であると云えよう。

だが、男性のこの種の選択が極点に達した時、その一方で、男性――特に知性に於て優秀な男性の間に、寂寥感が起こり、ここから、かつての女性の選択に似た、善良な意志（客観的に云って）を持つところ

の選択が、男性によって持たれて来ることも事実であろう。

それは、女性を自己もしくは自己以上に引き上げようとするものであって、ある時は、ダンテ等のような女性尊敬ともなり、他の時は、ショーペンハウアーや、ニーチェや、ヴァイニンガーのような女性蔑視となるのである。さらに進めば、女性への正しい信頼ともなるであろう。

このように見て来ると、ウォードは選択本能を女性だけのものとするが、この本能は男女交互に、または相互に、用いられるものと、私には思われるのである。

そして、この選択本能が、意識の上に表現される時に、それは恋愛と呼ばれるものであろうし、そして、それは、強く両性の合体を意志するものであろう。

近代思想にあって、いま一つ特徴的なのは、女性の不変観である。これは、ウォードもそうであり（第三章参照）、ショーペンハウアーもそうであり、ゲーテなども、女性を頑強な不変力と云っている。

これは、一面では、従来もしくは現在における女性の被圧迫の姿を観察したものと思われるが、他面では、やはり生殖一元論の考え方である事は疑いない。

生殖一元論では、いかに進化論的外衣をまとっている場合でも、結局ウォードのいわゆる静的、分量的な生殖——種族の無限にまでの保存もしくは増殖に帰一するから、その生殖の母胎である女性も、畢竟（ひっきょう）静的なものとして観念せられるのである。この場合、男性の変化も、単なる枠内的変化以外にはありえないとされる。

なぜなら、男性は、静的女性の周囲を、常に遠心的に、ぐるぐる廻りを演じているほかはないからである。

男女両性の消滅とか、消滅を通じてさらに一層高い新生命への発展とか云うような、決定的な変化もし

くは進化は、そこでは考えられないのである。

従って、限局された、憂鬱な、盲目意志的な世界観となり、この盲目的な生殖意志への嫌厭の情が、近代文芸の上に恐怖を持って表現せられていることに付いては、後に見る通りである。

近代における男性の立場からの恋愛論ないし恋愛観は、多かれ少なかれ肉欲中心であり、生殖一元論出会って、フロイト派の心理学者の如きは、あらゆる愛や才能等の殆どが、肉欲から構成されるとさえ云っている。

次にそれをみよう。

一七

フロイトは云う。

「我等によりて、愛と称せられる総てのものの、中核をなすものは、云うまでもなく、人々が普通に愛と称し、そして詩人の歌う所のもの、すなわち性的和合を有する性愛である。

しかし、我等は、そのほか愛の名を分有する何物をも、すなわち一方では自愛、他のほうでは親の愛、子の愛、友愛及び一般的人間愛をも、さらに具体的事物及び抽象的観念に心を捧げることをも、性愛から切り離さない。

そして、我等がこうすることの、正当である事は、精神分析的研究の教える処によって証明される。

精神分析的研究の教える処では、右に述べたそれらの欲求、或は努力は、両性間にあっては性的和合を迫り、また、他の関係に於ては、この性的目的から退けられ、或はその目的が充足されることで停止するが、しかも、なお、その原本的本質を、充分に保存して、明らかに同一性（自己犠牲、接近の欲求）を固

持する所の、同一の衝動、諸昂奮の表現となる。」

と云い、

「性本能は、特殊な諸本能の多数から成立するので、すでに、子供に於て活動している。」

と云って、親に対する子の愛情を性欲に還元する有名な論証をなすのである。彼はまず子供の性本能の種々相から説く。

「子供の性本能そのものは、はなはだ複雑なもので、これは種々の源泉から生ずる多数の構成要素に区別され得る。

子供の性本能は、まず第一に、生殖機能から独立している。そして、その性本能は、我等が類比及び結合によって、性的快感として包括する諸種の快感を得るために役立つのである。

子供の性的快感の主要源泉は、特に昂奮しやすい身体の、一定の部分の適当な昂奮であって、それらの身体部分の主要なものは、生殖器のほか、口、肛門、尿道口、及び特に皮膚、ならびにその他の感じやすい表面である。

我等は、性的快感を得るために重要な、身体のそれらの場所を、性欲発生帯と云う。

そして、子供の性欲生活の最初の段階にあっては、その満足は、彼自身の身体の、それらの部分に於て得られ、外物を要しないものであるから、我等はこの段階を、自己性欲充足態と称することが出来る。

性欲発生帯から得られる、自己性欲充足の一適例は、嬰児が吸乳作用によって得る快感に認められる。

なお、この段階での他の性的満足は、生殖器の手淫昂奮である。

これは、その後の成人生活にあっても、重要な意味を有するもので、多くの人々は、終生、この習慣を、完全に脱却する事は出来ない。

しかし、それら及びその他の、自己性欲充足的行動の他に、対象として他人を見る快感、或はリビド（性的要求）の本能的諸構成要素が、子供に於て、はなはだ早くから現われて来る。

これらの本能は、能動的及び受動的として、相対立する一対として現れるので、その最も重要なものは、他人に苦痛を与える快感（サディズム）と、他人から苦痛を受ける快感（マゾヒズム）、見る快感と、見られる快感等である。

ただし、見る快感からは、後に知識欲が派生し、見られる快感からは、芸術的及び演劇的表現の衝動が、派生するのである。」

そして性欲或はリビドから、色々な愛及び愛情的結合の発生する過程を、同一化、対象占有、昇華等で説明し、子供の持つ親への愛の真相を説き示すのである。

「精神分析では、同一化は、他の人格者との感情結合の最も早い表現である。小さい男の子は、父に対して特別な興味を感じ、父のようにあろうとする。けれども、父との同一化と同時に、男の子は、母の対象占有を始める。こうして男の子は、心理学的に、相異なる二種の結合を示す。その一は、母に対する優しき性的対象占有の結合、他は、父に対する同一化の結合である。

が、これらの二種の心理は、男の子の心意生活が、たえず統一化されて行く結果として、遂に二者が合流してくる。そして、この合流によって、エイディプス複合が生起する。小さい男の子は、父は彼と母との結合を妨げるものと、考えて来る。

父との彼の同一化は、今や敵対的調子を帯び、そして、母に対してもまた、父に換わろうとする願望となる。

その後起こる所の抑圧はそれらの児童的な、性的諸目的の多数の放棄を迫り、そして、両親との関係に、

深大な変更を生ぜしめる。

子供は、なお両親に結び付いているが、しかし、目的を阻止された衝動を持って、結び付いているのである。この感情を優柔と云う。

しかも、無意識界では、早代の感覚的要求が、種々の度合いで強く保持され、原始的な流れが、ある意味で存続するのである。」

と、フロイトは説くのである。

フロイトは、畢竟（ひっきょう）、阻止された性欲が、あらゆる精神的な愛情となる、しかし、無意識界には、常に原始的の性欲の流れが、存続していると云うのである。

彼の恋愛観もこれに基づいている。

恋愛は、性的衝動の方面から、直接的性満足の目的のために行なう対象占有にほかならない。そしてそれは、目的を達すると共に消失するものである。これ、すなわち人々が、普通な、感覚的な恋愛と称するものである。

しかし、リビド的状態が、それほど単純である事は稀（まれ）で、人々は、一時的消失した欲望の復活を確信するので、性的対象を持続的に占有し、性的欲望の静まっている中間時でも、やはりこれを愛するのが必然的である。

そして、ここから、精神的な恋愛が昇華される。フロイトは、阻止され、中止された性欲の精神化――すなわち昇華をあらゆる場合に見るのである。夫婦間の精神的愛情なども、さしずめ彼によるならば、性欲の連続的渇望からの昇華にほかならないであろう。

昇華とは、化学上の術語で、一物質にある熱が加えられると、その物質が、固体的状態から、液体に化

成することなしに、直ちに気体に化成することを云うのであるが、フロイトは、この化学上の術語を借りて、彼の思想を表そうとするのである。

フロイト派の学者フィスターによると、その直接の発動が禁止された衝動、或は本能は、間接な表現を求めると云う。

そして、その間接的、或は代用的表現中には、多数の病的状態が見出されるが、しかし、その直接的機能を抑圧され禁止されたリビドの、有用な適用もまた存する。

それは、もはや、性欲的でない高尚な目的を立てることに於て、行なわれる。

我等は、こうして、我等の精神的作業のために獲得されたエネルギーによって、おそらくは、最高文化産物を産出したのであろうと云う。

しかし、ここに注意すべきは、衝動のあまりに早すぎた抑圧は、その抑圧された衝動、或は本能の昇華を、赦さないと云う事である。

このような抑圧が除かれたのち、昇華への道が、再び開かれるのである。

昇華は、その形式的方面に於ては、種々な複合が、それ自身のために、新しい観念を作ることや、感情の置換と、なんら異なる所はない。

しかし、昇華は、その内容に於ては、閉じ込められ、押し付けられた衝動、或は本能が、それと同一の心理的水準にある他の形で発動することを意味するだけでなく、さらに、その本能的発動が、優秀なもの、また高等な倫理的価値を有するものとして承認されることを、意味するものである。

キャナイト人が行った、淫猥なバアール神の祝祭や、肉欲的希望を持って満たされる回教の極楽思想は、性欲の昇華を意味するものでなく、ユダヤの大預言者が、リビドを、強大な社会的衝動及び倫理的に高尚

な敬虔の念に化成した時、ここに、性欲の真の昇華が行なわれたのである。

そして、昇華は、主として、感情に於て、たとえば芸術及び詩歌の愛として、表現することが出来る。が、それはまた、大なる成功を持って、意志的活動の道にすすみ、一般的利益、社会事業、人道主義的熱誠に、我等を導くことが出来、思惟の仕方を変じて、数学、或は、天文学などを、産出することもある。

つまり、生命力は、本来の諸機能から、主としてそれらの諸機能を、象徴的に実現する如き高等な諸活動に、すなわち原本的傾向の最極大転化を表示し得る諸活動に転向するのである。

しかし、真実な昇華の行なわれるには、種々な妨害があり、そして、それは総ての人に於て、同様に行なわれるのではない。

神経病的固定は、昇華を妨げる。で、それは、高等な文化の敵である。それは、本能或は衝動を、有害な鎖に繋ぐものである。

これに反して、昇華は都合の良い事情のもとでは、幸福及び倫理的効験の高度を与える生活条件を、本能のために作るものである。

充分な健康を有し、芸術、学問、慈善事業及び宗教等に於て、豊富な、生き生きした興味を見出すが、しかし、感覚的快楽に対しては、はなはだ冷淡な人々がある。

しかし、総ての人々が、この転化をなす能力を有するのではない。多くの人々は、総ての昇華に含まれる犠牲をなすこと、すなわち、一定の下等な諸欲望を放棄することを、少しも苦痛としないが、しかし、他の人々は、到底、それらの欲望を放棄することが出来ない。

これが、フロイト派の性欲昇華説の大要である。勿論、恋愛と生殖でさえ、関係はあるが別個のものであるとする私などから見れば、総ての精神的現象を、性欲のみから出たとする説などは、一種の妄想であ

ると断ずるほかはない。

そして、それはあたかも、栄養は腸の瓣(べん)が支持するのではなく、生殖器が支持するのであると云ったショーペンハウアーの意見と、完全に一致していると見るほかはない。

我々の生活機関の二大要素は、生殖と栄養であろう。生殖は種族につながり、栄養は個体のものである。そして、この種族的本能と、個体的本能は、あらゆる諸要素の中に、微細に配分されてあるもので、たとえば、性欲は子供を生む事で種族の本能に属し、恋愛は個体の合体を指向する事で個体の本能に属する。この二大本能は、相互的関連的なものであって、ウォードやフロイトのように、いずれかを根源として、一元的に片付け得るようなものではない。

しかも、我々が、種族的、総体的としているものも、事実は、一個体に過ぎない。そして、この総体的一個体も、部分的一個体と同じく、生死を持つものであり、その総体的個体の生死は、部分的個体のそれと関連するものである。

総体的個体の不変の意志が、部分的個体の在り方を釘付けていると云うようなショーペンハウアーなどの一元説は、却(かえ)って逆でさえあり、事実は、部分的個体の変化や生死が、ひいて総体的個体の変化や生死を結果するとも云い得るのであると思う。

総体的、もしくは部分的個体の生死問題――こんな事は、勿論(もちろん)、いまの我々には、不可知のものである。だからと云って、これを考えることを避けようとすべきではなく、考える事は、知性を持つ我々の特権であり、ここに科学の進歩もある。

いろいろ考えると、なにもかも無だと云う人があるが、なるほど考えても考えなくても、客観的には、我々は単なる無、単なる物体的現象に過ぎないかもしれないが、その物体そのものに没入している、物体

の一つの因子たるものの主観では、我々の進化的要素は、不断に高まり、深まりつつある。――とにかく、単なる物体的、本能的状態から、意識的、理性的状態へと向上しつつある所に、我々人類の進化法則がある事は事実である。

この理性――知性を、単に「無限に不変である所の性欲態」の一表現であるとするのは、我々の組みしない所で、むしろ知性的分子が進むにつれ、それと反比例して、本能分子が退化する。すなわち、こうして、総ては挙げて進化し変化すると云うのが、我々の仮説であり得る。

しかし、生殖（肉欲）一元の昇華式恋愛論は、近代恋愛の根本をなすもので、いまだにこれを打破したものはないのである。

わが国でも、田中王堂は、

「世の中には、性欲は肉欲的であり、恋愛は精神的であると云って、両者を峻別しようとする論者もあるけれども、両者は、本質的には差別があるものではなく、恋愛は組織せられて働く、性欲にほかならない。」

と論じている。

倉田百三は、

「恋愛は、性欲と質を異にするものでなく、より高き形における性欲である。その意味に於ては、如何なる天的な恋愛も、性欲を除拒したものでなく、精練された、高められた性欲である。

どぶろくの如き酒から、最も芳醇な清酒が、精練されるように、性欲の衝動の中から純化せられたものであって、始めから異質のものでない。」

と云っている。

従って、

「無邪気な肉交は、罪悪ではないが、低いものである。天的な恋愛は、肉交なくして、性欲が飽和するものでなければならない。

これ、性欲を淡くせしめた結果でなく、浄められた結果である。

その人は、もはや肉交せずして、低いものが肉交によって感ずるよりも、大きな満足を感ずる。」

と云う。

まさしく昇華式恋愛論であるが、我々に不満なのは、「選ばれた恋愛」と云う思想が、そこに付きまとっている事である。天的な恋愛、選ばれた浄いもの、高いものと云う考え方で、これは、性欲一元論の陥る反動的態度である。

性欲は、それほど汚ないものであろうか。低いものであろうか。

我々は、ただ、性欲は性欲の性質を、恋愛は恋愛の性質を語ればよい。物には、その存在と、存在の価値がある。

しかし、存在を平等ならしめ、しかも、その間に不離の関係を付与し、統一を与えるべく、従来のあらゆる恋愛学は無力であったのであり、いずれかの一方を重視し、もしくは蔑視することなしには、それらは成立しなかったのである。しかも、重視は蔑視の一面であり、蔑視は重視の他面である。

ショーペンハウアーも、

「天的なる恋愛には、もはや肉欲なく、また激情さえなく、ただ静かな美のみが支配するのである。

しかしながら、かかる恋といえども、造化が初め生物に付与した性欲を、排除して得られたのではない。それが純化されて、その内の精のみとなったのである。

もしそれが排除されているならば、その美は、ある一種の美ではあっても、我々を性的に喜ばせる事は出来ない。」

これまた、昇華式の典型と云わねばならない。

結局、近代の恋愛論者は、恋愛は、これを否定し得るけれども、肉欲を否定する事は出来ない。肉欲の上に立つ恋愛至上意識は、肉欲の昇華としてのそれであるか、肉欲を核とするそれであるかの、いずれかであって、畢竟広義にもせよ、狭義にもせよ、昇華式恋愛であることには、変りがない。

厨川白村は云う。

「両性間の恋愛が、性欲に根ざしている事は、今人の誰しも疑わない所であるが、ただそれが動物と違って、人間への進化と共に、浄化せられ、醇化せられて、最高至上の道徳となっている事は、考えてみねばならない。

かの男女間の事とし云えば、直ちにこれを、色情とか、劣情とか、痴情とか云う言葉で、貶し去ろうとする、古風な道学者の如き、彼等自らの頭脳が、この点に於て、まだ畜生の域から、一歩も進んでいないことを、示しているに過ぎない。

人間が、最初その動物時代に於て、異性との結合を認めたのは、明らかに性欲満足と、生殖欲望とのために他ならなかった。

しかし、進化と共に、やがてその欲望は浄化せられ、純化せられ、詩化せられて、そこに恋愛と云う至上至高の精神現象を、生ずるに至ったのだ。ここに至って、すでに最初のいわゆる「劣情」や欲望は、全然、無意識心理の底に沈んでしまう。

恋は儚い浮草でもなく、根無草でもない。あくまでも、深く強く、性欲と云う泥田の中に根ざしている

が、やがて、それが恋愛となって高く美しく花咲く時、根帯はすでに泥土の中に姿を没していることを、思わねばならない。」

これも昇華論である。

しかし、彼はまた、

「動物からの進化と共に、劣情は浄化せられて、そこに恋愛と云う至高な精神現象を生じ、最初の劣情は、全然、無意識心理の底に沈んでしまう。」

と云うけれども、恋愛と肉欲は、併行し、併存しており、肉欲が雲散霧消して、恋愛と云う一個の雲霧化した事実はない。

彼は、

「愛情が、一つの状態から、他の状態へと転移されて行く事実は、なにも小難しい学説などを、担ぎださずとも、我々が日常生活に於て、しばしば見る所である。

たとえば、黄金欲の如き、最初はその黄金と交換して得られる物が欲しさに、黄金を求めたのであった。ところが、後には、その事情は転移して、ただ黄金そのもののために黄金を求めて、他を顧みざる、今日の資本家の心理状態の如きを、現出するにいたった。

また、も少し上品な例をとれば、最初は食用に供するための魚が欲しさに、魚を釣ったのであった。

しかるに、その欲情は、後に進化して、魚は釣れても釣れなくても、ただ林間の流れに繊綸を垂れることそれ自らに興味を持つ釣魚の楽しみ――昔、アイザック・ウォルトンが、『釣魚大全』に書いたような、極めて詩人的な、のどかな心理状態にまで純化せられ、浄化せられるに至った。

また、世には愛書家と云うものが多い。書物は読んでも読まなくても、ただ多く蒐集して、その古版を

喜び、装丁印刷などの外観古色掬すべきを、楽んでいる人達だ。

最初は、書籍の内容に興味を持って、おのれの知識欲や、読書欲を満足せしめたが、後には、書籍の内容とは没交渉な所へ、その欲情は移ってしまっている。

総て、こう云う浄化転移の心理は、動物におけるよりも、進化した人間に於て、最も著しく現われているので、この域に進めば、最初に求めた目的そのものは、すでに無意識心理の底に、影を潜めてしまっている。学者は、これに名を付けて、昇華と云うであろうが、名前なんぞは何だってよい。」

と云う。

資本家の心理状態や、林間の釣魚家の心理状態が、物の欲しさに黄金を求める者の心理や、魚を得ようがために糸を垂るる者に比べて、なぜ浄化と云わねばならないのだろう。

そこに何の標準があり、尺度があって、浄化、高化と云うか。それの無い転移は、単なる変化に過ぎない。

従って、資本家の心理が、さらに如何なる進化を指向するか、林間の釣魚家の心理が、今後どうなって行くかが示唆されない。

資本家の心理は、再び元の黄金欲に帰るであろうし、釣魚家の心理も、また魚を得ようとする昔の欲情に変わるであろうと云う他には、考えようがない。

だから、恋愛の場合も、性欲が根源で、それの浄化し、有閑化したのが恋愛であるとすれば、そんな恋愛は、もとの性欲に還るのが結末である。そして、事実この種の恋愛論に於ては、常に至上へ、次の瞬間には至下へと、反動し、繰返えされているのが常である事は、屡記した通りである。

学者は、主として外部から内部に向かって、分析的に研究を進めるから、過去を重んじ、一般動物に恋

愛らしいものがなく、性欲だけがあると見ると、それが我々の根本のものであるとする。

だから、せっかく発見した恋愛をも、恋愛そのものの性質と形でみずに、性欲にこじつけて考えるので、恋愛は性欲（生殖欲）そのものであるとか、またはそれの昇華であると云う説だけが、勝利を得たのである。

一八

恋愛を結局性欲（生殖欲）とする近代の思想は、なんらかの意味で、女性ないし生殖本能への軽蔑や、恐怖や、増悪を伴って来る。前記のショーペンハウアーがそうであり、これから見るであろう諸作品も同じ範囲を出ない。

それはなぜであろうか。ヴァイニンガーが見たように、女性は、常に強烈に性欲を持って燃焼しており、そのことで、しばしば男性を圧倒するのである。そこには、なんら高い精神がなく、ただ性欲、そして生殖欲の勝利のみが目的である。

ハウプトマンの『ガブリエル・シルリンクの出奔』には妻と、妻の競争者である「世界を股にかけるロシアの女」、こう云う二人の女に挟まれている、画家ガブリエル・シルリンクの悩みが書いてある。

妻は、是まで、たびたび、小さな世帯の苦労に、一切を犠牲にして、身も心も使い減らしたその酬いを夫から得ようと要求する。つまり、しゅうねく半死の夫にまつわり付いて、その精気を絞り取ろうとする中年の女である。

その競争者のハンナ・エリアスは、「彼女の顔は、蝋のように青白く透き通っている。顔立ちは、きわだって美しく、整って、聡明らしく見える。眼は大きく、黒目がちの、落ち着かないまなざしである。しょっちゅう、なにか問題を考えているような、瞑想的な様子を見せてている。」

彼女は、故国に夫を捨てて、他郷に流寓し、毎夜カフェーに出入して、外国の芸術家と、交際を結んでいる。

彼女はシルリンクの芸術家として、人としての生存に、たいした信頼を置いてはいないが、彼の肉体に深く爪をたてて、これを弄んで楽しもうとする。彼女は、自分を無くして、シルリンクのために尽すことを自慢にしているが、おかげで、シルリンクの生命は日に増しすり減らされてゆく。

シルリンクは、女達の執拗な手を逃れ、心静かに、自然を楽しむために、友達の彫刻家モイレルが製作のために隠れ住んでいる、東海の一孤島フイッシュマイテルスオイエに逃げて行く。

友の彫刻家は、しばしば大作をして、金も豊かに持っている。そして、妹と呼んで小さな愛人の、ルチー・ハイルと、この島に隠れて、御伽噺（おとぎばなし）の若い王子と王女のような、生活をしている。

この楽しい、牧歌的な空気には、哀れな夢想家の画家から、嫌な現実の悪夢を、払い除けるのに充分な希望があった。

若い愛人同士は、画家を勧めて、一緒に南のギリシアの旅にと、誘うのであった。ともかくも、これで、画家の新しい自由な生活が、前途に、美しく、拓けかかったように思われた。

ところが、三人がまだ、古芸術の都の秋を空想に描きながら、ギリシアの旅を計画しているうちに、突如、悪魔の影のように、ハンナ・エリアスが、十七歳のマヤキンをつれて現れる。

色々な不幸が、またシルリンクを取り巻く。彼は結局、自分にとって、一番危険な敵は、気の弱い自分自身である。もう一切に、けりをつけてしまわねばならないと考えて、ハンナに、ロシアにいる亭主の所へ帰れと云う。ハンナは、そんなくらいなら、子供をつれて、シベリアへでも行ったがましだと云う。

シルリンクは病気になった。彼の霊魂は乱れている。そして、今はただ、友達のラスムッセンのことの

み思っている。そばには、ハンナがいて、看病している。

そこへ、待ちこがれたラスムッセンが、島に着いた。しかし、ある思い違いから、シルリンクの妻の、エフェリーネをも、一緒につれてきた。新しい葛藤が始まった。

妻は夫を罵り、悪鬼のような形相で、ハンナに飛びかかる。往来には、弥次馬がたかって来る。シルリンクは、ラスムッセンに、「僕は嘔きそうだ。君、毒薬をくれ。猛烈な毒薬を。」と云う。

ガブリエル・シルリンクは、深い昏睡に陥った。やがて、それから覚めた時、彼は一人病室から抜け出して、夢遊病者のように、ふらふらと海岸へ出た。

そして、途中であった人に、色々の妄想を語った。その人が、「あなたのお迎えの人がきた。」と注意すると、彼は訴えるように、

「誰かが、私のことを訊いたら、画家のシルリンクは、フイッシュマイテルスオイエの島で、彼の生涯に初めての立派な思想を得たと、云ってください。」

と云った。

そして、夕闇の中に、両手を高く挙げた。やがて、彼は屍体となって発見された。

この作品の中で、主人公の画家が、「嘔きそうだ。毒薬をくれ。」と叫ぶ所は、いかにも真にせまるものがある。ヴァイニンガーも、ショーペンハウアーも、性欲のことを、嘔吐を催すと云う言葉で、形容している。性欲の象徴のような二人の女の、盲目的執念を描いた作品である。

ショーの『人と超人』も、女性の生物学的勝利を描いている。

女主人公のアンは、父親に死なれて、二人の後見人に預けられる。一人は、沈着なリョーバック・ラムスデンであり、一人は革命家型のジョン・タナーである。

ラムスデンは、眠ったような保守家で、そのくせ自分では、しょっちゅう、大いに進歩していると思っている。タナーは、感情の烈しい革命主義者で、一切の因習を激しく攻撃してやまない。

アンの愛を求めようとする青年オクタビアスに向かって、タナーは、彼の女性論及び結婚論をまくしかける。

それによれば、運命に定められた妻は、定められた夫を、猛烈に容赦なく追い廻すべきである。男が女を追い廻すのではない。女が男を追い廻して、すみやかに結婚に向かって、急ぐべきものだと云う。

ところが、アンの意中の人は、却(かえ)ってタナーその人であった。その事実が分かると、すましかえっていたタナーは、急にあわてて、自動車にのって、大陸へ、地中海岸へ、「どこの港でも、回々教(ふいふい)(イスラム教)の国へ——男子が女子から防護されている回々教(ふいふい)の国へ行く船の出る港へ。」と、道を急がせる。

イスパニアのシエラへ自動車が来ると、お茶番の山賊が、待ち伏せていて、虜(とりこ)にする。タナーは、俘囚になっても哲学し、夜になると、外の連中と、ドン・ファンの空想的な夢幻劇をして遊んでいる。

この夢幻劇が、おしまいになった頃、追ってきたアンが、友達と一緒に、現れる。イスパニアの兵隊が来て、俘囚を助け出す。

青年ナクタビアスの妹が、男の事で、悪い評判を立てられる。友人は、皆女を非難する。タナーは、一人例の逆説で、生の力と勇気、これが女の美質だ、正式の結婚をしないなんと云う事は、あなたの価値を、ちっとも下けないと云う。

すると娘は、却(かえ)って道徳的憤慨を示して、タナーに向かって来る。彼女は実際に、何も因習に逆らうような事はしてはいないのである。彼女は、正しい結婚をしているが、ただ内密の理由で、隠していただけであったから。

最後の幕が来て、とうとうタナーは、アンに体現せられた生の力に屈服してしまう。彼が、アンの父の遺言で、後見人に選ばれたと云うのも、元は、アンの指し金であったと云うことが分かり、それでは、遺言は、父さんのではなくて、あなたがこしらえた遺言だ、「罠は初めから仕掛けてあったのだ。」と叫ぶ。

「初めからですとも、子供の時からですわ――私たち二人のために――。それは生の力で作られているのですわ。」

と、アンは答える。

二人の婚約の成立を披露したあとで、タナーは、

「今日の午後、私どもがした事は、幸福を放棄し、自由を放棄し、平和を放棄し、なかんずく未知の未来の、ロマンチックな仮想を放棄して、家族や台所の世話をその代りに引きうけたのである。」

と云う宣言をする。

女性が、生殖意志を代表して、男性を征服することを描いたもので、生殖一元論の持つ、盲目意志的な、発展のない、泥沼のような暗さが諷刺されてある。

また、ストリンドベルイの「債鬼』には、感情にも理知にも低級な女性が、動物的本能と云う武器で、男性を征服し、男性の肉体を荒掠し、霊魂に寄生して、吸血鬼のように、その霊能を搾りとることが描かれてある。

ストリンドベルイは、女性憎悪者であり、恐怖者であった。女は、精神的にも、道徳的にも、生物学的にも劣等なもので、男女の同権などは、男が女の地平線まで、堕落した時、始めて云われると、彼は云っている。

「父」と云う戯曲では、竈と子供の保護者である妻の、恐怖すべき心理を取り扱っている。

主人公の騎兵大尉は、父として、保育者として、一人前に成りかけている娘のベルタの教育を、その将来の幸福のために、考えようとしている。

妻のラウラは、年のゆかない娘の、当座のわがままを通してやりたい母親気質から、また、娘の愛を独占したいと云う、狭い女心から、大尉の意見に反対する。

正当な手段では、夫に勝てない妻は、陰険な、悪辣な手段を取る。父は、その子が真に自分の子である限り、父としての権利を行ない得るだろう。けれども、父が真に父であるためには、妻に対する絶対的の信用を先決とする。

夫と妻の激しい論争のすえ、妻が自暴自棄に持ち出した武器は、夫に、娘を不貞の子と思わせる事であった。疑惑と恐怖のあまり、極度に神経過敏になった大尉は、内と外の闘いに、苦しみもがいた果てに、火のついたランプを妻に投げつけた。

妻は、この事で、容易に他人の目の前に、夫を狂人と思わせることが出来た。大尉は医師から燥狂者と認められる。子供の時から馴染(なじ)んだ大尉の乳母は、大尉が、娘のベルタに、ピストルを向けようとするのをみて、子供をすかすようにすかして狂人用の狭窄衣を着せてしまう。

大尉は、総(すべ)ての女――自分を生むのを嫌って胎内から自分を虐待した母、子供の自分自分を家来のように従えようとした姉、愛の抱擁を与えたかわりに十年の病気をくれた初恋の女、父よりも母を選んだ娘、そうして結婚の初めからずっと生涯の敵であった妻を、呪い呪い、激しい脳卒中を起こして昏倒する。

その時、妻のラウラは、勝利の叫びをあげながら、娘を腕に抱きしめる。

これは、戦慄(せんりつ)すべき戯曲である。なに故(ゆえ)に、かくまで女性は憎悪され、恐怖されねばならないか。

単なる「種族」の一群である女性たち、それは、永遠の無明を象徴する以外の何者でもないのである。

フランスの自然主義文学の始祖と云われるフローベールに、『マダム・ボヴァリー』と云う作品がある。これには次のようなことが描かれている。

娘時代を、非常に空想的な、ロマンチックな情緒にひたり育ったエンマは、ふとした機会から、田舎医者のシャルル・ボヴァリーに嫁いだ。

しかし、結婚と云うものは、彼女に期待したほどの満足と、歓びを与えなかった。

ことに夫は、文学の趣味も、高尚な思想も理解しない、ただ正直に、家業をはげむ善良な男であったので、彼女にとっては、少しの慰めにもならなかった。

それでもエンマは、夫に対して、美しい愛を注こうと思ったのであるが、どう云うものか、それが夫に充分反響しない。

夫は一定の時間だけ、愛を示すけれども、仕事に追われている時には、少しもそれを心に湛えようとしなかった。そこにも彼女の物足りなさがあった。

ある時、彼女は、ヴォビエサール荘のダンデルヴィリエ侯爵に招待された。

彼女は、夫と共に出かけたが、彼女は、そこに住む人達の、はなやかな生活ぶりをみて、なんとなく羨ましくなってきた。

どちらを見ても、彼女のロマンチックな空想と、虚栄を、そそのかすに充分であった。この夜、彼女は、親切なもてなしや、舞踊会の催しで、すっかり歓楽の境に、心を奪われえてしまった。

この時から、彼女は、いよいよ開業医の妻としての、機械的な単調な生活に、耐えられなくなって、いつも、この招待された夜のことを、思い出さずにはいられなくなった。

それがために、エンマは、病気のようになったので、夫のシャルルは心配しだし、土地を代えて見たら

良くなるだろうと、ヨンヴィルに転居して、そこで開業した。
初めは、物珍しさに、彼女の気分は紛れていたが、ここでも、やはり、彼女は新しい光明と、幸福と、ロマンチックな空気を、見出すことが出来なかった。
フローベールは、この時、彼女を取り巻く、色々な村の人物を、点出している。
たとえば、学者ぶったり、村の世話役顔をしたりする薬剤師、旧式な信仰で固まっている司祭、超然として俗衆を遠ざかって、理想的な思想を持っているレオンと云うある書記など。
単調な生活に厭きたエンマは、初めこのレオンと云う青年に、思いを寄せたのであるが、気の弱いエンマは、それを彼に打ち明ける事が出来なくて過ごしていた。
やがて、レオンは、他へ転勤することになって、この恋は、それなりになってしまった。好人物の夫に飽き足らないで、ロマンチックな愛に渇していたエンマには、レオンの去ったことが、どのくらい失望を感じさせたかしれない。
彼女は、夫の心から、本当の、そして深い愛を引き出すために、夫に強いて反抗し、または夫をすげなくもてなそうと思うほどに、愛に渇していた。
けれども、彼女の夫は、少しもそうした突発的な変態の事情からは愛を示さなかった。ただ彼女の冷遇に甘んじて、そうした態度に触るまいとすると云うほどの好人物であった。
そのうちに、女たらしのブーランジェと云う男に誘惑されて、遂にこの男と情を通じた。この男は、女の弱点や、女の求むるものを見抜くのに、巧みな男であったから、彼女もまんまとそれに陥ったのである。
彼女は、しばらくは、この男に対する恋によって、これまで期待した美しい愛を得ようとしていた。無理算段して、金を作り、時間を作った。遂には、この男と出てしまおうと相談を決めたが、その間際、彼

女は捨てられてしまった。

彼女は、鬱々と、毎日楽しまなかった。ある時、夫と共に、ルアンに芝居を見に出かけ。ところがそこで偶然にも、彼女がかつて恋を感じたレオンと出会った。彼女は夫を先に帰して、もう一日残って、レオンと芝居を見た。そして、遂にレオンと恋に落ちた。

そして、ルアンへ音楽を稽古に行くと夫に偽っては、一週間に二度ずつ、ルアンの町に出かけ、そこでレオンと楽しい逢瀬を重ねた。しかし、レオンにも遂に捨てられてしまった。

そのうちに、無理を重ねてきた夫へ無断の借金が積もり積もって持って、遂に破産の憂き目を見なればならなくなった。彼女はそれを救うために、狂気のようになって奔走したが、それは皆無駄であった。エンマは今はこれまでと、薬剤師の薬室から、毒薬をひそかに盗んで服し、とうとう悲惨な死を遂げたのである。

これは女の敗北に終わっているが、前記の諸作品で、表面勝利者であった女が、ここでは、そのままの性格で敗北しているのが注目される。

すなわち、エンマの恋愛も、先のハンナやアンのそれと結局同型のものであって、ロマンチックな表皮を剥けば、性欲――性愛の一反映を出ないものであり、その性愛の烈しい衝動のまにまに男性を追求することも、前の諸作品と同じであるが、ここではそれが、失敗したまでである。

イプセンの『幽霊』になると、結婚制度の重圧や、虚偽や、因習に圧倒せられ、自我に忠実でない、しかし、その事で一種のまやかしの自我に生きる女性の敗北が、如実に描かれている。

ヘレーネ・アルヴィングは、美しい器量ではあったが、貧乏な後家さんの娘として、二人の未婚の叔母たちの世話になって育った。

この娘が年頃になると、二人の若い男が近づいてきた。一人は霊に生きる牧師であり、一人は肉に生きる士官であった。彼女の心は牧師に傾いていたのであるが、母親と二人の叔母に説き薦められ、自分の本心に背いて、貧乏な牧師を捨て、裕福な士官のもとに嫁いだ。

結婚してまもなく、彼女は夫が世評とは違って、身持の悪い男だと云うことを知った。彼女は耐えられなくなって、その霊の友と信じている牧師のもとへ駈けこんで、一身の振り方を頼んだ。

牧師は、この誘惑に耐え、おもむろに女に神の道を説いて夫の家へ帰らせた。女は神を信じ、人間のために善事をすることを誓って帰った。

帰るとまもなく、彼女は男の子を生んで、オスワルドと云う名前をつけた。再び家に帰った彼女は、神の前に、義務と奉仕に、一切を忘れる人になった。それがため、虚偽の罠を作るようになった。

彼女はまず、実の息子の前に、父親を立派な人物に取りつくろう必要を感じた。勝気な彼女は、寝食を忘れて、家事に精を出した。

乱れていた家事が整理され、財産は年々に殖える。公共事業にも、いろいろと努力した。そのうち、彼女にとって、唯一の幸福である息子のオスワルドが、物心づいて、周囲のことが分かるようになると、思いきって、外国へ出してしまった。折々の手紙には、いつも彼の父が、いかに尊敬すべき人物であるかを、繰返し繰返し書き送った。

こんなふうにして、幾年か過ぎた。アルヴィングの富と名誉は、年々に高まった。中尉のアルヴィングは大尉になり、大尉は侍従になった。社会上の地位はいかほど上がっても、アルヴィングの人間としての品位は、少しも上がらなかった。

ある日、彼は、召使(めしつかい)の女と戯(たわむ)れている所を、妻に見つけられた。不義の結果は、まもなく外に現れた。

女は涙金をもらって解雇され、妊娠のまま、身状の良くない指物師エングストランドの妻になった。

まもなく、大尉の胤が、エングストランドの娘レジーネとして生まれた。レジーネの母は罪の悔恨に、体も心も弱りきっていた。それが、ある日、乱暴な夫の指物師に打たれて死んだ。心の広いアルヴィング夫人は、レジーネを引き取って、小間使いとして使うことにした。生みの息子が外国で一人勝手に成長している時に、夫の生ませた子供を、実の娘のように育てていた。

かれこれ二十年の結婚生活の後に、侍従アルヴィングが死んだ。世間は、名望家をなくしたことを、悲しんだ。夫人の犠牲的精神に基づく虚偽は、立派に成功した。けれどまだ、もう一つ最後の嘘が残っていた。それは侍従アルヴィングの固有の財産――アルヴィング夫人の母親と二人の叔母たちを誘惑した――を、挙げて貧児救養所の創立に当て、慈善事業家としての、アルヴィングの名誉を、永く記念する事であった。

しかし、これは表向きで、夫人の内心に立ち入れば、一つは息子の心に、あくまで父親に対する尊敬を保留させるため、その癖一方には、愛する息子から、汚らわしい父親の遺産を取り上げて、そのかわり、自分の永年の苦しい努力と奮闘によって剰し得た、清浄な富を与えたいと云う、矛盾した考えを調和させたい欲望があった。

こういう事情で、「侍従アルヴィング氏救養所」は、出来上がった。明日はその落成の祝賀会をやろうと云う前日、パリから、息子のオスワルドが帰って来る。

あの事件以来、永年この家から遠ざかっていた牧師マンデルスも、この救養所設立に付いては、万端の世話を託された関係から、祝賀会の司会者として、町からやって来る。

オスワルドとは、異母の妹であるレジーネは、あいかわらず女中でもなし、娘でもない中途半端な身分

で、アルヴィング夫人の手元にいる。

こうして、「幽霊」が、残りなく正体を暴かれる準備が出来る。

事件は、急転直下する。アルヴィング夫人が、牧師のマンデルスに、二十年来の秘密の打ち明け話をしている次の部屋では、オスワルドが、亡父そっくりな様子で、レジーネに、戯(たわむ)れかかっている。その声が聞こえると夫人は、

「幽霊が。昔、あの温室から出てきた二人の幽霊。」

と叫ぶ。

オスワルドは、女中のレジーネと結婚させてくれと、母に迫る。アルヴィング夫人はやむをえず、二人が異腹の兄妹であることを話そうとする。そこへ、救養所が火事になる。

夫人は絶望して、オスワルドに隠していたことを話す。父の遺伝の梅毒から、脳髄の軟化症に罹(かか)っていた息子のオスワルドは、その話を聞いているうちに容態がだんだん変になってきて、遂(つい)に喪心して、痴呆状態に陥(おちい)る。そして、

「太陽が欲しい。日光が欲しい。暗い。暗い。」

と叫ぶ。

この作品で伺(うかが)われるものは、知性を欠いた母性的本能の姿である。先のストリンドベルイの『父』では、母が父と露骨に闘い、遂(つい)に勝利者となって、自分の腕に娘を抱きしめるが、この作品ではちょうど逆で、母は父を虚偽の讃辞で包み、息子を獲得しようとしたが失敗し、遂(つい)に息子に父の幽霊を見出(みいだ)す事で終わっている。共に結局、あさはかな、盲目的な、そして生物学的な性生活の描写となっている。

プラトニック・ラヴを否定して、肉欲一元の思想に歩み至った近代――この近代は、無限に続く盲目的

な生殖意志や、生物学的本筋や、浅薄な感傷主義や、虚偽や、執念や、増悪や、頽廃の現実を発見して、苦悶し、かつ懊悩している。

ところで、それらの深い悩みの反動として往時のプラトニック・ラヴにも似た宗教的恋愛が懐かしまれ、知的な男性の中には、再びそれに逃れようとするものも見出されて来ると思う。

実存主義の始祖とされるキルケゴールの不可思議な恋愛なども、その一種ではなかろうか。

キルケゴールは、一八一三―一八五五年代のデンマークの思想家で、彼は二十五歳の時、大蔵省官吏オルセンの娘で当時十六歳であったレギーネを見初めた。

数年後、彼はようやく、シュレーゲルと云う友人の紹介で、オルセン家の訪客となることが出来た。レギーネは芸術や宗教に関する彼の高い才能に惹かれたが、彼の態度が内気にすぎたため、次第に退屈に感じ出した。そして、そのあげく、彼の友人のシュレーゲルの求愛を受け入れてしまったりするが、このことを女の口から打ち明けられても、キルケゴールのレギーネを熱愛する態度は変らなかった。

いよいよ結婚せねばならないと、彼は考えた。遂にその考えを打ち明けた。レギーネは石のように堅くなってその求婚を受け、やがて承諾した。

このことがあってから、レギーネは一筋に乙女の愛を燃やし、二人はこの上もなく幸福であった。それにもかかわらず、二人は遂に結婚しなかった。

それは、男の心に、不可解な異変があったからで、彼は彼の日記に、こう書いている。

「私は、宗教的なものさえ持っていれば、実在の彼女など必要でない。」

彼は、恋愛におけるこのような知的、宗教的境地を、愛人であり、婚約者であるレギーネにも分かってもらい、二人で、この彼の信ずる恋愛教の使徒たらんと願ったのであるが、彼の努力は報いられなかった。

レギーネの関心はただ一時も早く、彼と一緒になりたいというにあった。

「私は、嵐直前の森のような、不安の中にいる」

と、彼は書いている。

「レギーネには遂に判ってもらえない。」

とも。

キルケゴールは、哲学者である。彼は恋に於て、永遠を見つめている。恋に於て宗教を樹立しているのである。彼は考えた。もし彼女を、宗教にまで高める力が、自分になかったとしたら、どうなるか。勿論、そうと決まれば、彼のためにも、彼女のためにも、婚約を破棄しなければならないと。

レギーネは、狂気のようになった。彼と彼女のためなら、どんな事でもしようと誓った。「もし私が、結婚を神意に背くと、信じていなかったら、レギーネは勝ったに違いない。」とキルケゴールは云っている。

ここで、我々は、またまた前出の諸作品で見たシルリンク、タナー、レオン型の青年と性本能型の女性との喰い違いを見るのである。それはまた男性の寂蓼と女性の無知を意味し、象徴するものでもある。

彼はとうとうレギーネと別れた。「彼女が私の眼前で死にそうになっても」、この別意は翻すまいと決心して、その通りに事を運んだのである。

レギーネは、後にシュレーゲルと結婚して、遠い植民地へ去った。そしてキルケゴールは、当の愛人たるレギーネにも、その他の第三者にも奇異とされた宗教的、哲学的恋愛を固守したままで、四十二年の生命を終わった。

この難解な恋愛は、そもそもなにを語るのであろうか。

彼は、前にも云ったように、フランスのジャン・ポール・サルトルによって主唱され、西欧インテリゲ

ンチャに若干の強い影響を与えていると云われる実存主義の遠祖とされている。

すなわち彼は、「主体性」及び「アイロニー」の哲学者であった。従来の学問の多くは、客体性のものであって、学者自身の「我」との関連を閑却することを持って、むしろ本格的としている。「我」の問題は私事とされ、学問の体系に入らない。彼キルケゴールは、学問のこのような冷淡に、もしくは事大主義に、極度の怒りを覚える。かくて彼は、彼自身の「我」を世界の中心に置き、「我」にとって何の意味があるかに於てのみ、思索するのである。

次に、彼は「アイロニー」すなわち反語の哲学者であった。世のなかの事件に参加せず、いつも傍観者としての知性に立っている。叡知は、研ぎ澄まされており、事件の正不正、進化の方向等に、関心と洞察を持つが、実践に於てそれを動かし、または変えることについては、無力であり、自信も欠けているから、その時高い知性は、反語的態度に出るのである。

世の不正や不合理等に対して、しばしば恰も同ずるような言葉を吐く。その実、本心はその反対である。魂は常に孤高で、一切のもの——自分自身の無力をすらも、冷ややかに見下ろしている。しかし、この魂は遊戯をしているのではない。だから、常に憂愁の霧に包まれている。

キルケゴールの難解な哲学的恋愛は、以上のような主体的、反語的な立場の上で、取り扱われたものであった。

外観からすれば、彼は、徒に問題を思弁によって紛糾させ、自他のそれによる疲労や、情炎や、または宗教的法悦を満喫して、或は満喫せんことを求めて、自慰的行為に終始したものであるとも云えよう。

しかし、彼の、この一種のプラトニック・ラヴは、まさしくヨーロッパ的伝統の近代化であると思われる。すなわち、ヴァイニンガーを生み、ショーペンハウアーを生み、ニーチェを生んだその同じ基礎に、

彼が支えられているという事である。

「性的結合は、人類の観念に於(おい)て存在する余地を持たない。それは、禁欲主義が義務であるからでなく、そこでは女は客体、すなわち目的となり、男は彼の欲するままに彼女を取り扱い、一つの内的心的存在を持つ生きた人間としてでなく、単に一つの物として彼女を見るからである。従って、男は性交が終わると同時に女を軽蔑する。

そして女は、数分前まで、尊敬されていると考えた自分が、今や明らかに軽蔑されていることを知るのである。男に於(おい)て、尊敬すべき唯一のものは、人類の観念である。性交から生ずる女への――そして彼自身への――このような侮辱は、性交が人類の観念に背馳することの、りっぱな証拠である。」

と、ヴァイニンガーは云っている。彼のこのような言葉は、深く味わうべき価値を持っていると云いたい。

彼はまた、「男は恋愛的になるに従って、益々彼の性欲は、悩むことが少なくなる。」と云う。ところが、彼の見解に従うと、女は性欲のみしか理解しないのである。人は、女の性欲の男に比べて熾烈(しれつ)でないことを云うが、それにも拘(かか)わらず、女は男の性欲のみを期待し、それによってのみ満悦すると云うのである。

ここに、ヨーロッパ的、知的男性の女性嫌悪があり、プラトニック・ラヴへの切望がある。

さらに、ヴァイニンガーは、「男は実際に奴隷としての女を欲しない。あまりに友を切望するのみである。」と結んでいるが、ここには、近代の男性の、前代のそれよりも一倍加重された寂寥(せきりょう)が見られるのではなかろうか。

前代の男性は、一方では、同じ寂寥(せきりょう)から女性を幻影化（偶像化）したが、他のほうでは、必要から、奴隷としての女を強く要求したのである。要求のある所には満足があり、幻影化の可能な所には自慰があり得る。ところが、近代の男性は、その悉(ことごと)くを喪失し、しかも眼前の女性は、あまりにもなお旧態依然であ

り、友たるを値しないのである。そして、友たるを値しないような女性との結婚は、幻滅的な、無意味な、恥多いものであり、男性の知的生活にとって、一の脅威でさえある。キルケゴールが、結婚を「神意に背くもの」としたのは、おそらくこの意味からであろう。むしろそれよりは、性的もしくは家事的奴隷としての女性との結婚を安易とするが、それはまた、ヴァイニンガーが云うように、「女を、そして自分自身を侮辱する。」事である。それは、人間への、生命への、すなわち人格への尊敬に目覚めた近代男性の能く為しえない所であろう。

しかし、このような心的現象――ヴァイニンガー的、キルケゴール的心的現象は、また他面から観察すれば、近代の個人主義的経済事情が、妻子に対する男性の扶養能力を不安定にし、または殆ど根こそぎ奪い取ったことからも来ていると思われる。しかも一方女性の経済的独立は未熟であり、従って女性の従来からの「依存意識」には変化がなく、恋愛は、彼女にとって直ちに結婚であり、それは生活権の獲得なのである。

彼女は、なんらの反省も、自覚もなく、当然かのように、男性に身を任せる。そしてそれは、彼女と、彼女が生むであろう子供との生活の保障を、男性に転嫁することと同意義なのである。

恋愛と性行為と生活――これは彼女にあって、思惟の不可分形態を意味する。

そして、キルケゴールの知的悲劇が、ここから生まれる。この意味で、キルケゴール的、主体的、反語的恋愛は、現在にあっても――否、現在益々――あらゆる国々の（過渡期的事情にあるあらゆる国々の）知的男性の上に、現象化しつつあると、私は見るものである。このような知的悲劇は、恋愛と結婚が、充分社会的に保障される時代が来るまでは、免れえない事であろう。

第八章　近代娼婦主義

一九

前章に於ては、思想的面から、肉欲主義を眺め、また、それの矛盾、不安等の諸相にも、若干象徴的に触れるところがあったが、本章で、もう一度それを、生活面――すなわち近代娼婦主義に於て見直してみよう。

近代娼婦主義は、第一には男性の要求として、第二には女性の反逆として、第三には生きるため、食うために。――大体、この三つの要因を持つ。

娼婦主義の発生は、厳密には私有財産、家族、国家等と同時的のもので、古典ギリシアでは、嫡子を生ませ家の番をさせるために家婦があり、目及び肉の享楽のために娼婦があるとされた。このように、家婦と娼婦は截然と区別され、一方が他の方の真似をしたり、また嫉妬したりする事は許されなかった。もし、そんなことがあれば――それは大抵妻の側にあったが――迫放されても、奴隷に売られても、仕方がなかったのである。

しかし、娼婦と妻の二者は、性を売って生活していること、すなわち性を生活条件としている事では、なんの違いもなく、従って、本質的には、いずれもが娼婦以外でも、以上でもなかったと云える。

そして、いわゆる美または自由の点では、むしろ家婦は娼婦に劣っていたので、家婦の存在価値が、漸減する近代にあっては、勢い後者的なものの魅力が、表面化して来るのである。

ここに、「娼婦を買う」のではなく、「娼婦を恋う」所からの近代の三角恋愛が発生する。文学では、娼

婦型の肉の女と、家婦型の霊の女とが、よく競争者として描かれている。

ハウプトマンの『沈鐘』を見よう。

シュレーゼンの山間に住む鋳物師ハインリヒは、山中に建てられた寺院のために、巨鐘を鋳て、これを、車に載せて山に登る。

山の中には、キリスト教の鐘の声を忌む怪物の多い中で、山羊の脚をした森の精ワルドシュラートと云うのが途中に持ちうけて、車に手を掛けて、ひっくり返したので、鐘は転(ころ)がり落ちて、湖に入った。

鋳物師は、畢生(ひっせい)の力を込めて作った鐘の落ちたのをみて、夢心地で、鐘と共に、崖から落ちたが、湖には入らないで、岩角にすがって登り、樅の林に囲まれた山中の草地で昏倒する。

そこは、白金の背と云う所で、一軒の草舎に、「森の媼(おうな)」と呼ばれる妖婆が住んでいて、苔の中から拾いあげて牝狗の乳で育てたと云う美しい怪物の少女、ラウテンデラインと共に棲んでいる。

鋳物師の倒れたを、少女が見て、かわいそうに思って、苔と、枯れ草を運んで、鋳物師を寝させ、乳を飲ませる。

鋳物師の村に住むカトリックの僧、学校教師、床屋の三人、森の精が声色(こわいろ)を使って助けを呼ぶのに誘われて、白金の背に行き、森の媼(おうな)と、言葉闘いをしたのち、鋳物師を、担架(たんか)に乗せてつれて帰る。

怪物の少女は、鋳物師を見てから、始めて恋を知り、始めて涙を流し、年来自分を慕う古井戸の中の水の精ニッケルマンの、切に止めるのを聞かず、人里に走り下る。水の精は、クララックス、ブレケケケックスと、蛙のような声で嘆く。

鋳物師の妻マクダには、二人の男の子がある。兄は九歳、弟は五歳、鋳物師が山に入った日、妻は夜を徹して待ったが、夫は帰らない。翌朝も、なお、夫の成功を祝う贈り物に作った天の鍵の花束を、手に持

ち、子等にも持たせて待っている。そこへ、隣の女房がきて、鐘の始末に付いて、妙な風説がある。首尾よく鐘が鐘楼に納まれば、白い旗を立てる約束が、今朝もまだ、その旗が見えないと云う。

妻が心配して、子供を隣へ預けて出ると、僧、教師、床屋の三人が、担架を担いで、大勢の村人と一緒に来る。

鋳物師は、やっと人心地がついた。が、長い事はない。もうすぐあの世へ旅立つなど云うので、

妻　あれ、あなた、そんなことを、おっしゃるものではありませんわ。そんなことおっしゃると、私心細くなりますよ。

鋳物師　（熱のために昂奮して）今から心細くなるようで、どうするものか。お前は生きなきゃならん。私が亡くなって後も、生きなきゃならないのだ。

妻　私には出来ませんわ。……あなたと云うものが無くなって、生きようとは思いません。

鋳物師　子供のような愚痴を云うな。この上、私を、責めてくれるな。そんな愚痴は通らない。お前はお母さんじゃないか。そう思ってしっかりするのだぞ。

妻　まあ。今だけせめて、怒らないでくださいね。叱らないでくださいね。

鋳物師　（苦悶の様子）本当のことを云って聞かせれば、すぐ怒るの叱るのと云う。子供の寝台の上にこそ、お前の領分があるのだ。それでなかったら、お前は不都合な母親だ。

妻　（夫の上に身を投げかけて）ああ、私どうしましょう。私は子供よりも、私自身よりも、なによりも、かよりも、あなたを愛しているんですわ。

鋳物師　そんなことを云われるほど、早くから夫なり親なりに別れるお前たちは、可哀相だ。まして、お前

たちの口から、みすみすパンを取り上げて行く私は、その三倍も、可哀相だ。しかし、そのパンと乳も、今は私の舌には、毒としか思われぬ。まあ、それもよい。さらばだ。それはそれとしておくばかりだ。離れられない運命の所へ帰って行こう。これまでも、多くの人のために、あの暗い死の影が、嬉しい光明となった例もある。私もその一人になりたい。（優しく）手をお出し。これまでいろいろお前には、言葉なり仕打ちなり、すまないことをしてきたね。お前の優しい心を、幾度となく、踏みにじったこともあった。許してくださいよ、マクダ。ことさらそう思わないことを、ついしずにはいれなかったのだ。無理に、なにかに、強いられるように、お前にも辛い思いをさせれば、それをしながら、自分もやはり辛かった。許してください。

妻　許すって、なにを、あなた。私を可愛いと思ってくださるなら、そんなことを、云わないで頂戴。私にとって、あなたが何だと云う事は、よく知っていらっしゃるくせに。

鋳物師　（苦悶の心持）いいや知らない。私は知らない。

妻　あなたは私を引き立てて、人間にして下さった方でした。なんにも、物を知らない、苦労性で、陰気な、まるで灰色の雨曇りの下を、歩いているような私を誘って、嬉しい、楽しい世の中へ、引き出してくだすったのは、あなたでした。頑丈な手で、この私の首筋を掴んで、いきなり暗闇の中から、光明の世界へ、引き向けてくだすったのは、あなたでした。それがなんで、私があなたに、許してあげることが出来るでしょう。この私の一生を、残らず捧げても、ご恩返しは出来ないと思っているくらいですのに。

鋳物師　不思議なことを、考えるね。人間の心の綾は、そうも、こんぐらかったものかなあ。

妻　（夫の髪をなでながら、優しく）足りないながら、あれやこれやと、気を使って、内においでの時

も、お仕事とに精を出しておいでの時も、時の経つのを忘れるように、嫌な事がお目に留まらぬようにと、そればっかりが心配で……あなた、せめてこの心持だけは、汲んでくださいな。私は、ただもう心から、なんと云って良いか、あなたには、何もかも上げてしまいたいと思うばかりで、その他には、なんにもご恩返しをすることがないのですから。

鋳物師　（不安げに）私は死ぬ。それで良いのさ。神様のありがたい思し召しだ。なぜってマクダ。この上私が生きていれば……もっと私のそばお寄り。とにかく私が死ぬと云う事は、私たち二人のために、良い事なのだよ。お前も花が咲いた。私も花が咲いた。それをお前は私の力で、花を咲かせたように思っているが、大違いだよ。みんな神の仕業だよ。今を酣（たけなわ）の春の明け方、幾千万種となく咲き乱れた、美しい野の花の上に、冷たい冬の嵐の鞭（むち）を当てて、ただ一時に吹き枯らすあの永遠の奇蹟を行なう同じ手のしたことだよ。私が死ぬのは、二人のために良い事だ。ご覧、この通り、私は古ぼけて、朽ちて、醜い、出来そこないだ。造化と云うえらい鐘造りも、私と云う鐘を鋳損なったとすれば、鋳潰（いつぶ）して、もとの地金に変えてくださるのは、怨むどころか、有難いことだ。ましてついでに、あの出来損なった私の鐘と一緒に、一思（ひとおも）いに谷底へ突き落としてくだすったのは、なおさら有難い思し召しだった。そうだ、私の作った鐘は、出来損なったのだ。良いかい、マクダ。谷底へ落ちこんだあの鐘は、山の上に上げるために、造られたものではなかった。

鋳物師は、製作の望みが絶えたのを知って悶え、再び人事不省に陥（おちい）る。妻が村の人を追い返し、不思議の薬を求めに出て行くと、かの森の姫ラウテンデラインが来て、持ってきた薬草を鍋で煮る。

森の姫　跳ねろい、跳ねろい、火の子さん。
灰の中から、生き返れ。
噴き出せ、噴き出せ、赤い風。
お前も私も異端の子。
ぐうつ、ぐうつ、煮えろ。
（炉の火もえあがる）
ごっとり、ごっとり、鍋が鳴る
鍋のふたさん、重いかえ。
煮え出せ、煮え出せ、米の水。
はやく、おいしいかゆになれ。
ぐうつ、ぐうつ、煮えろ。
（歌いながら鍋の中を調べる）
きれいな、やさしい、春の草。
お前をおかゆに混ぜるぞえ。
甘くて、熱くて、強くなれ。
これを飲む人、若くなれ。
ぐうつ、ぐうつ、煮えろ。
さあ、蕪菁を削いで入れました。こんどは水がなければね。手桶は空だわ——まあ、先きに窓でも開けましょう。良い天気だこと。でも、明日は風が出そうね。だって、鯨のような黒い雲が、山の上に、

長々と寝ていますもの。明日になると、きっと、あの雲が裂けて破れて、気狂(きちがい)じみた風の神が、吼(ほ)え猛(たけ)りながら樅の林や、巌の狭間を潜り抜け、やがて麓の人里へも下りてこよう。あら、ホトトギスだわ。ホトトギスだわ。ここでもホトトギスは鳴いているのね。あれ、ツバメが、一文字に、空をクルリと、明るい日の光を背負って、飛ぶこと、飛ぶこと。（鋳物師この時眼を開いてじっと姫の姿を見る）さあ、蕪菁(かぶ)も削(そ)いで入れたから、今度は水よ。あたしこれからお女中さんになったのだから、なかなかせわしいわ——火の子さん。良い子、あたしと一緒に、働いておくれ。

鋳物師　誰……誰だ、お前さんは。

森の姫　あたし、ラウテンデラインよ。

鋳物師　ラウテンデライン。そんな名前は聞いたことがない。でもお前さんには、どこかで会ったことがある。だがどこだったろう。

森の姫　高い、高い、お山の上よ。

鋳物師　違いない、そうだ、熱で倒れた、あすこだった。そこで私は、お前さんの姿を、夢に見た。……それで今また……今また同じ夢を見るのか。人間は、時々不思議な夢を見るものだ、だが待て。ここはたしかに私の家だ。現に、あの通り、私の家の炉の中で火が燃えている。でも、やはり夢だ。

森の姫　夢を見ているんですって——え、なあぜ。

鋳物師　（恍惚(うっとう)と）なぜって、この通り夢を見ているんですから。

森の姫　きっとそうなのね。

鋳物師　そうです。いいや。そうです。いいや。私はなにを云っているのだ。夢なら覚めるな。きっとそうかと訊かれても困る。かまわない。夢であろうが、現であろうが、勝手にするがよい——やさしい精

霊。あなたに対する私の愛情は、変わりません。ただそこに居てください。居てください。そのままに。

そして姫が、鋳物師の目に接吻すると、鋳物師は、製作の力を回復する。

鋳物師は、やがて姫と共に、山に登り、昔、硝子(ガラス)を吹いた小屋の跡に、工場を設け、山の怪物どもを使役して、半ば寺院、半ば宮城と云う日の神の祠を建て、比類ない響きの巨鐘を鋳ようとする。僧が尋(たず)ねてきて、追い返される。

しかし、僧に責められてから、鋳物師は、心に安んじない。山中の怪物も、上辺(うわべ)は鋳物師に服しているが、心では皆反抗している。工場の仕事は、はかどらない。水の精は、悪夢を送って苦しめる。森の精は、村人を煽動して、彼を襲わせる。

鋳物師は、防ぎ闘い、追い返し、森の姫と酒を飲み、森の姫を舞わして、月を見ていると、村に残した二人の子が、影のような姿で、手に瓶を持ち、岩道を登ってきて、父(とう)さんと呼び、瓶に盛ったのは何かと訊(き)かれて、母の涙と答える。母(かあ)さんか、母(かあ)さんはどこにと訊くと、水茨の下にと答える。

この時、湖に身を投げた鋳物師の妻の死んだ手先と踵が、沈んだ鐘に触れる。沈んだ鐘が鳴り響く。鋳物師は心も空になって、森の姫を捨てて、山を下る。

鋳物師は、村里に帰ったが、村人は憎んで殺そうとする。再び山に逃げ入り、追い迫って来る村人に、石を投げつけて防ぎつつ、夜深く白金の背にたどりつく。

しかし、工場は、すでに森の精に焼かれている。森の媼(おうな)は、彼に魔法の酒を飲ませて、もう一度、最後に、今は水の精の妻になっているラウテンデラインに、会わせる。

鋳物師が酒を飲む時、竪琴のような微妙な音色が、空の上に漂う。
森の姫ラウテンデライン、やつれた、きつい顔をして、井戸から上がって来る。井の縁に腰をかけて、長い乱れた髪を梳(す)く。月光が彼女の姿を、青白く照らし出す。
彼女は一人あてもなく歌う。

森の姫　夜の夜中にただ一人、
あたしゃ黄金の髪を梳(す)く、
森の娘のただ一人。
あれ鳥が立つ、霧が這う、
遠くで魔法の火が燃える。

水の精　（姿は見えぬ、井戸の底から）ラウテンデライン。

森の姫　はい、ただいま。

水の精　早く来ないか。

森の姫　あたしゃ悲しい、どうしょうぞ。
胸の合わない着物着て、
情け無いぞえ呪われた、
あたしゃ水藻に咲く花よ。

水の精　ラウテンデライン。

森の姫　月の光で髪梳(す)いて、

思うは昔の人ばかり。
釣鐘草が歌ったぞえ。
二人うれしい仲じゃとも。
いいえ悲しい仲じゃとも。

鋳物師は、最後に、森の姫の接吻をうけて死ぬ。日が現れる。長い長い夜が空ける。

このハウプトマンの『沈鐘』は、近代娼婦主義初期の三角関係を象徴したものと云えよう。

魅惑的な娼婦型と昔風な家婦型。従来にあっては、男性は、この両者を玩弄物もしくは奴隷視し、それぞれに使い分ける事で満足したが、近代では、両者に若干（じゃっかん）の人格を認めると共に、恋愛の対象として、いずれかの一を選ばねばならないから、その場合、一般に家婦型よりも娼婦型が、男性の要求する所となる。すなわち、近代娼婦主義の第一ページが、ここから繰り広げられるのである。

ダヌンチオの『ジョコンダ』には、気の弱い一人の彫刻家が、その愛らしさは「芸術の不思議」と云われたモデル女のジョコンダと、貞淑な妻のシルヴィアとの間に起こる葛藤や情炎のため、身も魂も焼きただされることが描かれている。

彼は、自殺を企てるけれども、シルヴィアの介抱で助けられる。それから元気を回復すると、こんどはジョコンダに対する欲求が、彼の心を支配する。

シルヴィアと、ジョコンダは、はたと向かい合う。二人の女は、一人は男の霊のために、一人は男の肉のために争う。

とうとう目が眩（くら）んで狂気になったジョコンダは、アトリエに飛び込んで、彫刻家の苦心を込めた大作を、

ぶちこわそうとする。

幕の後ろで、二人の女の豹のように争う音が聞こえる。やがて、シルヴィアの、つんざくような苦痛の叫声が聞こえる。

すぐジョコンダが駆け出して来る。まもなくシルヴィアが姿を現す。彼女の手は、倒れた彫刻像の下にひしがれて砕けている。布で巻いた腕から、血がだくだく流れている。

気絶しかけている彼女の唇から、わずかにもれた声は、

「あれ（彫像）は大丈夫です。」

と云う言葉であった。

夫はジョコンダと一緒に、出て行ってしまう。

保守的な人は云うであろう。肉に迷うのは愚かな事である。可憐なその妻こそ、二つと掛替えのない女性であるのにと。だが、他の人は云うであろう。肉と云っても、単なる肉ではない。単なる迷いではない。男が女の美に惹かれるのは事実である。事実を否定する訳にはゆかない。まして、妻の背後には、男の自由を拘束し、窒息せしめるものがある。たとえば、妻のいわゆる「淑徳」と云うそのこと自身、すでにどうにも堪らないものだ。奴隷として見下していられた時代ならともかく、一個の同伴者としての要求を妻に対して持つ場合には、少なくとも同伴者たるの資格——自主性がほしい。妻の「淑徳」は、むしろ奴隷道徳であり、かつそう云う道徳を肯定し、維持しようとする「世俗」を代表し、しかもそれを正当化して、あくまで男に太刀打ちを挑んでくる憎むべき道徳でさえある。なるほどこうした妻は、完成した夫の芸術品なり、作品なりの「番人」でありえよう。しかし、恋人のように、製作の「動機」となる事は出来ないであろうと。

ワーグナーの『タンホイザー』では、一人の青年が、ヱエヌウス山と云う、肉欲の歓楽境に入り、そこの支配者ヱエヌウスの寵を縦(ほしいまま)にする。

そのヱエヌウスには、不老不死の魔術があったり、普通の人の世では見られない、濃艶な快楽を、与える力があったりする。

が、タンホイザーは、どんな甘美な、強烈な、肉欲の歓楽を与えられても、ただそれだけでは、どうしても満足してはいられなくなる。それを悪いとか、罪とか思うのではないが、ただ、たまらなくなる。

遂(つい)に、洞窟を去り、ヱエヌウスを捨てて、心に絶対の平和を求めに行く。その心の赴(おもむ)く所は、霊性の権化であるエリザベートである。エリザベート！　その名を聞いただけで、彼は氷のような、尊い痙攣に、全身を貫かれる。

けれども、しばらくすると、再びヱエヌウスに惹(ひ)かれる。霊と肉とに苛(さいな)まれ、あちらへ行き、こちらに戻り、輾転反側(てんてんはんそく)する。

エリザベートは、

あのひとのために大慈悲のめぐみを、
　冀(ねが)うことの出来ますよう。

と祈りながら自殺する。

その時まで迷っていたタンホイザーは、エリザベートの柩に身を屈(かが)めかけて、

エリザベートのわが聖者、
わがために祈れかし。

と叫んで倒れる。

この作では、霊と肉の戦いは烈しいが、結局霊の光明が、結末をつけている。

つまり、ワーグナーの段階までは、霊がわずかに勝ったのである。が、前の二作になると、問題は混沌として来るのであり、霊の女も、エリザベートのような空想的人物ではなく、もっと現実的な、だからなお娼婦型に押され気味の家婦型となって来る。

霊と肉との苦しい戦いは家婦と娼婦の二つに女を引き裂いた男性が当然一度は受けねばならない罰であった。

かつて女性は全であった。男たちが、家婦を製造してから――すなわち「女部屋」に女性を閉じこめてから、そうすることによって恋愛を圧殺（ショーペンハウアーは所有すればどんな美人でも美人でなくなると云っている）してから、男たちは擬態恋愛のために、娼婦を創らねばならなかった。これ以来――ソロンが国営妓楼を設置して以来、女性は、家婦型と娼婦型に分裂し、両者は互いに相反目し、相嫉視することによって、しかも却(かえ)って、各々(おのおの)の分裂を長びかせてきたのであった。

二〇

この反目と嫉視は、長い間続いた。そして、妻から娼婦へのそれが、一層痛烈であった事実が、近代に入っての夫の娼婦要求に決定的な機縁を得て、遂(つい)に妻の反逆となり、そして妻の娼婦化を齎(もたら)すこととともな

るのである。

従来、妻はカマドの番人として、不美であることが求められた。妻が美であろうと努力すると、娼婦のようだと云われた。それに反して、なりふりを構わない妻は、貞女だとされた。

妻には家事を。

娼婦には美を。

このように、二つに分けて、考えられ求められてきたのである。

けれども、妻とても女であるからには、夫の愛を得たい。この不平が、妻にあるのは、当然の事で、そこで世間は、家事にくすぶる妻に、美しい誉め言葉を与え、他の女には、娼婦とか、妖婦とか不名誉な名前をやって、罵(ののし)ることにした。

当分の間、否(いな)（ずいぶんと長い間、どうかこうか秩序が保たれてきた。妻は世間の称讃を背景に、他の女を嘲(あざけ)り僧んだ。けれども、他の女は、不名誉でも、男の愛を占有し、その世界を花やかにした。

もし美しい婦人がいなかったら、
この世はいかになっていたであろう。

と、ドイツの詩人ヨハンネス・パブラウブは歌った。

西施酔舞嬌として力なく、
笑って倚(よ)る東窻(とうそう)曰玉牀。

と、中国の李白は、美女西施を讃美する。

一世の妖婦と云われた、楊貴妃が、馬嵬（ばかい）と云う所で、衆議によって殺されると、一世の詩聖白楽天が、長恨歌と云う詩を賦して、

六軍不発無奈何。
宛転峨眉馬前死。

と、悼んだのは、有名な話である。

いつの時代でも、詩は民衆の感情を代表している。妖婦や毒婦と云うような代名詞がいかに不名誉であろうとも、カマドと子供の保護者としての妻よりは、男の愛を幾倍得ているかしれない。

妻は、世間からは慰められ、誉められている。しかし、肝心（かんじん）の夫の心は他にある。現在はそうではなくても、それには消極的な理由があっての事である。

消極的な理由とは何か。貧乏であること、夫が他の女から愛される見込みがないこと、また、夫が社会的地位、道徳、法律等に拘束されている時、こんな場合に、多くの夫は、その妻を、消極的に愛しているのである。もし、仮に彼等を、自由の天地に解放して見るとすればどうか。彼等の多数は、云うまでもなく、若く、美しい女に走るであろう。

アメリカの新聞『イブニング・ポスト』の人事相談欄に、次のようなことが出ていたそうである。

「主人は女中も雇ってくれず、自分は子供の養育から、拭き掃除まで、一切やらなければならず、お化

粧する時間もなく、過度の疲労のために神経質になり、自然主人に辛(つら)く当るようなこともある。こうした日を送っていたら、やがて主人に嫌われるような日が、来るのではあるまいか。」

この質問に答えて、

「仕事を充分にせず、半分しておきなさい。貴女の今日のような生活を続けていたら、だんだん貴女は醜くなって、やがて主人との隔たりが大きくなり、子供を継母の手に渡すようなことにさえも、なりかねないでしょう。洗濯物が溜まっても仕方がないでしょうし、料理なども、なるべく手を省いて、時間の余裕を見出(みいだ)して、お化粧するようにしなさい。」

妻がお化粧をする事は、夫を惹きつけるばかりでなく、夫の警戒心を呼び興すことにもなる。そして、警戒心は、所有への不安を意味する。ショーペンハウアーが云ったように、所有感を男に与えれば、それを最後として、女の魅力は亡びるのである。

こんな話がある。

ある土地の名望家で、朝から晩まで家をあける主人――たまたま帰ると、友達を呼んでは、遊郭の自慢話である。妻は別物に扱われ、友達までが、彼女の存在などには気づかない風で、傍若無人に、そうした話に相槌を打つのである。

妻は、おとなしい女であった。一人悩んで、自分が身だしなみが足らず、それ故の夫の放蕩かと、ずいぶん身だしなみに気をつけて見た。

けれども、夫の浮気は、依然止まない。妻は世の中と云うものが、つまらなくなってきた。

そこで思いきって、家を出て、夫が行く遊郭に身を売った。これまでは身だしなみと云う程度であったものが、大胆な装い、虚無的な身のこなしで、たちまち遊郭第一の美妓と謳われるようになった。

主人は、一旦は、塵でも捨てるような気分で、彼女が乞うままに離別したが、その彼女が、全盛の美妓になったのを見ると、掌中の玉を失くしたような思いがして、これまでに感じたことのない悩みが湧いた。

主人は、彼女に詫び、自分の心を打ちあけたが、彼女は、いかにも娼婦らしく、柳に風と受け流し、遂(つい)にきかない。

主人は絶望し、まもなく死んでしまった。

くすぶっていた頃は、汚らしい妻であったとしても、他の女と同じい場所に置かれてみれば、そう捨てたものでもない。

近代の妻たちは、こうした自覚を、意識的ないし無意識的に、持ち始めた。

妻の娼婦化――そして一般女性の娼婦化である。しかし、ここで注意すべき事は、娼婦化の段階までは、まだ「反逆のための反逆」で、真の自覚ではないと云う事である。それのみか、客観的には、男性の肉欲主義に順応したものと云える。

ヴァイニンガーは、娼婦を定義して、「性的行為を目的自身として考える女性」であるとし、これとの区別において、母婦を「性的行為を目的における手段として考える女性」としている。また彼は、

「婦人運動の多くが、単に自由たろうとする、すなわち母性の桎梏(しっこく)を振り落とそうとする欲求に過ぎない以上、今日この問題の肉体的側面が、在来よりも一層顕著となっている事は、怪しむに足らない、全体として、その実際的結果は、それが母性より娼婦性に向かう反逆であり、女の解放を目的とするよりも、むしろ娼婦への解放であること、すなわち、売笑婦の成功のための大胆な入札であることを示している。」とも云っているが、この限(かぎ)りに於(おい)て、彼の見解は正しいとしなければならない。

女性のいわゆる自由――ブルジョア的自由までは、それは真の自由とはならないのであって、畢竟(ひっきょう)娼婦

的自由、肉欲的自由の範囲を出る事は出来ない。

しかし、この娼婦化への自由が、真の自由への一種の段階的性質を持つ限りに於て、それはもはや引き戻すことの出来ないものであることも、また云うまでもない。

「永遠の女性」崇拝――このような古い偶像崇拝を、世間はいわゆる自覚して利己的になり変態的になりつつある女性たちをもう一度押さえつけ、そして引き戻すためにしばしば思い出すのであるけれども、この種の過去の信仰は、もはや、なんの足しにもならない。一度堤を切って溢れ出た滔々たる時流をせき止めるよすがは何もない。

今や、美貌は、はなはだしく一般化し、武器化している。元来娼婦は、美を生命としている。また娼婦は、所有されるものであるより、少なくとも所有しようとするものである。蠱惑し、魅了し、奪取するものである。自我主義者であり、究極に於て反逆者である。

ショーペンハウアーは、

「男は天性愛情に変転が多く、女は不変に傾く。男の愛情は、その満足を得た瞬間以後著しく減退し、ほとんどいずれの女も、すでに占有した女以上に目をひく。すなわち男は変化を好む。それに反して女の愛情は、その瞬間から増大する。」

と云っているが、それは娼婦には当たらない。娼婦や妖婦――その愛情に変転があると云う男子もこんな女にかかれば、おそらく生涯を捧げても悔いないであろう。

そこで、娼婦化し、ないし、この娼婦化の雰囲気なり段階なりを是が非でも一度通過するであろう今後の一般女性は、多分身を持って、ショーペンハウアーの考え方の甘さを、彼に知らせることになろう。

歪んだ、反逆のための反逆的な娼婦型女性（絶世の美人とされている者の殆どは娼婦型である）は、度

を超えた一種の加虐狂者であるから、勿論(もちろん)相手を占有するばかりで、相手から占有されることも、相互的占有もない。そして、そのための道具として、熱烈に美貌が作為され、わ、な、を作る。

この美貌――しばしば毒性を含む美貌（なぜなら、この種の美貌及び美は、奢侈(しゃし)とのみ一致するから）に対して、かつて男性たちがそれに神性をすら付与した時から、すなわち近代娼婦主義は、強力な一示唆を得て、芽生え始めたと云ってもよい。

このような女性美、が自然美と共に、公然と讃美され、追求され始めたのは、近代からあまり遠くない、むしろ近代の開幕時代からである事は、第五章で詳述している通りで、それに貢献した最大の一人は、勿論(もちろん)ダンテである。

ダンテは、その『新生』で、恋人ベアトリーチェを、「総(すべ)ての悪の破壊者にして、総(すべ)ての徳の女王」と呼び、

彼女がこちらへ来るのをみて、
会釈してもらえるのだと思った時、
世界に余が敵はいなかった。
しかり、かつて余を非難した何人(なんぴと)をも赦そうとするくらい、
吾はただ愛！　とのみ答えて、
わが顔は謙遜に満ちたであろう。

と歌った。

しかも、彼は恋人と、殆ど言葉さえ交さなかった。もし、言葉を交したなら、ベアトリーチェは、理想化された姿を失ない、普通の一般少女と選ぶ所のないものになったであろう。（彼女は察する所あらゆる心理的煙幕を張りめぐらすことによって、自己の魅力を長びかせることの出来る娼婦型ではないように見えるから）

彼女がこの世に出でてより、
すでに恒星天は、その間に東方に向かい、
一度の十二分の一進んでいた。
すなわち、彼女はその九歳のほぼ初めに私に現れ、
私はわが九歳のほぼ終わりに彼女を見た。
彼女はいとも気高き色なる慎ましく淑やかな紅の衣をまとい、
そのいとけなき齢にふさわしいさまに帯し、
また飾していた。
げに私は云う。
その瞬間心臓のいと秘かなる室に住む生命の霊が、
いと烈しく顫い始めて、
いとも微かなる脈搏にすら、
恐ろしく現れ、
かくてふるいつつ、

これらの言葉を語つた。

――（われよりも強き神を見よ。彼来りて我を支配せん）

彼は九歳の時、紅の衣をまとい、ふさわしい様に帯し、また飾した彼女を見た。彼は帯や飾に付いてのみ云い、その他の事はなにも云っていない。

その姿は眺むるものを悦ばし、
眼によりて心に与うる甘美は、
味わう人の他に識りがたし。

ベアトリーチェそのものには、むしろ近づかず、本能的にそれを避けた傾向があり、その事で彼女は、ダンテにに対し、あたかもキルケゴールに対するレギーネの場合のように、多少誤解したり、納得が行かなかったりしていたようでさえある。

しかし、ダンテとしては、遠くから見る姿、色の美で充分であり、それによって、ベアトリーチェその人とは別個の神女を作り、それに向かって、亡び朽ちることのない永遠の価値を与えたのである。かくて『神曲』では、彼女は彼の空想、彼の理想によって、最高の座に付いており、彼を救い、彼を神へまで高め導く役目を果たすのである。

ゲーテも、ほぼダンテに同じい。その最奥の確信、その究極の人生観を表現した『ファウスト』の最後に来る告白と、ダンテの形而上的恋愛との間には、極めて密接な関係がある。

『ファウスト』の最後の場面は、形而上的愛が、その特有な、多種多態な姿に於て展開するのを示したもので、その頂点は、婦人に対する形而上的な恋愛である。たとえば、ベアトリーチェがダンテを案内したように、マルガレーテはファウストを永遠の女性、恋に対する総ての男性の希求の、形而上的完成へと導くのである。

青春期の地上の恋は、天女への形而上的恋愛となって現れる。マルガレーテと云う女性は、ファウストがかつて誘惑して、捨て去った少女の事ではなく、かつて青春に一度神格化し、欲望に捉えられて破壊された永遠の女性を云うのである。

ダンテとゲーテ、これら二人の恋愛は、この二人の偉大な霊魂の中で作られた、地上に於ては求めることの出来ない、女性の美の永遠性に対する希求であった。

では、この二人の地上での愛欲生活はどうであったか。ダンテには妻もあり、子供もあったと云うが、彼はつまり、この妻にはなんの期待も持たず、この妻でない他の幻の女性ベアトリーチェ（彼女は早く死んだが、キルケゴールも云ったように、女の実在は、こうした形而上的恋愛には、むしろ無用でさえある）のみを、全心全霊を持って愛したのである。ゲーテは、この地上では、生涯転々と恋人を代えている。すなわち不幸にして、彼の偶像もこの地上にはいなかったのであった。

それもそのはず、彼等の幻影とは違い、地上の婦人の美（彼等がその恋愛に於て、唯一の地上的手掛かりとした婦人美）は、永遠性や神性とは逆に、貧困、病気、年齢、妊娠・育児、労働等によって、もろくも破壊しつくされる性質を持つ刹那的、物質的のものであり、また、不断の修飾と、富と、閑を要求する一種の欺瞞的、人為的のものでもあり、こうした刹那的、欺瞞的なものの上に永遠性や神性の凝視を持続する事は、とうてい不可能なことに属するからである。

一方、そうした美の所有者とさせられている女性（男性の要求によって）は、その美の上に絶えざる破壊や幻滅、そしてそれと共に彼女自身の無残な破滅を余儀なくさせられる等の、度重(たびかさ)なる経験から、そうした美を飽くなく求めてやまない男性に対し、心からの増悪と反感を持つのであり、その結果、玩弄意欲や刹那的享楽主義、虚無主義、自我主義等に徹するのであって、その最大なものが、クレオパトラや楊貴妃を筆頭とする古今東西の絶世の美女――娼婦型――である事は、云うまでもない。

そして、近代になっては、一般女性の娼婦化と共に、この心理も、勿論(もちろん)一般化しつつあるのであって、ストリンドベルイなどに代表される「女性憎悪」は、女性のこの「男性憎悪」を反発する所から生まれたもので、ヴァイニンガーなどの女性軽蔑とは、やや性質と由来を異にするものと云えよう。

ストリンドベルイは、当然にも、初めはダンテ、ゲーテにも勝る女性崇拝者であったと云う。

彼の三十代の諸作に付いて見る。

『組合の秘密』では、ウプサラ市の大寺院造営の際、それに当たるはずのサンクト・ラルス建築組合の棟梁ハンスが老耄したため、彼の息子ジャックと、石工ステンとの競争になる。ジャックは詭計(きけい)によって、よく棟梁の後任となって、塔を建てるが、技術の失敗から塔が崩れる。ジャックは職を奪われ、組合は解散を命ぜられる。そして、ステンが後任となる。ステンの得意に引き換え、失望と零落の底に墜落したジャックは、忠実な妻マルガレーテの力で、その霊魂は救われ、

「おお、いまこそ悪霊は退いた。マルガレーテ、お前は私の魂を救ったのだよ。」

と叫ぶ。

『マルギリット夫人』では、伝奇的な空想に生来ているマルギリット夫人が、現実的な騎士の妻となって、悲劇的な破綻を生む。

夢と名誉と財産の総(すべ)てを失った騎士は、ロマンチックな夢から目覚めた妻と相対して、
「翼を折られても鷲は生きている。二人でこれから新しい生活を始めよう。」
と云う。夫人は答えて、
「そして、子供たちによく教えてやりましょう。二人は当てもなく高い所にある。でもここは下界だと云うことを。」
以上の諸作は、通じて一つの動機を持っている。それは、「女性による霊魂の救済」である。このように、初めストリンドベルイは、女性憎悪者どころか、女性讃美者であった。
ストリンドベルイは、生涯に三度妻を代えている。最初の妻シリ・フォン・エッセンは、人妻の女優を恋して得たもの、二度目の妻のフリーダ・ウールは、オーストリアの女流画家、最後の妻は、当時絶世の美貌を謳われた名女優ハリエット・ボッセである。三度までも妻を娶り、そして離婚した結果は、女性讃美者であった彼を、女性憎悪者の最も極端な一人としたのであった。
「何も与えることなしに、なんでも自分のものにしようとする。自由を不法に換え、無責任に換える。習慣を放棄すると共に、道徳を失なってしまう。名誉の考えを保つことが出来なくなって、自制の要求を了解する頭も感じもなくなる。男と仲間になると云っても、女にはまるで仲間の意味は判っていない。女が小利口なら、男の力を絞り取って、思想を盗んで、結局男を精神的な廃物にしてしまう。それだけの知恵もない女も、愚かな小細工をして、男の品格をめちゃくちゃにして、手も足も出ない人間にしてしまうのである。」
と彼は云っている。
彼が選んだ三人の女は、そのいずれもが、娼婦型の美女であったらしい。彼女達は、クレオパトラや楊

貴妃の後継者として、恐らく彼ストリンドベルイが強烈に持っていたであろう占有欲、征服欲を反発し、かつ美の使徒としての諸条件――主我、奢修、欺瞞等の諸条件――に対しても、遺憾なく忠実であったらしい。

悲劇の要因は、彼ストリンドベルイに於ける、近代男性としての飽くなき娼婦要求（彼は決して家婦型の妻を求めなかった）にあったとしなければならない。

こうして妻の――そして一般女性の――娼婦化は、近代の一特徴でなければならない。

婦人の自由を叫んだイプセンは、『ヘッダ・ガーブラー』に、いち早く娼婦化を発見している。

ヘッダ・ガーブラーは、ガーブラー将軍の忘れがたみで、学士ヨーゲン・テスマンの若い妻である。

ガーブラー将軍は、貴族的な厳格と清廉との人格者であったらしく、生前はかなり裕福に暮らしたけれども、死後には遺産として、一対のピストルを残しただけであった。

ヘッダは、早くから母親に分かれて、よろず武張った将軍の感化を受けた上、天性の激しい気性の女であったから、子供の時から、自由な、冒険的な、広い世界に出て、現実の生の幸福と歓楽とを、充分に、享楽したい欲望があった。

しかし、軍人と云い、殊に夫人なしに非社交的な孤独を守ったガーブラー将軍の家として、世間に向かって開かれた窓は、極めて狭かった。

そこで、ヘッダの美貌と家柄にしては、不自然なほど少数であった求婚者の中から、でたらめに、今の夫が選び出されたのであった。そして、戸籍面には、ヘッダ・テスマンと書かれることになったが、ヘッダの内心では、いつもヘッダ・ガーブラーが、ヘッダ・テスマンを圧倒していた。

彼女は、この誇りのために、迂愚で、卑屈な、しかし正直な学究としてのテスマンに、なんの尊敬をも、

満足をも、感じていないにも拘わらず、世間に対しては、夫としての体面を、支持することに務めていた。

結婚によって、より充実した生活へ、一歩踏み出そうと云う期待は、みごとに裏切られた。おまけに夫の家には、死にかけている病人の小母リーナがあり、その看護で真っ黒になっているもう一人の小母ユリアーネがある。いじいじと、日蔭の草のようにいじけている下女のベルテがある。

みんなが、因縁と、日常の仕事に、魂を抜かれた、個性のない泥人形の破片に過ぎない。

夫にも、家庭にも、興味を失なった彼女は、自己にも興味を失ないかけている。しかし、いくら倦怠していても、彼女はまだ若い。消極的にでも、彼女の内に働く生の力は、彼女を引きずって、何かしら新しい刺戟を求めて、養分を取ろうとする。

そこでまず、刺戟の相手として、判事のブラックが来た。彼はかなりの年配でもあり、世間の知恵も豊富で、自ら世間哲学の通人を持って、任じている。内心に熱はないが、小賢しい指先の手技で、人間の鍵盤を、あれかこれかと、叩きちらすことに、興味を持っている人間である。

この男が、いつも退屈そうな、青白い無表情な顔をしているヘッダを見てて、あなた方夫婦と自分とで、「三角同盟」の遊戯をしようと提案する。

ヘッダは、本の中に、首ばかり突っ込んでいる夫のテスマンの、真面目くさった相手よりは、まだしも暇そうな顔をして、口先だけでも相手になってくれるブラックに、親しみを感じて、提案を承諾する。おしゃべりでもしていれば、その日その日の生活の空虚が、いくらかでも、薄められると思うから。

テスマン、ブラック、それに続いて、もう一人、第三の男性が、循環舞踏の輪の中に、入って来る。これは、ヘッダにとっては、一層なつかしい、父将軍在世時代の昔なじみであるエイレルト・リョーフボルクであった。

彼は、テスマンと同じく、文化史研究の学徒であるが、これは、うってかわって天才肌の、しかし、あくまで意志の弱い、酒色に魂を奪われながら、刹那刹那(せつなせつな)の白熱的情緒に生きる、近代的頽廃人物であった。

彼は、ヘッダにとっては、異性に対する最初の好奇心を、満足させてくれた相手であった。

窮屈な将軍の目を盗んで、二人は、よく一つ椅子のうえに、肩を押し付けて座って、一つ雑誌の絵に見入ったり、内証で面白い話をしたものである。

それがどうして、別れるようになったかと云えば、女は男を誘って、処女の大きな謎である、性の神秘を探ろうとした。男は、これを単に、言葉の上の知識として与える以上に、進んで、性の神秘そのものの閾(しきい)を超えて、女を誘いだそうとした。

女は、恐怖のあまり、ピストルを振り回して、男を追い退けた。

それなり、リョーフボルクは、ガーブラー家に、姿を見せなくなった。何年かの後(のち)に、彼は、学校の文化史講座から追われて、執行吏エルヴステットの家に、家庭教師として雇われることになった。

エルヴステット家には、大勢(おおぜい)子供がいたが、これは先妻の子供で、新夫人のテアは、元やはり、子供の教師であった女であった。

テア夫人は、温順ながら、世話好きで、気丈な、犠牲的精神に生きることを、喜ぶ質の女であったから、リョーフボルクの、天才はありながら、不遇の身を持ち崩している壌遇に同情し、これを助けて、天才を成就させることを、自分の使命であると、思い込んでしまった。

それに、年を取って、子供の多い家庭の便利のために自分と結婚した夫に対する、彼女の飽き足らない心が、弟のように弱いリョーフボルクに、夢中にかかってきたのは自然で、リョーフボルクも、テアを通じて、久しく渇いていた女性の香味を、むさぼっていた。

第一幕、テスマン夫婦が、昨夜(ゆうべ)新婚旅行から、遅く帰ってきた所。そこへ、思いがけもない、なじみのテア・エルヴステット夫人が、花束を贈って、訪問の意を通じて来る。

テアとヘッダは、学校友達で、その頃、神経を苛立たせるような、美しい髪の毛を持ったテアを、ヘッダは嫉妬して、火を着けて焼こうとしたこともあった。彼女は、テスマンの、昔の恋人の一人で、リョーフボルクとも、関係があると云う噂を、ヘッダは聞いているので、退屈しきったヘッダの心には、不安と好奇心で、ちょっとした波瀾が起こる。テアが入ってきたのを見ると、優しい、しかし苦労にやつれた顔をしている。

夫人の用向きはこうである。家庭教師のリョーフボルクが、一週間も前に家を飛び出して、この町に来ている。多分、今度出した本が、案外評判が良いので、有頂天になったらしく、続いて書きかけた著述の草稿を懐(ふところ)にしたままで、出ていったが、酒を飲むと、悪い誘惑に掛かりやすい人で、心配でたまらないから、探しにきた、と云うのである。

けれども、だんだん話して行くうちに、夫人の用向きは、単に家庭教師の身持が心配だから、様子を探りに来たぐらいの事ではなくて、この二年越し、リョーフボルクのために優しい精神的協力者であったテアは、今では、彼無しには、一日も生活の落寞(らくばく)に耐えない女になっている。が、彼女と男との間には、別に第三の女がある。それはなんでも、「髪の毛の赤い歌い女で、始終弾を込めたピストルを持っている女で、この町に住んでいるらしい。」と云うのである。

ヘッダは、そっと横をむく。

判事のブラックが出て来る。ブラックの口から、教授の椅子が競争になったことが分かる。しかも相手はリョーフボルク。

あの男が今更と思うけれど、今度出した本の評判の良い所を見ると、油断がならない。教授一つを当てにして、身分不相応の結婚をしたり、お大層もない家を借りたのは、とんでもない冒険であったと、テスマンが泣き面をする。

ヘッダは、冷ややかに、夫に尻目をくれて、教授が危なくなったら、交際社会に出て、にぎやかにお客をする約束も、夢になりそうですね。でも私には、退屈な時間を消すものがあるからいい。ガーブラー将軍のピストルがあるからいい。

第二幕、テスマンは、判事のブラックに、リョーフボルクの新著を読んだ話をして、その明晰な批判力に感心する。

そこへ、リョーフボルクが現れる。彼は、大学教授の位置を争う野心など、毛頭ない。彼にとって、さしあたりの関心事は、今も隠し（かくポケット）に入れて持って来ている『社会文化史』の原稿を完成して、傷つけられた名誉を回復することだと云う。

ここで、ヘッダとリョーフボルクとの間に、夫や判事の耳目から隠れながら、昔の関係が暴かれる。男は今ではテアのものである。テアは、ヘッダよりも「馬鹿」であるかしれないが、本能に従う力は強い。彼女はそのひたむきな意志で、薄志弱行な男を、しいて捕まえて、自分のものにした。

ここまで来て、ヘッダは、テアと、リョーフボルクを真ん中に挟まれての、それこそ真剣な三角関係に立ったことを、自覚したのである。

そして、自分の勢力が、遥かにテアに及ばないことを知ると、リョーフボルクに対する恋着よりも、彼女自身に対する自尊心から、断然テアを敵として闘うことを決心した。

そでへ、なにも知らないテアが、いつもの優しい、しかし、あくまでも気丈な女性らしい態度で、リョー

フボルクを追ってやって来る。ヘッダは、心の底で、冷ややかな笑いを浮かべた。

ヘッダは、巧みに、テアとリョーフボルクとの間を操って、テアを自分の手元に、リョーフボルクを、夫や判事に付けて、外へ出してしまう。意志の弱い上に、著作の成功に、二人の女の情熱の葛藤の間に挟まれた感激と昂奮と、それに、ヘッダに勧められたパンチ酒の陶酔に、昏迷しきったリョーフボルクは、よろめきながら出てゆく。

第三幕、翌日の明け方、ヘッダは目を覚ます。テアが休息に行く。そこへテスマンが、疲れたような、しかし厳粛な顔して帰って来る。

リョーフボルクは、昨夜(ゆうべ)の原稿の一部を、朗読した。みんな感動した。リョーフボルクは昂奮して、酔っぱらって、原稿が、ある女の感化のもとに出来たことを、告白した。

そして、ひょろひょろして、外へ出ると、原稿を落とした。それを、自分が拾って持ってきたと話す。

ヘッダは、そう云う原稿は、二度作り直すことの出来るものかと訊(き)く。感激が去ったら、二度と書く事は難しいと、夫は云って、危篤だと云うリーナ小母さんの、病気の見舞いに行く。

あわてて原稿を忘れていったので、ヘッダは、良い物を見つけたと云うように、引き出しに隠してしまう。

そこへ判事が来る。判事の話で、リョーフボルクが、昨夜(ゆうべ)あれから「赤い髪の歌い女」の所で、馬鹿騒ぎをして、巡査に引っ張られる始末を演じたことが分かる。判事と入れ違いに、噂の主リョーフボルクが、駆け込んで来る。

リョーフボルクは、テアに向かって、昨夜(ゆうべ)原稿は、ずたずたに裂いて捨ててしまったから、もうなにも手伝ってもらうことがなくなった。あなたの夫の家へ帰ってくださいと云う。

「まあ、あなたは、二人の間に出来た子供を殺したのです。」
と、テアが絶望の叫びをあげる。
テアが出て行った後で、リョーフボルクはヘッダに向かって、実は原稿は、恥ずかしい場所で落としてしまった。もう一切は亡びた。最後の処決をするほかはないと云う。
ヘッダは、一対あるピストルの中の一つを出して、「では、これで美事にね。」と云って、リョーフボルクに渡す。そして一人になると、引き出しから原稿を出して、暖炉にくべてしまう。
「さあ、テア、お前の子供を焼き殺すのだよ。良いかい。お前の子供を。」
第四幕、その夕方、リョーフボルクは、死ぬ間際まで、享楽に耽ったのち、切羽詰まって、発作的に、醜い場所で、醜い死を遂げた。愛するが故に憎んだ男を、せめて美しく、芸術的に殺すことによって、運命の桎梏から逃れさせようとしたヘッダの努力も、無駄になった。のみならず、彼女が与えたピストルは、判事ブラックの手に押収せられた。職業柄、彼はすぐヘッダの急所を掴んでしまう。
焼かれた原稿の下書きは、テアが持っていて、それに、死者に対する贖罪の感情から、テスマンも手伝って、いったん殺された「二人の子供」を、再び世に出すことになる。ヘッダの意志は、再びテアの意志に全敗し、功利的な判事ブラックのために、法律と色情の両方の名で、永久に支配されなければならない。
ヘッダは、別室で、残った一挺のピストルで、自殺してしまう。
驚嘆した判事は、
「どうも人はこういうことをするものではないがなあ。」
と云う。
この戯曲の女主人公ヘッダが、娼婦化した妻の標本である事は、疑いがない。彼女には、愛よりも、「所

有する」ことが関心事である。なにより耐え難いのは、「所有される」事で、それよりむしろ死を選ぶことになる。

この戯曲は、リョーフボルクを挟んでの、テアとヘッダとの三角関係を、主題としているのであろう。しかし、私は、もう一つの、ヘッダを中心とする夫のテスマンとリョーフボルクや判事ブラック、テアを中心とする夫のエルヴステットとリョーフボルクのそれにも、注意したいと思う。

男性中心の近代的三角恋愛は、主として前に見たように、霊と肉の闘いであり、女性中心のそれは、結婚生活にたいする不満、または反逆から来ている。

ヘッダの夫テスマンは、妻を顧みない学究であり、テアの夫エルヴステットは、もっと冷淡な老人である。この二人は、極めてつまらない、目立たない役を引き受けている。ことにテアの夫のエルヴステットなどは、存在すら無視されているほどであるが、しかも、この二人なくしては、この戯曲は考えられないのである。

すなわち、これらの夫に対して、妻たちの三角恋愛が始まるのであるが、この場合、見物人や読者は、あるいは、リョーフボルクを中心の三角恋愛の在り方のみ注目し、テアを霊の女、ヘッダを肉の女と決めることだけで、満足するのかもしれない。しかし、それぞれの夫との関係における、二人の女性の在り方を観察するならば、またそこには、自ら違った見方が持たれるであろう。すなわち、テアは、その性格から考えて、夫に対しても、ヘッダのようには、否定的態度を露示しないであろうし、その事で、テアはヘッダよりは、はるかにその夫を欺瞞し、侮辱していることになるのである。

「妥協」は侮辱ないし侮蔑の一形式であり、「反抗」は尊敬の一形式であるからである。

けれども、テアも、ヘッダも、自らの三角関係について、なんらの錯誤感も、苦悩も、感じないらしい

点では、共通しているものがある。ここに、娼婦性があり、この点では彼女達はまったく同型で、しいて差異を云えばテアは善良な娼婦、ヘッダは勝気な娼婦と云う程度であろう。

けれども、こうした妻の娼婦性の一面に、従来のいわゆる貞婦性の延長のそれがあることも、注意されねばならない。従来の妻は、鞭(むち)と刑罰によってのみ貞婦であり得たので、その主体性は無性格——と云うよりは、愛の自覚や責任なく、相手の如何(いかん)を問わず、身を売ることに馴れた、やはり一個の娼婦にすぎなかったからである。

それが、近代では、夫以外の相手にも娼婦たることが、黙認され、または自由の名によって正当化されてきたのであって、ここに、かつての、家婦と娼婦とを相手とした夫の三角恋愛が、妻の世界にも、そのまま入り込んで来たのである。

アナトール・フランスなどの小説に出て来る妻の恋愛、そこではその夫は、大抵(たいてい)俗物で、政治熱に浮かされている老人であったりする。そこで、若い美しいその妻と、恋愛専門の青年との恋は、なんの不自然もないものとして描かれている。

こうなると、「結婚」は、夫にとっても、妻にとっても、露骨に便宜主義のものとなる。従来とてもそうではあったが、それが一層表面化して来るのである。ことに、この傾向は、上流社会にあって、最もはなはだしい。

上流社会では、結婚は、多く極度に取引化しており、このことをベーベルは、

「少し大きな都会には、皆、主として妻選びのために、上流階級が会合する一定の場所と日とがある。かような集合所は、適切にも、婚姻取引所と呼ばれている。なぜなら、他の取引でのように、ここでもまた、投機と掛け引きとが主な役目を務(つと)め、詐欺や詭計(きけい)さえも、差し控えられないからだ。」

そして、その取引関係は、

「一方では、出来るだけ金銭を得ようとする欲望が、他の方では位階、称号、身分等に対する憧憬が、社会の上層階級の間に、この方法によって、相互の満足を見出すのである。ここでは婚姻は、勿論取引行為で、夫婦は、表面上は尊敬しあうが、内実は、各自恣に振るまうのが、殆ど通例である。」

フランスの作家ヴィクトル・マルグリットが、第一次世界戦後のブルジョア階級を描いた『ガルソンヌ』には、モニックと云う純真な少女が、取引結婚の生贄とされていることを知り、また婚約者を含む周囲の腐敗堕落に幻滅し、彼女自身無軌道な、反逆的な娼婦主義のヒロインとなる経路が描かれている。

金銭万能の資本主義社会では、このように婚姻は、ひどく物質的計算の対象となったが、こんな婚姻に、初めから両者の尊敬が欠けている事は勿論で、夫は、彼の享楽と恋愛の要求とのために、妾を蓄える。妾を蓄えるだけの資力を持たないものは、娼婦と戯れる。そして妻は？　彼女は益々反逆的となり、娼婦化して行く。

「彼女達の精神的栄養は、往々、ただいかがわしい小説や、淫猥な読物、浮薄な演劇の見物、感覚をそそる音楽の享楽、人を酔わせる刺戟的飲料、あらゆる種類の醜事件に関する談話からなっている。或は怠惰と退屈とは彼女達を情事にみちびく。」

この事は「古代資本主義」の時代と呼ばれているギリシア、ローマの、奴隷時代の末期に顕著であった妻の娼婦化現象――古代娼婦主義現象と、極めて似通った事情にあることを思わせるものがある。

彼女達は、娼婦の特徴がそうであるように、子供や、子供の教育に対しては、殆ど興味を持たない。これらは、彼女達にあまり多くの骨折りと、退屈とを齎す。それで、彼女達は、それを乳母や下脾に委ね、後には寄宿舎に送るのである。

ベーベルによれば、

「せいぜい彼女達が、任務として認める所は、娘を飾人形に、息子を「金色の青年」に、仕立てることぐらいである。かような子女の中から、いかがわしい洒落者（しゃれもの）や、まさに妓楼の主人と同列に置かれてよい軽蔑すべき人々の階級が生まれる。そして金色の青年はまた、労働者の娘たちを誘惑することを主な任務と認め、無為と浪費とを職分と心得るのである。」

二

近代娼婦主義は、第一に男性の要求から、第二に女性の反逆から、そして第三には、これこそ文字通りの娼婦として、生きるため、食うために。

「売淫婦の数は、食うや食わずの賃金で種々の職業に従事する労働婦人の増加に比例して、増加する。」と、ベーベルも云っている。

それはまた、市民的社会では、避くべからざる工業的恐慌――数知れない家庭に一時に貧困窮乏を齎（もたら）す恐慌――によっても促進される。ボルトンの警察長官がある工場監督官に宛てた一八六五年の書信によれば、北アメリカの奴隷解放戦によって誘起されたイギリスの綿業界の恐慌の際には、年若い売淫婦の数は、最近の二十五年間の増加以上に増加したと云う。

「不時の出来事、すなわち父母の死、失業、不十分な賃金、貧困、偽りの婚約、誘惑、張られた網」等が、彼女たちを堕落に導く。カール・シュナイトの『ベルリンの女給の窮状』によれば、驚くべき多数の下婢が女給になるが、ここに云う女給とは殆（ほとん）ど例外なく売淫婦を意味する。彼女達をこのように堕落させた理由としては、

「主人の胤を宿し、そして、金を儲けねばならなかったから。」
と答えるものもあれば、
「シャツの裁縫その他では、あまり少ししか儲からないから。」
「働いていた工場から解雇され、他に仕事が見つからなかったから。」
「四人の幼い弟や妹を残して、父が死んだから。」
などとも答えられる。
特に下婢は、彼女の雇主に誘惑された後で、大抵売淫婦となることが知られた。
「数万をもって数えられた女裁縫師、仕立屋、飾物職、女労働者等も同様の状態にある。」
とベーベルは云う。
雇主や、その役員、商店主、地主等は、女性の労働者や雇人を、自己の犠牲とすることを、しばしば一種の特権と認めている。そしてこれらの破廉恥な行為から、自暴自棄となった多くの売淫婦が、産出されることも、見逃せない現象とされる。
細井和喜蔵の『女工哀史』にも、
「罪は多く不徳な男工を初め、工場監督面して威張っている、彼女の隣なる男性にある。」
とあり、
「工場長が、女工をげん妻にひっかけて、弄んだりなどした。従って、下の社員は見よう見まねで、いずれも自分の地位を利用して、各々好いたげん妻を拵えるのであった。わけても、織布部の工務係なんかは、三人もの女を一時にはらませてしまい、なんらの手当ても講ぜずに、そのまま女をうっちゃらかした。
こんなわけで女工の堕落は、必ず他動的な場合が多い。

女は、こうして、実のない男に一旦貞操を蹂躙せられてしまうと、その反動として、ぐっと心の持ち方が変わり、だんだん聖無頓着な淪落へと引き込まれて、遂には売淫婦の群れに投じ、ナマクラ女となりさがる。

これは、公娼の前職業が、十一パーセント紡績女工であったと云う統計が示している。

しかし、この統計には、私娼のことが出ていないから、私の推定としては、売淫婦の三十パーセントが、女工の成れの果てだと思う。だが、これも彼女自らの意志で、そうした廃窟へ落ち行く場合は極めて少なく、多くは悪辣な誘拐業者の手にかかるのである。女工募集人や、色魔の男工が、さんざんっぱら絞って弄んだあげく、おしまいに、女郎や白首（首筋に白いおしろいを塗りたくった酌婦などの客に媚をうる女）に売りとばした例は、かなりしばしばある。」

ともある。

売淫は、女工や女給に限らず、さらに「高級な職業」に従う人々の間からも、その犠牲者を要求する。

マセーは、

「高級或は下級の教師免状は、パンの保証と云うよりも、むしろより多くの自殺、窃盗、または売淫への指図である。」

と、パリについて云ったと云う。

レマルクの『凱旋門』に描かれている、第二次世界大戦前後のパリにおける、婦人達の状態はどうであろう。

ジョアンは、素直な女性であるが、愛することと、食うことを、チャンポンにしたような、半恋半娼的な渡り鳥の生活に生きている。ここでは男も「玩具」としてではなく、「伴侶」として女を見てはいる。瞬

間的な伴侶として。

主人公ラヴィックの考えによれば、結婚は――愛は二人が一緒に年を取ることを欲することだと云う。さっぱりした小さなアパルトマンで、さっぱりとした小さなブルジョア生活。深い淵の断崖の端に、さっぱりとした小さな安全を求める――愛の夢、しかし、今は、男女相互が相互に対して、永久に責任を持ち合うことの、可能な時代かどうか。

第一、責任とは何者だろう。瞬間こそ永遠に一番近いものだ。瞬間に生きること、それが、それのみが、永遠を生きることになる。

「僕は月の世界に居たのだ。そして、いま帰ってきた。君が居た。君は生命だ。なにももう訊かないでくれ。何千の質問よりも、もっと沢山の秘密が、君の髪の中にある。お互いに愛し合う人間は、それだけで全部だ。あらゆるものだ。世界の不思議だ。」

と、ラヴィックが、ジョアンに云って聞かせる。キルケゴールがレギーネに、宗教的恋愛を説いて聞かせたことからの、思想的脈絡がここにある。恋愛の実存主義である。

この場合、女はいつも、分かったような、分からないような、不安や、あきらめの中に、立たされる。恋愛と結婚とが、充分に社会的に保障される時が来るまでは、こうした知的悲劇は止まないであろう。

女は、必ずしも、いわゆる結婚を望むのではない。ただ、恋愛が、殆ど必ず陥る――『凱旋門』の場合では、早く恋愛以前に陥った――性的関係の結果の妊娠、出産、育児等を、だれが保障するかと云う問題が、女にはある。その保障が、遺憾無く、社会的になされている場合にだけ、瞬間の恋愛も、純粋に成り立ち得るのである。

近代の娼婦主義は、女が男に頼れなくなり、男が女を恐怖する所からも、たしかに始まったと云える。

かつて女は、男のために、子供を生むものとして、女部屋に捕獲され、その限(かぎ)りに於(おい)て、最低生活が保障されたが、いまでは多くの男はかつての世襲的なそれぞれの職業を失くして、不安定極まりない賃金労働者となり、その賃金も妻子を支えるに足らないもので、従って、昔は「女の腹は借り物」などと、子供に対する徹底的所有権をすら主張したのが、いまでは父権の忌避者が多く、ここに私生子の問題なども生まれて来る。また、後に触れるような避妊や産児制限の風潮等も、ここから出現するのである。とにかく、女が「子を生む」器械である事実は、昔とは逆に男たちを恐慌せしめる。

「いまでは、大抵(たいてい)の男は、結婚を忌避している。」

と、ベーベルも云っているほどである。

カルヴァートンは、その著『結婚の破綻』の中で、つい十八九世紀まで、「依頼的な葡萄型」――]蔓植物型の女が一般の理想とされたと云っているが、今ではそのこと自体が恐怖となったのである。

こうして、負担を伴わない性生活の対象（心的にも物的にも）、それをこの過渡期に求めようとすれば、結局娼婦または半娼婦以外には無いと云う所からも、近代の娼婦主義――]男性の娼婦要求――が芽生えて来る。

『凱旋門』のジョアンの魅力は、

「彼女は仰向いてグラスを空けた。髪が肩から乖れさがる。その瞬間、彼女は飲む以外の何ものでもない。彼女は自分がすることが何であれ、完全に身体を投げ込んでしまうのだ。恋をする時は、恋の他には何ものもない。絶望をする時は、絶望する以外にはない。忘れる時は、忘却のほか何もなくなる。」

所にある。彼女は、すなわち、完全に瞬間的であって、この意味で、男たちに負担をかけない。

こんな型は、過去の依頼型とは違う。とはいえ「独立型」でもない。やはり一種の娼婦型または半娼婦

型と云えよう。だが、こんな娼婦または半娼婦型の女が、母となった時こそは悲惨である。男たちは多分彼女から逃げ去るであろう。母になった娼婦は、娼婦それ自身の存在価値、従って魅力の全部を無くしたことになるから。

二二

「新道徳と、避妊薬の普及して行く知識とは、密接な関係を有している。」と、カルヴァートンは云っている。また彼は、「結婚前に性交を行なった七十一名の婦人中、五十名は避妊法に関する知識を持ち、知識を全く持たなかったものは、わずかに十九名にすぎなかった。」と、デーヴィス博士の報告を引き、「子供を作るよりも避けるほうを好む青年を有する現代」における、避妊法の著しい普及に付いて述べている。

避妊の徹底した国としては、フランスがあげられる。コロンタイによれば、そこでは過去百年（一八〇一―一九〇一）に、年々の出産数が、順次に一万人に対して、三百三十五人から、百九十七人まで、少なくなっていると云う。わが国でも、大正九年以来戦前までの十七年間に、出産率は一割五分下がっており、これは明らかに産児制限の普及によると云われている。また、昭和二十二年、人口問題研究所が東京都と神奈川県の工場従業員と官公職員について調べた結果によると、その二割五分が調節を実行しており、知能的労働者では四割までが実行していると云われる。また、避妊国として有名なフランス（特にパリ）は、堕胎に於てもそうであると云う。

しかし、カルヴァートンによれば、「アメリカの都市も、この点でパリに匹敵するものが、必ずしも少なくない。レウィンの述べる所では、ニューヨーク市には、年々八万の犯罪的堕胎が行なわれる。」とある。

そして彼は、

「堕胎及び私生子の如き現象の発達のうちにこそ、我々は、旧道徳の破産を、明白な形と、躍如たる相において、観察することが出来る。」

と云っている。

私生子の流行も、この世紀では、避けがたいもので、避妊も堕胎もあえて為し得えない（いずれもその方法に於ては、まだ到底完全と云う域には達していないし、母性の本能からも、あえて為すに忍びない事が多い）母親の場合がそうである。しかし結局、これらの私生子は、しばしば産院等に預けられ、殺されることなどもある。わが昭和初期の岩の坂貰い児殺しや、最近の寿産院事件等がそれである。コロンタイも、各国における驚くべき私生子の死亡率を、同じような観点から説明している。

このような「母性の受難」と近代娼婦化現象とは、一体の両面と云わねばならない。（娼婦化現象には、上に見たように、より多く性格的な意味での娼婦化もあれば、文字通りのものもあり、中間的のものもあるが、そのいずれもが、資本主義的生産関係に、直接的、間接的基礎を持っている点で、一致している）

すなわち、男女、親子が、家を離れて、個人的に、ちりぢりに、自由職業（不安定な）へと、分散したこと、従って、それらの各人は、曲りなりにも対等の自我と、対等の経済生活を持ち、かつて利益的集団として、家長の主権下に秩序づけられていた「家」は、今や自然的集合のそれとなり、従ってそれは、男女の性が中心となり、子供はここでは目的ではなく、結果となったこと、子供の扶育は男女の責任であるが、それは極めて不安定となったこと、なぜなら両者のいずれかが失業し、または死亡した場合、或は両者共稼ぎである場合等に子供の監護が充分でない、また男はしばしば結婚を忌避或は放棄し、結局女性の責任となること、けれども女性の職業その他による収入は、与えられた責任の保障とは到底なりえないこと等々の問題が、或は避妊、その他の悲惨事を惹起し、或は娼婦化の現象ともなるのである。

エレン・ケイは、「二十世紀は子供と母の世紀」と云ったが、正しく云えば、「二十世紀は子供と母の受難の世紀」なのである。

母子の無保障における性生活は、いかにしても自由なもの、自然なものとはなりえない。フランス革命前後から、いわゆる「自由恋愛」が叫ばれ、イズムとしては、すでに何人(なんぴと)にも肯定されてきたが、さてそれを実践に移す時そこには必ず中毒症状――個々的には多分に玩弄的、娼婦的のものとなり、心理的、生理的頽廃を惹起する。また社会的には前述のような種々の母子問題が継起し、全機能を衰弱せしめるのである。（次章にレーニンの適切な批評を引いている。参照）

すなわち、資本主義下では、自由恋愛は、遂(つい)に正常な発展を遂げることが出来ず、その一歩手前で、肉欲主義に堕してしまう。

自由恋愛を、言葉の正しい意味での自由恋愛とするためには、どうしても母子問題の充分な社会的保障と云うことが、先決問題として考えられねばならない。そして、それは、第六章及び第七章でも、常に結論として引き出されたように、現在の社会機構に於(おい)ては、到底期待し得られない事であるから、即ち結局、社会革命への模索ないし仰望となる所以(ゆえん)である。

第九章　社会革命思想

二三

社会革命思想には、プラトン的ユートピアのそれをも加えれば、限りなく多種多様のものがあるが、ここには近代の主要なそれを、簡単に述べ、そして女性ー特に恋愛との関連を考察してみよう。

マルクス社会主義は、科学的社会主義と云われている。過去の空想的社会主義から区別されている理由は、彼は彼自らの理想とする社会を、単に幻影として描き出すのではなく、精密周到な論証を持って、必ずかくあるべしと断定的に示唆するからにほかならない。

すなわち、希望すると否とに拘わらず、好むと好まざるとに拘わらず、未来社会は必然的に、社会主義的ならざるをえないと云うにある。

ここに科学的特色がある。

これまでの空想的社会主義の理想する社会は、希望的に夢想せられたにすぎなかったけれども、マルクスの理想社会は、科学的論証を経た事実的発見とも云うべきであった。

マルクスの社会主義は、希望論ではなくて、必然論なのである。

マルクスは、その唯物的歴史哲学を基調として、社会制度は、総て、これを定むべき要素条件が備わった自然の結果で、人為的に、どうするなどと云うことの、出来るものではない。従って、現前の社会制度もまた、必然のもので、それは、人類が永遠の未来に到達するに際して、必ず経過せねばならない一定の段階であると考えたのである。

マルクスの見解に従えば、現前の資本主義の経済組織そのものの中に、社会主義の胚種が存する。資本主義は社会主義に至るべき必然の経路である。科学文明の発達に基づく生産機関の発展そのものの中に、社会主義の要素が徐々に成育しつつある。資本主義社会は、社会進化の必然の結果として崩壊し、社会主義社会は、社会進化の必然の結果として生まれると云うのである。

マルクス主義の理論は、その有名な唯物史観に根拠している。

唯物史観と云うのは、人間の一切の生活様式は、物質的事情、経済的関係の如何（いかん）によって、決定する。人間の社会生活の外観は勿論（もちろん）、その精神生活、政治、法律、道徳、宗教、文芸、科学、哲学等も、総（すべ）てその時代の経済組織を中心として存在し、推移すると云うのである。

人間が、社会的に、生活資料を生産するにあたって、ある必然的な、自己の意志に無関係な関係を作る。その関係は、その社会の物質的生産力の発達程度に相応する、生産関係である。

この生産関係の総和が、社会経済の骨組みをするので、これが法律、政治など、上部構造を作り上げる真実の基礎であり、またこれに相応する、ある社会的自覚を生む基礎である。

それで、この物質的生活資料の産出方法こそ、社会的、政治的及び精神的の一般生活形式を決定する。人の意識が、人の生活を決定するのではなく、その反対に、人の社会生活が、人の意識を決定するのである。

けれども、社会の物質的生産力は、その発達のある段階で、現在の生産関係と矛盾することとなる。換言すれば、この生産関係の法律的表示に過ぎない、そして、従来この生産力を自己の内部に発動せしめていた財産関係と、矛盾することとなる。

ここに、社会革命の時代が始まる。経済的基礎が変化すると共に、その巨大な上部構造の全部もまた、

あるいは徐々に、或は急激に、革新される。

しかし、ある社会形体は、その内部に包容する総ての生産力が、充分発達したのちでなければ、決して亡びるものではない。そして、一層発達した新しい生産関係が現出するには、それに相応する物質的条件が、すでに旧社会の翼の下に孵化されていなければならない。

だから人間は、常に解決し得る問題だけを、提起するものである。一層精密にこれを考察すれば、およそ問題は、必ずこれを解決する物質的条件が、すでに存在するか、或は、少なくとも発生しかけている所にだけ、生ずることが分かる。

経済進化の列次は、アジア的、古典的、封建的及び近代資本家時代の各生産方法を以って、大別せられ得る。そして、今日の資本家的生産関係は、社会的生活過程での最後の軋轢形式をなすものである。

その軋轢は、個人的軋轢の意味でなく、各個人の社会的条件から生ずる軋轢である。だが、この資本家的社会の内部に発達した生産力は、同時にまた、での軋轢を解決させる、物質的条件を作る。それ故、この資本家的社会組織の成立と共に、人類の歴史前記は終わりを告げるのである。

こうして、マルクスは、社会進化の必然の結果、社会主義社会に推移することを強調する。

そして、その推移の過程に於て、生みの悩みとしての階級闘争の避けがたいことをも、合わせて主張する。それは畢竟、資本家社会が成熟すればするほど、有産者と無産者の区別が明白になり、社会はここに、截然とした二個の階級にわかれる。有産者か、そうでなければ無産者に。そのいずれかに何人も属するようになる。この二者の利害は、徹頭徹尾相反する。共通すべき何物もない。そこに必然避けがたい闘争が起こる。

では、階級闘争とは、具体的にはどう云うものか。マルクス、エンゲルズの主著として知られる『共産

党宣言』によれば、

「総てこれまでの歴史は、階級闘争の歴史であった。自由民と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、親方と職人、約めて云えば、圧制するものと、圧制されるものと、それが昔から相反目してきた。

そして、或は隠然の、或は公然の、絶ゆることなき戦い、いつの世でも、結局全社会の大変革におわる所の、すなわち或は相争いつつある両階級の共倒れを持って、或は、ある一方の階級の勝利を持って、終極する所の、戦いを続けている。

古代ローマでは、王族、騎士、平民、奴隷があり、中世では、封建諸侯、家臣、親方、職人、農奴があり、かつ、その各々にも、それぞれの等級があった。封建社会から生まれ出た近代の自由社会も、決して階級を廃したのではない。それは古いものの代りに、ただ新たな階級と、新たな圧制の手段と、新たな闘争の形式とを、齎したばかりである。

だが、我々の時代、すなわち有産者本位の時代は、それらの階級の対立を、極めて簡単にしたと云う特色がある。全社会は、今や二個の敵視せる二大陣営に、互いに、間近く対峙せる二大階級に、有産者団、無産者団に分裂しつつある。」

こうして互いに利害の相反する二大階級の対立と、闘争とを以って、現社会の特徴と見、そして、その戦闘で、最後の勝利は、云うまでもなく労働階級であらねばならないと云うのである。

この思想は、社会の下層に沈淪する無産階級を力づけ、奮い立たせた。のみならず婦人運動に、非常な影響を与えた。

婦人問題については、右の『共産党宣言』の中にも、若干触れてある。

「家族制の廃絶！　共産主義者の、この不名誉な提案に対しては、最急進派の人々すらも憤激する。し

かし、現在の家族制度、ブルジョアの家族制度は、如何なる基礎の上に立っているか。資本の上、私収入の上に立っている。完全に発達したこの家族制度は、ただブルジョアジーの間にのみ存在している。そして、プロレタリアの強制的無家庭と、公娼制度とが、その補足物になっている。

ブルジョアの家族制は、もとよりこの補足物の消失と共に消失する。そして両者とも、資本の消失と共に消失する。

諸君はまた、子供に対する親の搾取を廃絶するものとして、我々を攻撃するが、我々は、甘んじて、その罪人たることを自認する。

しかし（と諸君は云うだろう）、家庭教育を廃して、社会教育をそれに代えるのは、最も神聖なる家族関係を廃絶するものであると。

ところが、諸君の教育も、やはり社会によって決定されるのではないか。諸君が教育を施すその社会的諸関係によって、決定されるのではないか。共産主義者は、教育に対する社会影響を発明したのではない。彼等はただ、その影響の性質を変じて、教育をして支配階級の勢力から脱出させようとするのである。

家族制度や教育の事に付いて、また親子の間の神聖な関係などと云う事に付いて、ブルジョアがこんな云いわけをしている時、大産業の結果として、プロレタリアの家族関係が、だんだんに破壊され、その小児たちが、単純な商品と労働器械とに変形されて行くのを見ると、我々は、実に嘔吐をも催すの感がある。

だって君ら共産主義者は、婦人の共有を行なわんとしているのじゃないかと、全ブルジョアジーが、我々に向かって、合唱的に絶叫する。

ブルジョアは、自分の妻を単なる生産器具と考えている。そして生産器具が、皆共同に利用されると聞いたのだから、その共同利用の運命が、やはり婦人の上にも来るものとしか考えられないのは、無理もな

い話である。共産主義者の目的とする所は、そう云う単なる生産器具としての婦人の地位を、廃絶しようとするにあるなどとは、彼等が思いもそめない事である。

しかし、何にしろ、わがブルジョア諸君が、そのいわゆる共産主義者の共有制に対して、道徳的義憤を発したことほど笑うべきものはない。共産主義者は、婦人共有を創設する必要がない。それは、とくの昔から存在しているではないか。

わがブルジョア諸君は、公娼の事はしばらく云わないとしても、プロレタリアの妻や娘を、勝手にして、それでも、なお満足が出来ないで、さらに自分らの妻を、互いに誘惑することを、無上の快楽としているではないか。

ブルジョアの結婚は、その実質上、まさに妻女共有制である。さすれば彼等が共産主義者に加え得る攻撃は、偽善的に隠蔽されている婦人共有制の代わりに、公然たる正式の婦人共有制を設けようとするからいけない、と云うのがせいぜいである。それ以上云うまでもないことだが、現今の生産関係を廃絶すると共に、その関係から生じた婦人共有制、すなわち公私の売淫制度が皆消滅するのである。」

と云うのである。

そして、これらの思想から、婦人論を展開したものに、ラッポートがあり、ベーベルがある。

フリップ・ラッポートは、婦人の地位の変遷ないしプロレタリア的婦人思想に付いて云う。

「結婚制度が出来て、家族を継持するための食物を作る事は、もっぱら男子の仕事となり、女子は専心、家事に従事することになった。

かようにして、女子の活動範囲が狭められ、人生の必要的価値が減ずるに至って、その勢力は衰え始めた。

これは、純粋の経済的変遷であって、なんらの感情的理由も、その間には、含まれていなかった。勿論(もちろん)、感情とても変わるには変わったが、しかし、感情の変化は、経済状態の変化の結果として、起こったものであった。

近代に至るまで、経済状態は、単に、婦人に不利であったばかりでなく、益々、その不利な度を強めてきたのであつた。

過去数千年を通じて、婦人は、少なくとも立法及び制度を形成した階級では、まったく無勢力であった。これは、ひとえに、経済状態が、婦人を生産上の経済的要素としなかったからである。

かように婦人は、幾世紀を通じて、経済的の独立を持たなかった。

奴隷制度の時代が過ぎて、封建制度が起こり、農奴制の時代になったが、農奴制は、結局奴隷制の一変形に過ぎないので、経済的には、奴隷制度と同一効果を、婦人の上に及ぼした。

封建制度の次に来たのが、資本主義制度である。人間の発明的天才の結果として、生産力が増大し、ことに十五世紀末における、アメリカ大陸及びインド航路の発見以来、商業が盛んになって、蓄積された富が、快楽の資本から転じて、営利の具、すなわち資本となって、その資本の大集積と、その商工業方面における膨脹、ならびに労働力搾取の事業が開始された。

その事業は、蒸汽、電気、器械の発明のような、生産力を激増させた諸種の発明によって非常な援助がえられた。

この時代に於(おい)て、労働者の状態は改善せられ、彼等は自由に競争することが出来るようになると共に、前代の労働者の満たしえなかった趣味や、その他の要求を、満たし得るようになった。

が、生産力と、富の激増とに比例して、彼等は、事実に於(おい)ては、一層貧しくなった。そうして、かよう

な経済組織は、婦人の地位に、莫大の影響を与えた。

奴隷制度、封建制度、ギルド制度の幾世紀を通じて、婦人は、かつて経済的要素たる例がなかった。それらの生産組織は、婦人をして、時の経済に関与せしめる余地を持たなかった。

婦人は、人生の必要品を生産する上に、なんらの貢献をすることが出来ず、よし出来たとしても、それは自由な労働の主でなく、単なる労働の道具に過ぎない。最も無力な、最も従属的な補助者としてであるのにすぎなかった。

自然的競争制度、または資本制度が確立せられると、婦人は経済生活の渦中にまき込まれた。各個人の経済生活を一定不変のものたらしめていた一切の、予定されていた道は、消滅した。そうして、各人は自由になって、それと同時に、各自が、自分自身の生活を、維持しなければならなくなった。

してみれば、ここに婦人解放の運動が開始されたのは、実に自然な、当然な成り行きである。それはすなわち、新しい経済組織が、招致したのである。

婦人に完全な所有権を与えないでは、婦人の大仕掛けな利用を必要とする産業組織が、その目的を達する事は出来ないのである。

新しい生産組織が、これを要求したがため、婦人の自由は、いやいやながらにもせよ、とにかく与えられざるをえなかったのである。それは決して、心から喜(よころ)んでされた譲歩ではなかった。

婦人に、一切の人身権、及び所有権を与えたのは、決して男子の義侠心でもなければ、その進歩的、平等思想でもなかった。また、婦人の立場に、かような変化をきたしたのは、権利思想の向上でもなければ、婦人の熱心な運動の結果でもなかった。これがなくては、やって行かれなかったのである。

自由な男子労働者は、自由でない男子労働者よりも、優(すぐ)れた生産機関であることが知られた。そこで、

これが新しい経済組織の下における、経済的必要となるにいたったのである。婦人の場合もまた同じい。

以上に述べたように、経済制度も、他の総(すべ)ての人間の制度と同じく、変化するもので、婦人の地位境遇は、彼女らが、人生の必要品の生産に関与したかどうか、国民生活の経済的要素であったかどうかによって改善され、その勢力は、それに伴って、消長するものであることが分かる。

だから、婦人問題は、究極、経済問題であり、正義の感情などは、それ自身、経済事情の産物出会って、問題の解決には、第二義的の意味しか持たないものであると、結論しなければならない。

しかしながら、現在の経済的独立は、到底不可能のことに属すると、信じなければならない。なぜなら、婦人の経済的独立とは、個々の場合を意味するのでなく、一般的条件としての独立を意味するから。

詳しく云えば、ある婦人達が、何等かの方法で、独立した富者となることや、或(あるい)は他の婦人、または男子と競争して、高い賃金を給せられるようになることを、意味するのではない。

要するに、賃金労働は、決して、一般的独立を生ずるものではない。

ここに云う意味の、一般的独立とは、既婚未婚を問わず、肉体的にせよ、知的にせよ、自己の天性に応じた社会有用の仕事を、適度に務(つと)める、総(すべ)ての婦人に対する、充分な生活資料と、適宜(てきぎ)な慰安と、絶対的保護と、これに対する婦人の確実な権利を意味するのである。

こうした独立を、可能にするには、その前に、大きな社会制度の変化がこなければなるまい。」

そして、ラッポートは、マルクス共産主義の立場から、階級闘争による、社会主義制度の到来によって、女性は、経済的独立、自由、幸福な結婚生活を見出(みいだ)すと説いている。

二四

このマルクス主義は、方法の上で諸種の分派を生じたが、その主要なものとしては、ソビエト・ロシアで実践されたボルシェヴィズム（語源的には多数派主義――プロレタリア独裁主義）があり、またドイツその他の議会主義の社会民主主義がある。

前者では、ブルジョア独裁と反対に、プロレタリアートによって政権獲得後の過渡期を独裁し、資本家ないし資本家的生産に抑圧を加え、漸次（ぜんじ）生産力の増大によって、階級のない新社会に到達しようとするものである。ソ連で、女性の立場から恋愛論・母性論を唱えた人に、アレクサンドラ・コロンタイがある。

その恋愛論は、小説『赤い恋』や『三代の恋』」で見ることが出来る。特に、後者には、革命時代の過渡期的な態度が描かれていて、興味深いものがある。

女主人公ゲニヤの祖母は、因循な結婚生活から逃れ、ひたむきな恋愛に生きぬいた女性であり、その娘のゲニヤの母は、優（すぐ）れた共産党員であるが、三角関係に苦しんだあげく今は若い同志と恋愛関係に入り、同棲している。ゲニヤは、党員としての母を尊敬しているが、その恋愛に対しては軽蔑せずにはいられない。

と云うのは、ゲニヤが、母の恋人である若い同志と一夜の性交渉を持ったことに、母が苦しんでいるからで、ゲニヤにしてみれば、母の恋人であろうと、その他の何者であろうと、その場その場の気分によって、たとえば一杯の水を飲むように、交合するのみであり、そこには恋愛と云うような深刻な意味などはなく、ちょっとした気分や肉体の満足感だけがあるに過ぎない。

強いて云えば、党員としての大切な任務の合間に、その事で浩然の気を養い、疲れを忘れる――いわばそう云った一種のエンジョイとして考えられる程度である。いま彼女は、妊娠しているが、だれが父であるかは、関係者も多いし、分からないが、そんな事はどうでもよいことだと、云うのである。

ゲニヤの、この態度は、前章でちょっと引例したマルグリット作『ガルソンヌ』のなかのモニックのそれに似ている。この女も、自労の生活を、確然と二つに分けていた。一つは性の享楽のそれ――一番短く、一番惹きつける力のないものであり、他の一つは、本当の生活、すなわち仕事のそれである。

しかし、このような恋愛軽蔑の態度は、却って実践の場合、背負い投げを喰わされるのが通例で、肉欲耽溺や盲目的享楽主義に陥ることが多い。

それに、まだ過渡期で、母子保障の制度なども、未熟である場合、こうした無軌道恋愛は、むしろ反社会的行為でさえある。

すなわち、コロンタイズムは、ソ連でも、若い男女の上に、好ましくない影響を齎したので、革命の安定とともに、批判され訂正された。

ゼシカ・スミスの『ソビエト・ロシアにおける婦人の生活』によれば、スワルドロフ大学のザルキン教授などはコロンタイズムに対する最も有名な反対者であるが、彼の考えによれば、

「性は、未来の闘争を継続すべき強い健康な階級の生産手段としてのみ、プロレタリアに利益を齎す。」

と云うのであり、性生活に関する彼の十二誡は、

一、プロレタリアの間には、性生活の早熟は不可能である。

二、結婚前の完全な節制。結婚は社会学的に生理学的に完全な成熟の条件に於てのみ行なえ。

三、長い共同生活を営もうとする男女、ある点で共同の創造的努力に適する男女のみ結婚せよ。

四、愛するものに対する深い心からの同情と愛着の完成としてのみ性的行為を行なえ。

五、性行為はあまりしばしばなのは不可である。

六、恋は一夫一婦たるべし。変化を求むるよりは永続を求めよ。ゲニヤの哲学は病的である。

七、性行為を行なうたびに、小児出生の可能性あることを記憶すべし。産児の制限と堕胎は共に有害である。

八、恋愛関係には、戯れ、媚び、嬌態、その他の特殊な性的誘惑の分子を含んではならない。

九、性的選択は革命的利便を目標としなければならない。肉体的魅力は未開人時代の遺物である。階級価値と、子孫によって人類を浄化しようとする革命的共産主義者の純優生学的な問題は、当人の選択にあたっての考慮にほかならない。

一〇、嫉妬をしてはいけない……自分に劣った人に見替えられた時は、自己の優越を証明せよ。自分に優った人には譲れ。

一一、性的倒錯を行なってはならない。

一二、性は全然階級に従属し、決してそれと抵触せず、総てに於てそれを助けるものでなくてはならない。

と云うのである。

また、同書に、一九二〇年に行なわれた、レーニンとクララ・ツェトキンとの会見の際、性問題に付いて述べた次のようなレーニンの言葉がある。

「性生活の諸問題に対する青年たちの態度の変化は、主義の立場からであり、理論に基づく事は、云うまでもない。多くの人々は、彼等の態度を革命的であり、共産主義的であると云っている。彼等は心からそうだと考えている。けれど、この老人にはそうは思われない。私は何人にもかつて陰鬱な禁欲主義者ではないつもりであるが、この青年たち――それから時とすると彼等年長者もそうであるが――の、いわゆる「新しい性生活」は、全然ブルジョア的であって、ちょうど形をかえたブルジョアの売笑制度の家のような気がする。総てこれは、我々共産主義者が考えている自由恋愛とは、似つかないものである。

あなたは、共産主義者の社会では、性的衝動と恋愛要求との満足は、一杯の水を飲むように簡単で、些細な事であると云う、かの有名な理論は、よくご承知だ。実際、我等の青年たちは、あの理論で気を狂わしてしまった。それが多くの男女の禍となってしまった。それの信仰者たちは、それがマルキストの理論だと主張する。」「実際に、渇きは癒されなくてはならない。けれど常識ある人間が、普通の状態のもとに街に座って泥水を飲みますか?また、沢山の人が使ったコップで水を飲みますか？　しかし、それよりも、もっと重大なのは、それの社会的局面だ。水を飲むと云う事は個人的のことだ。けれど二人の人が恋をする。それから第三者たる新しい生命が生まれて来る。ここに社会の利害が入って来る。集団に対する義務が考慮されなくてはならない。」「私は、一分時でも禁欲を説こうとは思わない。共産主義は恋愛生活の満足から生ずる人生の喜びと、活気とを、齎(もたら)さねばならない。今日しばしば見られるような無節制な性生活は、私の考えでは、人生の喜びも活気も、齎(もたら)さないだけでなく、却(かえ)って反対にそれらを減ずる。革命の時には悪い。はなはだ悪い。」「あなたは、我々の若い同志Xをご存じだ。……立派な、非常に才能ある青年だ。それでも私は、あの男は将来なんの役にも立つまいと、危んでいるのです。彼はこの恋愛からあの恋愛へと、飛び歩く。それは政治闘争にも、革命にも、役立たない。……革命は、集団的にも、個人的にも、あらゆる精力の集中と緊張とを、要求する。プロレタリアは、前進しつつある階級です。性的放逸とか、アルコールとかによって、自分を眠らせることも、刺戟することも要らない。……プロレタリアに必要なのは、はっきりした意識です。」「けれど許してくださいクララ。私は私たちの話の要点から、すっかり外れてしまった。なぜあなたは私に注意しなかったのですか？　私の驚きが私に云わせたのです。我々の子孫のことが、私にはひどく気にかかるのです。彼らは革命の一部です。だからもしブルジョア社会の悪い徴候が、革命の世界に現れ始めたら――ちょうど何かの雑草の花を付けた根が広がるように――

遅くならないうちに、対策を講じるが良いのです。」

性生活に対するレーニンの憂慮と忠告は、適切であった。コロンタイズムは漸次訂正され、建設的性生活が次に来た。建設的と云う事は、常に、置かれた環境と段階とを、正しく把握して生かして行く態度を云う。

それと同時に、一方では、母子保障の施設が進められた。この母子施設ないし母子理論に関しての、コロンタイの活動は、大きいものがあった。彼女には、いくつかのこの種の優れた著書がある。その論旨は、エレン・ケイとは反対に、育児の社会化にあることが注目される。

この場合、婦人の立場はどうなるか。

彼女は云う。

「新しい婦人は、独立的な労働単位であって、その労働は、個人的家庭経済に奉仕するのではなく、社会的に有用で必要な事業のそれでなければならない。そしてそれは、今日一般的な趨勢である。一般の労働婦人は、幸福が直接彼女自身に、彼女の労働に、彼女の資格如何によって定められることを知っている。」

また云う。

「夫に対する恋または子供に対する愛が、労働を乱させるような女を、誰が仕事に就かせておくことを好むであろうか。」

彼女は、婦人が男子と全然等しい事情と価値に於て、生産者であるべきことを強調している。

彼女のその活動や理論は、結果に於て、多分に建設的であり得るけれども、恋愛論に見るような行きすぎが、母性論にも、若干認められないこともない。

なぜなら、新しい社会では、「母性」である事は、むしろ積極的に肯定され、そのあらゆる点が受け入れ

られ、保障されると思われるからである。ソ連でも「母性」への認識は、漸次高まりつつあると云われる。

我々女性の希望は、母性の否定ではなく、保障にある。それは、ケイのような、母性専門家への労賃としての保障ではなく、社会の連帯的保障として。――そして、そこでは女性は、かつて氏族時代にそうであったように、生産者であると共に、我が子を含めての育児の共同化の雰囲気に置かれるであろう。

ボルシェヴィズム（いわゆる共産主義）に対して、ドイツその他に、いわゆる社会民主主義が発生した。ドイツでは、ベルンシュタインが、『社会主義理論と社会民主党の政策』と題する書を公にして、修正論を唱えたのが最初とされる。

それによれば、小中資本家は、減少するよりは、むしろ増加し、巨大な資本集中は却って減少して、分散する傾向を示し、生産の集中必ずしも富そのものの集中を伴わない。のみならず、近代国家の社会政策的努力は、都市社会主義及び共同経営の傾向を漸次著しくする。

その意味から考えれば、社会主義社会は、政治的、議会的手段による、平和的進化によって到達すること、あえて難くはないと云うのである。

またベルンシュタインは、

「今日、唯物史観を奉ずる人々は、従来の物質偏重的態度を最初の形に於てではなしに、それの発達した形に於て把握することを余儀なくされている。彼等は、生産力及び生産状態の発達と勢力との他に、法律、道徳、各時代の歴史的及び宗教的伝統、地理的勢力、その他の諸事情に付いても、充分に参酌することを余儀なくされている。」

と云っている。

ドイツ社会民主党は、この修正派の精神によって、政治的デモクラシーを高潮し、もっぱら過激な直接

行動に反対の方針を取った。ただし、発生的――」従ってその成立に於(おい)て、この派は共産主義（ボルシェヴィズム）革命よりも以前のものとされる。

この派の婦人論者としては、ベーベルがあり、彼の『婦人と社会主義』は、あまりにも有名である。この書は、はやく修正主義以前に世に出たもので、主として一般マルキストとしての立場から、書かれたものである。

第一版は、一八七九年、ビズマルクの弾圧下に出版されたが、社会主義者や労働者は勿論(もちろん)総(すべ)ての階級の女性の間に非常な影響をもたらし、今日なお婦人解放のバイブルとされている。

内容は、過去の婦人、現代の婦人、国家と社会、社会の社会化の四篇にわかたれ、「被圧迫者たる事は婦人と労働者との共通の運命である。」と冒頭し、第一篇――特に古代における婦人の生活に付いては、モルガン、エンゲルス等の影響下に、母系社会その他が観察されており、第二篇では、資本主義下のあらゆる偽善的、矛盾的諸相――特に婦人の性生活上の真相が厳密に点検されている。第三篇及び第四篇では、社会主義ないし社会主義社会に関して書かれている。

二五

共産主義や社会民主主義等、これらのマルクス主義は、主として政権獲得を先決とするが、この他に、組合的な方法や基礎の上に、革命を企図する思想がある。

その一はサンジカリズムである。

サンジカリズムは、ベルグソンの創造進化論等の影響下に、フランスに勃興した運動で、語義そのものからいえば組合主義であるが、イギリスの組合主義等に比し、革命的、戦闘的色彩が著(いちじる)しいと云われる。

サンジカリズムの目的は、資本主義支配に対して、共同生活体としては生産組合の支配を実現するにある。

その手段は、議会主義的、立法主義的手段によらずに、一に、産業的直接行動の手段によろうとする。産業的直接行動は、国家ならびに法律の助けを借らないで、生産労働者階級の、資本家階級に対する直接的、正面突撃によって、資本主義社会を廃止しようとするのである。従って、サンジカリズムは、生産労働者の完全な団結と、その最後の目的を意識しての、たえせぬ闘争を唯一の手段にする。

労働者の資本家に要求する所、もとより賃金、時間等に関するいわゆる労働条件の問題もあるが、常に、最後の目的への到達を意識することを、忘れてはならないとする。

けれども、サンジカリズムには、一定の理想ないし到達社会のプランがない。

彼等は云う。

「労働階級の中にあって、自然的に成長した一の革命的勢力がある。労働者は、その力によって、知らず識らずの間に、新社会組織を造り出すべく駆り立てられる。彼等は実に世界における、創造的進化力そのものである。すでに創造的であり、進化的である以上、そこに確定的目的を定める事は出来ない。それは不断の進行であり、変化であるから。」

この攻撃的闘争の一般的手段は、彼等の直接行動である。直接行動には総同盟罷業があり、サボタージュがある。

さらに、他の手段として、ラベル及びボイコットがある。

ラベルは、組合が承認し、推奨しようとする商品に、一定の記号を付して、組合員に購買をすすめるもので、ボイコットは、企業家に反抗するために、企業家の製造する商品を購買しないやり方である。

サンジカリズムは、議会主義を一笑に付し去り、無産階級の直接行動によって、社会改革を達成しようとする点で修正派社会主義と正反対の立場に、その社会制度の内容を生産階級の組会自治に委ねようとする点で集産主義すなわち国家社会主義と正反対の立場にある。

このフランスのサンジカリズムに対して、イギリスには、ギルド社会主義がある。

ギルド社会主義は、生産者組合を本位とする経済組織を持って、社会制度の基礎としようとするのである。肉体、精神、いずれの労働者たるを問わず、総ての労働者を全国的に組織し、一切の産業を民主的に管理し、現社会の悩みの中心である賃金奴隷の制度を撤廃しようとするのである。

総ての社会成員は、なんらかの形で、生産労働に従事すべきものであるとする精神に立ち、消費者の利益が、企業者の利益のために犠牲にせられる現制度の害悪から、免れようとするのである。

ギルド社会主義の標語は、「産業自治」である。消費者としての国民自ら、自己の懐勘定によって、生産経営に当たろうとするのである。

その産業自治を高潮し、生産者組合本位の社会組織を基調とする点でサンジカリズムと類似する所はあるが、しかし、サンジカリズムは、徹頭徹尾産業組合の自由合意を、最後の社会生活の形式と見、国家と云う形式の存在を無意義とするのであるが、ギルド社会主義は、産業自治を高潮する一方、消費者の機関としての国家を認め、教育、芸術、衛生、国際関係の処理を、これに一任しようとするので、この点国家社会主義との中間に位するものである。（ここでちょっと断わっておくが、マルクス主義は、国家形式を一過程と見るのであって、この意味で、永久的、固定的な意味での国家社会主義ではない）

ギルド社会主義は、国家の機能を無視しない。けれども、一切の生産消費に関する管理を、国家に委ねようとする集産主義には反対する。そうかと云って、生産消費に関する一切の経営を、私人の私営に委ね

る現制度を肯定しない事は勿論(もちろん)である。

この他に、立脚点をまったく異にし、徹底的に倫理的基礎の上に立っているものに、無政府主義がある。いわゆる個人的無政府主義者にはスチルナー等があり、無政府共産主義者としては、プルードン、バクーニン、クロポトキン等がある。

プルードンは、国家的支配を否定し、人間としての自由を熱望した。その著『所有権とは何か』の中で、「所有権は盗奪である。」と云った事は、有名である。彼はまた「共産主義とは総体が各人を統治する事である。民主主義とは各人が総体を統治する事である。無政府主義とは各人が各人を統治する事である。」と云ったとも云う。

バクニーンは、革命的無政府主義者として、革命の化身と云われ、人間平等の精神に立脚して、一切の特権制度に反対した。彼の理想社会は、政府と云う組織を持たないばかりでなく、如何(いか)なる種類の制度を持たなかった。

「無定形主義」、「総破壊」は、彼が身を持って、世に宣伝した題目であった。

「現存の総(すべ)ての制度文物を否定するために、社会的、経済的、政治的の一斉前進、すなわち宇宙的革命を希望する。全ヨーロッパを。ついで爾余の世界におよぼし、遂(つい)に一個の石だも余す所なかれ。労働者に平和あれよ。被圧者に自由あれよ。一切の残虐者、横領者、監督者に死滅あれよ。詐欺され、使い果たされ、横領せられた、無数の貧困な人類をして、以後、絶対的自由に生活せしめよ。」

これは、彼が創設した万国労働協会の趣旨であった。

クロポトキンの思想は、『パンの略取』『相互扶助論』『農場、工場、仕事場』等で知られている。

彼によれば、社会は共同利害の観念から生じたものではなく、同類愛の意識によって成立したもので

ある。

社会の実相は、ダーウィンが主張したように、弱肉強食の自由競争の原則によっているのではなく、むしろ相互扶助の精神によって成り立っているのである。

社会の富は、たとえ何人(なんぴと)の手にあろうとも、それは一人または数人によって作られたものではなく、総(すべ)ての人の建設的才能の合成的生産物である。

社会一切の文化は、総(すべ)ての人の事業で、天然自然の一切は、総(すべ)ての人の利用のために存するものである。

それ故(ゆえ)に、万人は万人、生産者として、消費者として、平等の地位に置かなければならないと云うのである。

無政府主義は、支配がなく、圧制がなく、命令がなく、服従がなく、権力がなく、独裁がない自由合意の社会を理想するものであり、農工合体の自由連合の社会を確信する。そこでは、当然都会と云う搾取的形体は解体し、生産的小自治体が単位となって、古代の氏族連合のように、相連携して、平和な理想社会を形造るのである。

そこで、無政府主義では、そうした連合社会の一員としての倫理的性格を、現在に於(おい)ても持つことが要求され、唯物的、または強権的態度は、一切拒否せられる。

無政府主義の女性観ないし恋愛観とも云うべきものは、ゴールドマンとか、カーペンターとかに付いて、見ることが出来よう。しかし、それらの多くは、一般的イズムとしてよりは、それら個人の文学的表現として表されているのが特徴である。

カーペンターは云う。

「理想を云えば、完全な結婚は完全な自由を持ち、そこに何の条件もないはずである。だから、結婚に

は、何の約束もないのが最上で、かりに一年と限るにも及ばず、また必ずしも生涯を約束するに及ばないはずである。現在のような過渡期には、ある種の約束は必要であるが、それもあまり厳重なものでなく、それぞれ人と場所によって多種多様で、他日永久的結婚の予約と見做されることもあろうし、他日不幸なことが起こった時に面倒のないような救済法と見做されることもあろう。

しかし、いずれにしても、第三者も政府も、なるべくこれに干渉しないことにすべきである。」

彼は、愛情の契約を、当時者たちの責任とし、第三者や社会の干渉を排しているが、

「ただし、このような愛情の意義における社会の自由は必ず経済の意義における社会の自由と伴うものである。

すなわち、人間が遂に社会問題を解決し終わって、近代の大機械力による巨額の生産を、我々の共有とし、男女何人といえども、他人の奴隷であるものがないようになれば、売淫制度、財産結婚、その他愛情の障害物の原因は、皆悉く消滅に帰するであろう。

こうして、その経済上の自由社会に於て、人間の結合が、始めてその根本の真法則に従って行なわれるであろう。」

と云っている。

以上マルクス主義から、無政府主義に至る、諸種の革命思想を見たが、要約して云える事は、結局ベーベルが云ったように、「婦人は無産者と運命を共にしている。」と云う一事に他ならない。従って婦人問題——ひいて恋愛問題の解決もまた、究極的には、これら社会問題の解決に於て期待されるのである。

第十章　結び――貞操の復活

二六

私の恋愛論は、この章で終わる。私は、第一章―第三章では、主として自然現象としての恋愛を見、それを前提として、第四章以下に社会現象としての恋愛を見た。いま個々に付いて概観すれば、第一章から第三章では、恋愛及び生殖――それをめぐる両性の使命、すなわち恋愛の理想は男女の合体にあることを述べたのである。次に、第四章では、恋愛進化の鍵として貞操の性質と、人為的結婚制度の開始によるその死を見、かつその結果としての古典時代の倒錯恋愛を説いた。第五章には、封建時代における男性の寂蓼（せきりょう）と、その遊戯恋愛を見た。第六章には婦人の自覚と性生活の再生。第七・八章には、資本主義社会と恋愛生活の矛盾を描き、この時代の肉欲恋愛を観察した。そして、第九章で、その打開のための社会革命思想を点検し、本章で、貞操の復活を論じ、すなわち、これを持って終わるのである。

貞操とは、繰返し云うように、恋愛上の良心であり、自然意志ないし社会意志の表現としての自主的選択意識を根拠とし、次にそれが、男女相互の結合となる所の操持である。

この操持は、等しく男女両者に課せられるもので、すなわち、男女は各々（おのおの）、各々（おのおの）の選択本能に合致する対象を求めて、恋愛生活を営むべきであり、その時両者は、一体化への深い満足を感じ、従って、その愛は、相互の心からの尊敬と責任によって支えられ、維持せられることになる。

しかし、このような自主的意志とは別個に、功利的結婚制度が樹立され、女性の貞操を粉砕し、彼女をして無意志、無生命の生殖器具たらしめたことから、恋愛の悲劇が始まったのであり、その結果は女性を

退化させたのみでなく、男性をも孤独にした。

こうして、ヨーロッパの男性の間では、地上的、通俗的玩弄愛と並んで、天上的、プラトニック的恋愛（両者いずれもが、真実の恋愛でなく、遊戯恋愛である事は云うまでもない）に慰安を求めたが、大多数の男性は、女性の娼婦化に順応して、低級な漁色者となってしまった。

この性の墜落、堕地獄は、数千年間続き、もはや男女両者共に、その本能の中には、恋愛のそれは失われ、男女関係と云えば直ちに玩弄的肉欲のみを意味する（正しい性欲すらそこでは失われていたから）ほどになった。こんな状態のままで近代に入ったのであるから、「人間」とか「自由」とかの考えかたが、特に性生活に於て曲解されたのは、やむをえなかった。すなわち、貞操を持たない、貞操の尊さを自覚しない男女のいわゆる「人間的」な「自由恋愛」は、レーニンがクララ・ツエトキンに答えて、適切にも批評したように、なんら売淫行為と選ぶところがないのである。

ひいてそれは、性及び生殖をめぐる徳性の退化となり、頽廃となり、悪病の蔓延となり、種族の衰弱、社会の紊乱となる。

貞操の復活が、ここに必至的に要請されて来る。

二七

貞操の「復活」については、恐らくヨーロッパ、インド、中国等、早くから結婚制度や家父長制が始まり、従ってその歴史が、女性圧制のそれと同時に開幕されたような所では、多分歴史に示唆を求める事は難しいと思われる。

それに比べると、わが国は、半ば南洋的性格から、長く原始性を残し、ギリシア、ローマ等の結婚制度

乃至家族制に照応するものとしては、わが国では、ようやく室町以後に、これを見る（拙著『日本女性社会史』参照）事情にあり、従って、それ以前の、即ち上古の、わが恋愛史は、貞操の正常性――即ち男女の相互的貞操についての示唆を、充分に含んでいる点があると思う。

歴史を偏見なく見る者は、ヨーロッパその他の先進諸国のいわゆる優越を、何もかもと云うようには、信ずることは出来ない。特に、ヨーロッパ、インド、中国等における神話、伝説、上古史等を通じて見る女性の品性はどうであろうか。そこでは、明らかに娼婦的、反逆的なものが、主調をなしていると云える。これに反して、わが上古史Ij に於ては、まったくそれらと型を異にする母性的、平和的な性格が、一般的特性をなしているのである。最も1母性と云っても、後代のような個人主義的なものではなく、「集団の母」と云うような性質のもので、愛、謙虚、寛容等が、その基本となっている。

たとえば、いわゆる代表的美人の型にしても、彼ではクレオパトラや楊貴妃が挙げられ、我では小野小町とされるが、彼が通じて「悪の華」型で肉欲型であるに対して、我は明らかにその逆（彼女が肉欲型でなかっとは、俗に小野小町と云う異名が、性の不具もしくは極端な禁欲をさえ意味している事でも明らかである）で、内省に富む静穏な型の婦人であると思う。

この事は、神話に於ても、すでに現れてている。『旧約聖書』の「創世記」によると、エホバ神が、初めに天地万物を作り、次に人を作った。ここで男女関係を見ると、女は男の伴侶として男の肋骨から作られた。その女は、邪道に堕ちやすい性格を持ち、禁断の果実を食って、人類を永遠の不幸に陥れたことになっている。インド神話の創世記も、これと似たもので、トワシュトリ神によって世界の次に人が作られ、やはり女は男の性的伴侶として男に与えられたが、蛇のうねりとか、風の浮気とか、孔雀の虚栄とかの材料で作られている女は、いつも男を悩まし続け、墜落させることになる。日本の創世神話は、これらと逆

で、神が世界を作ったのち、その主宰者として男ではなくて女を作り、男はその性的伴侶ではなくて政治的協力者として、姉に対する弟として作られている。そして、姉のアマテラスオホミカミは愛の権化として性格付けられているのに対して、弟のスサノヲノミコトは、力の権化として考えられている。

このユダヤ神話、インド神話、日本神話は、成立年代から見るならば、日本の神話が最も遅れていると思われるが、その表現している内容から云うならば、却(かえ)って逆で、日本神話が一番古いと思われる。すなわち、日本神話は母系社会を反映しており、他の二神話は、すでに明らかに父系社会のものである。

畢竟(ひっきょう)、他の国の娼婦的、反逆的な女性が、それらの父系家族制に基づく強烈な女性抑圧から来たものであり、わが国の母婦型が、比較的久しきにわたる母系氏族制ないしその遺存に基礎するものであることがうなずかれるのである。

こうした理解の基に、わが恋愛史を見る時、そこには、明らかに正常な性生活が看取され、男女による相互貞操、相互尊敬の姿も、極めて自然なものとして観察されるのである。

たとえば『万葉集』に次のような歌が出ている。

吾妹子と二人吾が見し打え（○寄）する駿河の嶺らは恋しくめ（○も）あるか

立ちこもの立ちの騒ぎに相見てし妹が心は忘れせぬかも

筑波嶺のさゆるの花の夜床にもかなしけ妹ぞ昼もかなしけ

足柄のみ坂に立し（○ち）て袖ふらば家なる妹はさやに見もかも

常陸さし行かむ雁もがわが恋を記して付けて妹に知らせむ

葦垣のくまどに立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思ほゆ

道のべのうまらのうれに這ほ（○ふ）豆のからまる君を別れか行かむ

右の歌の作者たちは庶民で、方言なども使っているが、その詩品の高さは驚嘆に値する。その恋愛の公明で清純なことも、後代には見られないものである。

青楊(あをやぎ)の払ふ川門(かわど)に汝(な)を待つと清水は汲まず立所(たちどころ)平すも

君に恋ひうらぶれ居れぱ敷の野の秋萩しのぎさを鹿鳴くも

吾背子に恋ひてすべなみ春雨の降るわき知らに出でて来しかも

吾背子がかざしし萩におく露をさやかに見よと月は照るらし

見渡せば近きわたりをたもとほり今や来ますと恋ひつつぞ居る

ささ波のなみくら山に雲居れば雨ぞ降るちう帰り来(こ)わが背

君に恋ひしなえうらぶれわが居れば秋風吹きて月傾きぬ

これら名もない乙女達の歌を見れば、その感は一層深い。ここには美しい青春があり、しかもそれは生活の正しさと一致している。

すでに私有財産制も発育し、族長的貴族の男女が一般男女の上に権力を樹立し始めている時代ではあったが、財産権は、まだ室町までは、男子の独占する所とはならず、従って婚姻も、まだ自然的結合の段階にとまっており、特に奈良頃までは、妻問(つまどい)と云って、男子が女家に通い、または女家に一時滞在する、そして生まれた子は女家で育つと云う従来の母系型を持続していたのであるから、ここにはまだ男女間に不平等がない、男女は等しく各氏族の一要員であったわけで、こうした環境から、すなわち相互尊敬の恋愛関係も生まれたのであった。

平安時代になると、男女同居制が一般化して来るが、ここでもまだ男女の平等は保たれており、夫婦財産制は、別産制または共産で、協力的な生活が持たれ、ここに奈良の恋愛を通じて洗練された男女愛は、

さらに誠実な夫婦愛を顕現することとなった。それの集大成されたものが、謡曲『相生』に見るような夫婦一体観である。

この謡曲「相生」は、相生思想を語り、その理想の姿を、共白髪の尉と姥に見出している。それは、長い年月苦労を一にした挙句の絶対境であり、男女愛の完成であると見る所に意義がある。それは、ヨーロッパで、天上に於て要望されたものが、地上で、そして肉欲を超えた老夫婦によって、しかも生き生きとした相愛の姿で示されているものである。それは、宗教的な概念的なものではなく、それよりもなお具体的でありながら絶対的、信頼的なものである。

如上の奈良の若い男女の相互尊敬の恋愛、それの完成としての老夫婦の絶対愛は、男女平等の環境が生んだ美果であり、恋愛の正常性の見本であると、私は信ずるものであるが、これと並んで、わが国には、恋愛における女性の寂蓼現象がある。

それはあたかも、ローロッパで、女性の性が退化したため、男性の寂蓼現象が見られたが、それを逆にしたようなもので、時代の推移と共に、男性の性生活があつかましくなり、情痴化して行くのに対して、むなしく惹起された女性の孤独感であると云える。

それは、すでに奈良前後から見られるもので、葦屋処女（菟名日処女）、鬘児、桜児、真間手児名等にまつわる伝説なども、その一例を意味するものであろう。

葦屋処女は摂津の葦屋郷の生まれで、和泉の血沼壮士と、摂津の菟原壮士とが、共に婚を求めて譲らなかったので、女はそのいずれにも従いかねて、海に入って死んだ。すると二人の男もその後を追って、身を投げて死んだと云うのである。『万葉集』に、これに付いての大伴家持の歌がある。

古に、ありけるわざの、くすはしき、事と言ひ継ぐ。血沼壮士、菟原壮士の、うつせみの、名を争ふと、

たまきはる、寿も捨てて、争ひに、嬬問しける。をとめらが、聞けば悲しさ、春花の、にほひさかえて、秋の葉の、にほひに照れる、あたらしき、身の壮すら、ますらをの、語いたはしみ、父母に、啓し別れて、家離り、海辺に出立ち、朝暮に、満ち来る潮の、八重浪に、靡く珠藻の、節のまも、措しき命を、露霜の、過ぎましにけれ。奥墓を、ここと定めて、後の代の、聞き継ぐ人も、いや遠に、しぬびにせよと、黄楊の小櫛、しかさしけらし、生ひて靡けり。

これは、ヨーロッパの作品等に見える、一人の男性を、肉欲的な二人の女性が争うと云うようなテーマの逆で、こでには女性の寂蓼感と、恋愛以外もしくは以上の母性愛的な心づかいがあり、男女の道に無言の浄化をもたらしたのであった。

『平家物語』の清盛と祇王、仏御前などの話にも現われているように、結局男女関係における心操は、それが娼婦である場合ですらも、日本でははるかに女性が高いものに描かれている。この点、男が霊性を有し、女はほとんど清盛式の欲情に終始するとされるインドの宗教説話などとは、疑いもなく反対の現象であると思う。『源氏物語』などでも、中心人物の光源氏は好色に終始したけれども、その子の薫大将は、一段高い世界、一夫一婦的な真実を求めているようで、それに付いては、その相手の宇治の大い君のむしろ恋愛を厭ってさえいる非常に清い姿が彼を高めるのに役立っているのである。

平安時代は、荘園私有の上に、貴族の独裁制が樹立され、男性の性は益々下落し、情痴化しつつあった。好色な公達は、たやすく几帳の奥の女性たちの寝所に入り込む事が出来た。ここではまだ、婚姻制は不定で、自由結合が許されていたのである。

しかし、閨の中が、色を漁る公達の、物好きな遊びのために、このようにも踏み荒らされていたにもかかわらず、十二の例外はあっても、一般には、女性の魂の乱れを、見出す事は出来ない。盤惑、残虐、奢

修等の惑溺型の女性を見出(みいだ)すことが出来ない。

その置かれた姿は、すでに生気をなくして、受動的であり、屈辱的であるが、魂の高さはまだ失われてはいない。この時代の女性の手になった日記、随筆、歴史、小説等にも、それは伺がわれる。

時代が下がるに従って、現世の醜い武人や政治家たちは、女性の肉体を勝手にやり取りする事となる。その頃には、財産権は男の手に握られ、嫁入式結婚制度及び家父長家族制度が始まり、女性の恋愛は厳禁され、犯したものは殺害される。また、一方には、公娼制が秀吉頃から開設される。

女性の性も、これに応じて退化し、下落する。かつての知的な孤独感や寂寥(せきりょう)感は、ここに至ってまったく女の心から失いつくされ、それに代わって、怨執、嫉妬、痴呆、無責任、虫惑、淫乱、無知等の悪徳が競い起こり、女の性を邪。悪、陰険、愚昧とする江戸時代の不信的女性観が、必然の結果として誘起されることとなる。

男女の相互尊敬や相互愛など、今は跡形もなく、相互貞操の如(ごと)きは、人倫に悖(もと)柔弱なものとさえ見做され、巷では、いたずらに男性の情痴と、女性の淫狼もしくは卑俗とが、相照応し、かかる醜怪事を持ってのみ恋愛であると、人々は考えるようになる。

貞操性――」すなわち恋愛の良心は、ここに完全に亡び去ったのである。

二八

貞操の復活――今はこの事が、何にも増して先決問題とされねばならない。貞操とは、屡述のように、自己に付与された恋愛上の選択本能の操持である。それは、如何(いか)なる第三者なり、権威なりの干渉にも屈従しない、その良心の確持を意味する。

こうしてなされた男女の結合が、相互尊敬の恋愛となり、一体的完成の愛となる事は前項に見た通りである。

貞操は、まず第一には、愛の開始の場合に、そして第二には、愛の持続（結婚）の場合に於て、益々深さと大きさを加えるであろう。

人間は、決して本来乱淫なのではない。乱淫は、制度や、慣習や、イズム等の所産でしかない。

今日の社会では、依然売淫制ないし売淫的風習が盛行しているのであるから、性生活は、その避けがたい影響下に、はなはだしく汚毒せられ、歪曲せられている。

しかし、一方、こうした今日の社会の内部に、将来へのあらゆる芽生えや動きがある事は前章で見た通りであり、その芽生えや動きの上に、新しい性生活も、またその芽生えと動きとを、持たねばならないし、持つであろうと思う。

新興の勤労者層の老若男女こそは、意識的にも、いわゆる「自由恋愛」の名によって、遊戯的、玩弄的性生活に浮き身をやつしている、自滅の運命にある、腐敗した階層の老若男女から、自己を厳しく区別せねばなるまい。

我々の恋愛は、それ自身の貞操を中心とする誠意あり、責任あるものとなることによって、古い狼雑な性生活から区別されるものである。

また恋愛は、必ずしも性交を要しない。のみならず、性交を超越した老夫婦の「相生」的恋愛に於て、それは究極的な境地を持つのである。なぜなら、恋愛の目標は、両性の一体化にあるからであり、それは知的もしくは心情的な結合に他ならないからである。

けれども、それに反して性交（生殖）は、必ず恋愛の裏付けによってのみ、なされねばならない。妻帯

者のダンテが妻帯したままでベアトリーチェを恋愛し、中世の領主の妻が妻であるままでトルバドゥールの騎士を恋愛する事は赦(ゆる)されない。恋愛は恋愛独自であり得るけれども生殖は恋愛に於(おい)てのみなされねばならないからである。

恋愛なき相手によって生殖し、他の異性によって恋愛する――これらの中世的プラトニックラヴは、新恋愛においては赦(ゆる)されないのである。

そうした人々は、まず自己の侮辱的生殖を断絶すべきである。もし断絶が出来なければ、その相手――恋愛なき相手との間に、恋愛を培うべきである。

恋愛の有無に関する主観は、しばしば錯覚から成り立っていることが多い。恋愛は、昔の詩人が云ったようには相手を探すのに、至難なものではなく、恋愛は、すなわち培うことが可能なのである。

なぜなら、あらゆる異性の本能もしくは心情は、普遍的なものをその中に持っており、すなわち「可能」の繭芽を持っているからである。

相互尊敬と相互愛、ひいて一体化への渇望が相互を動かし、信念づけている雰囲気にあっては、大方の男女――大方の夫婦は、恋愛者たり得るのである。

恋愛の対象を側近に求めないで、遠い所、高い所にのみ求めるような古い恋愛観念は（恋愛を青年男女のものとしてのみ見る古い観念と共に）否定さるべきであろう。

- 『科学の詩人――ファーブルの生涯』（J・V・ルグロ著、椎名其二訳。叢文閣、一九二五年一〇月）所収。
- 旧かな遣いは新かな遣いに、旧漢字は新漢字に改めたが、旧漢字の一部はそのままにした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名を追加した。
- 理解を助けるために割注をつけた。
- 地名・人名のカタカナ表記はなるべく通行のものに改めたが、一部は底本のままにした。
- PDF 化には LaTeX 2_ε でタイプセッティングを行い、dvipdfmx を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs

科学談義

著者名　T・H・ハックスリ
訳者名　小泉　丹
二〇一七年一二月五日　初版発行

科学図書館
http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/scilib.html
e-mail:virgospica3141@gmail.com

株式会社インプレスR&D
著者向けPOD出版サービス
https://open.nextpublishing.jp/author/